



誰...?

誰...?

誰...?

アタは誰...?

みらくろー

うつくろー

きこって

もう見た(公)

全ては灰。

誰か  
見えない

前は何?

誰

## 登場人物紹介

---

インソムニア 能力 ダンス・マカーブル スキゾ・フレニア・フォリ・ア・ドウ  
不死身の肉体を持つ少女。

その実力から、能力者ギルドであるドーンにて有名な存在でもある。  
(他、登場作品、グロテスク&メランコリィなど。)

フェンリル 能力 フェンリル

黒白のゴシック・ロリィタの美少女顔の美青年。二刀流の剣士。

(他、登場作品、ヴァンパイア・パロール、セフィロト・ロードなど。)

コード 能力 クエーサー

能力者ギルドであるドーンの登録者の青年。

フィア・ゾーン 能力 アンシリーコート

巨体の犯罪者。ドーンから「賞金首」としてランクインされている男。

アンサー 能力 サーキュレーション

人型の怪物ルルイエの力と、フィア・ゾーンが謎の骨董屋から買った品物を素材にして生まれた怪物。

黒髪の少女の姿をしている。

ルルイエ 能力 ニュクスの母体

フィア・ゾーンが逃げた先の洞窟の中に封じられていた魔物。

デス・ウィング 骨董屋。人間では無い何か。

(他、登場作品。コキュートス、ソリッド・マリス、ヴァンパイア・パロールなど。)

<ドーン> 能力者組合。賞金首を始末すると報酬が貰える。その創設者はメビウス・リングという名の人間大の球体関節人形だと言われている。

原宿の街は今日も人で賑わっていた。

その雑踏の中に紛れて、裏路地を一人、歩んでいる者がいた。

原宿の名物といってもいいパフェを買って口にする若者の姿が、裏路地には見えた。売り子達が、商品の宣伝をしている。

彼はそういった景色を無視して、一人、歩みを進めた。

何度も、何度も、裏路地を曲がったり、同じ場所に戻りながら、ある一定の歩幅、位置に気を付けながら、歩き続ける。数十分程、そうしていた処だろうか。

辺りに、夕暮れ時になる。まだ、昼の二時頃だった筈だ。

彼は更に、歩みを進めた。

すると、何処からとも無く、蝙蝠が空へと飛んでいった。

気付けば、若者達の姿がまるで見当たらない。

雑踏に入る筈の人間の数も少なくなっている。

更には、あるべき洋服屋が無くなっていつている。

そして、更に数十分程、経過した頃だろうか。

明らかに、人間の世界ではない場所にいた。

骸骨で作られた栈橋が現れる。

彼はそれを渡った。

『裏・原宿』と呼ばれている場所なのだが、一体、此処はどうなっているのかは、誰も分からない。原宿の路地裏から行ける、不可思議な場所。

彼は更に、二時間程、掛けて歩みを進めた。

そこは、沼地だった。

沼地には、ぼろぼろに崩れた死体達が徘徊しており、更には泣き声上げ続けるバンシーの音が響いている。

気にしなければ、相手も此方に危害を加えはしない。

彼はそのまま歩みを進めると。

峠に差し掛かった。

そこの前には、一つの店が置かれている。

日本家屋にも似ているが、何処か西洋の建築物にも似ている。奇妙な家屋。

玄関を見ると、商い中、というプレートが掛けられていた。

彼は店の中へと入る。

店内には分けの分からない商品ばかりが陳列されている。

さながら、それは小さな博物館のようだった。

骸骨の模型。高級ブランドのドレス。栄光の手。絞首台の縄。ギロチン、ルーン文字が大量に彫られたナイフ。明らかに地球の地形とは異なった地図の記された地球儀。タロット・カード。魔導書。覗き込むと自分の姿だけが映らない鏡。万華鏡。宝石。血液を塗りたくって錆びさせ

た刀。カンタレラの瓶。海兔の瓶。角が八つもある雄羊の頭部の剥製。内臓をホルマリン漬けにした瓶。寄生蟲で描いた絵画。双頭蛇の串焼き。……それから、彼は生唾を飲み込んだ。白絹を纏った、幼い少女の剥製。

店の奥にはカウンターがあり、一人の女性が瓶や刃物の手入れをしている。

「おや、お客さん、いらっしゃいませ。何かお探しですか？ 得体の知れない物ばかりでしょうか？ 何か願いや望み、目的はありますか？ 用途によって、買うべきものをお教えしますよ。勿論、只の見物、冷やかしても一向に構いませんが」

彼は戸惑った。

女性は美人だった。

いや、絶世の美女だと言ってもいい。

此れ程までの美女を彼は未だかつて見た事が無い。

彼女に比べれば、そこら辺のアイドルや女優、モデルなどは不細工が衣装とファンデーションに作り笑いだけで背伸びしているだけのようには思える。

しかし、彼女の場合は、その美貌を鼻に掛ける所か、化粧っ毛は皆無で、ぼさぼさのろくに手入れをしていない、せっかくの長い金髪が、埃と煤で汚れている。

服装も何度も洗濯して色褪せた、元は紺だったであろう汚いニットのセーターを着ている。

そのアンバランスな感じに、彼は少し残念に思った。

「容姿はもっと気に掛けないんですかね。貴方なら、皆が放っておかないのに」

「ああ、いえ。……別に、私は男にモテたいとは思わないですし。そういった虚栄心とかまったく無いんですよ。言い寄られても、困るだけですし。貢物も必要無いですね」

「若い女性が、勿体無い」

彼女は唇の端を歪める。

「処が、別に若くも無いんですよ。人生にはもう飽き飽きしているくらい、生きています。そう見えないだけで、死ねないし、老いないし。まあ、そうやってただただ、時間を潰して生きていますよ、……あの、何か欲しい品物とか無いんですか？ こうこう、こういった用途に使いたいものを言うてくださるだけでいいんですけれども」

言われて、彼は、此処に物を買いに足を運んだ事を思い出した。

「死んだ人間を生き返らせて、欲しいのだ。女房だ。数日前に亡くなって、此処に来た。此処ならば、女房を死の淵から引き上げて貰えないかと」

「オルフェウスみたいですね。いいですよ、ご予算はどれくらいでしょうか？ それによって、品物も変わってきます」

男は指を四つ立てた。

「四千万だ。全財産だ、これで足りないのならば、借金してでも出そう。女房が死んだのは何かの間違いだ。転落事故だったのだよ、何かの間違いだ。寿命ではなかった」

女は唇に指を当てる。

「四千万？ それではとてもとても、甦りには程遠い。そして、少し期待していて残念ですが。現在の世界では死人を甦らせる力はありません。まだまだ神の域に達してはいない。だから、生

き返らせる、という事はそれだけのリスクや代価、あるいは調整が必要になる」

「金が足りないのか？ なら、借金してでも作る。此処ではローンとかは組めないのか？」

「それは無理です。借金して作ったお金は基本、禁止しています。特に、身を滅ぼすような借り方をしたお金はね。でも、いいでしょう。四千万、あれば。女房さんを連れ戻す事は出来ると思います。問題は貴方が彼女を愛し切れるかどうか」

馬鹿な、と男は叫んだ。

「女房なら、愛するぞ？ たとえ、アンデッドだろうが。ゾンビだろうが、愛してみせる。生き返らせてくれないか？ 私は女房と今すぐに会いたいんだ」

「ゾンビですか。でも、ゾンビはすぐ腐っちゃいますからねえ。人気商品なもので。防腐剤を今、丁度、切らしているから。そうだ」

女は棚の中から、何かを探した。

それは、数本の針だった。

それから、何本かの錐やメス、消毒液、ガーゼなどだった。

「これなんてどうでしょう？ 四千万どころか、四万もしませんよ。手術代含めて、三万五千ってところでどうでしょう？ そもそも、人間が活着しているという事はどういふ事なのか。それは他者の認識に依存して存在し、活着しているのではないだろうか？ ……というわけですね、貴方の大脳を弄くる事によって、女房さんの記憶を常時、貴方の頭の中から引き出して、貴方はつねに女房さんの幻覚と共に活着していくのはどうでしょう？ そうすれば、未来永劫、死ぬその瞬間まで、女房さんと共にいられますよ」

彼はそれを購入して、彼女から手術を施された。

……。

それ以来、彼はいつも女房の幻覚を見続けている。

何処でも一緒に、彼はいつまでも幸福だった。

そう、たとえ、精神病院の寝台の上にもなお。……。

……………。

そう、この暗黒の場所には、こんな店がある。

何でも、品が揃っている。

それが、たとえ、悪夢のようなものでも。

そんな、品々を求めて、今日もまた……。

次の客は、巨体の男だった。

「やあやあ、こんにちは、何でも揃っていますよ。何にします？」

彼女は屈託の無い笑顔を浮かべて言った。

十

エイジスはろくに台本に目を通せなかった。

今日はサーカスの舞台だ。観客が沢山、彼らを見に来る。

しかし、今日は何だか、乗り気では無い。

だが、プロフェッショナルとして、そんなものも、そつなく、こなさなければなるまい。サーカスは、曲芸あり、ミュージカルありの様々なショーを合成したものだ。

今回の舞台の内容は、グランギニョルだ。

残酷劇。連続殺人犯が女性を解体しまくって、そのシーンをマジック・ショーとして再現する。お客に楽しんで貰わなければならないと座長はよく言うが、エイジスとしては、自分が楽しければそれでよかった。

今回のサーカスのバック・ミュージックはインダストリアルらしい。

エイジスはそのジャンルの音楽には興味が無い。

ナイン・インチ・ネイルズみたいなものなのだろうか。

舞台裏から覗く限り、すでに観客は三分の一くらいが席に付いていた。

このサーカスは大人気なのだ。

わざわざ、遠くから見に来るものも沢山いる。

開演時間まで、後、二時間といった処か。

特に今日は、人気の踊り子やパフォーマーが多い為、確実に満員になる筈だ。

待ち時間の間、ポーカーに興じていた。

他の踊り子達は、女ばかりだが、彼だけが唯一の男だ。

そんな中、彼は女装して舞台上がる。

衣装は『ジルフィール』という水色と黄緑を基調にしたロリィタ・ブランドの派手な服だ。エイジスが好きなブランド、それを来ながら踊る。

まるで、本物の妖精さながらに踊る。

みな、彼に見とれる。エイジスはサーカスの人気者だ。

サーカスを背負っている目玉商品。

エイジスは、そんな自分が、大好きだった。

それから、しばらくして。

公演が始まった。

金属音が鳴り響き、沢山の処刑道具のレプリカが運ばれてくる。

そこで、殺人犯に扮した青髭のような男が、処刑道具で、女達を殺していく演出を始めた。それが、スタート。

その途中、エイジスを含めた踊り子達の踊りが始まる。

それが終わると、一人の女が現れる。

彼女は、殺人犯の次のターゲットという設定だ。

女は夜道を一人、歩いている。

殺人犯は、彼女を路地裏から隠れて見ていた。

……………

舞台裏では、エイジスは踊り子の衣裳を脱いで、しなやかなレオタードへと着替える。

次の次くらいには、彼得意の空中ブランコが待っている。

踊り子の女の一人が彼に声を掛けた。

「今日も頑張ってるね。貴方、此処のサーカスの目玉なんだから」

そう、彼の空中ブランコは、一番、観客の注目を受ける。

危険なシーンがいくつもあるからだ。

それは、エイジスでなければ、成し遂げられない。

「うん、みんなの期待に答えてみせる。いつも通りにね」

彼は自信に満ちた、少し挑発的な笑みを返した。

十

その女は『裏・新宿』のバーにて、オレンジ・ジュースを飲みながら、待ち合わせの相手が来るまでの時間を潰していた。

彼女は、編み上げの黒いカットソーを身に付け、レッグ・ウォーマーを吊り下げているブリーツ・スカートを着ている。髪の毛はシャギーの金髪に淡いレッドとパープルのメッシュを入れて、後頭部にはグリーンのエクステンションを付けている。

眼の周りは真っ黒に塗られており、唇にも黒いルージュが引かれている。両手の指には、無数の指輪が嵌められており、両耳には耳が引き千切れんばかりのピアスが下がっていた。

バーの中には数名の人間がいる。全員、『能力者』だ。

彼女はかちゃかちゃと、ストローを噛みながら、氷を回している。

「サンドイッチでも頼むかなあ？」

彼女は苛々しながら、マスターにハムエッグサンドを注文した。

その後、扉が開く。

細身の筋肉質をした、身長が百八十センチ程の革のジャケットに身を包んだ男が入ってくる。髪の毛は鴉の塗れ羽のようで、ゴテゴテの首輪を付けている。

否睡は溜め息を吐いた。

「で、お前が私の新しい同志なんだっけ？ この前の奴は四日で死んだぞ？」

黒髪の男は頷く。

「ああ、俺はコードと言う。お前が“インソムニア”か？」

「あー、そうだよ。私が不眠症の意味を持つ、インソムニア。うだつの上がないハンターだ。最近はお金に困っててね。何しろ、失敗ばかりが続いていやがるからさあ。マトモに働くつもりも無いし」

コードと名乗った男は苦笑した。

「確かに、『ドーン』は外れ者には格好の稼ぎ場だからな。命知らず、自殺志願者の外れ者にはな」

「ああ、お前もアレだろ？ きっと嫌な奴なんだろう？ そんな奴は、大抵、すぐに死んでいく。堪らないねえ。私は仲間の死だって嫌いじゃない。ん？」

言いながら、彼女は男を吟味しているみたいだった。

そして、思い出したように言う。

「で、標的の居場所は分かっているのかい？」

彼女は出されたハムエッグサンドを上品に食べる。

「ああ、これからその場所へと赴く。しかし、気を付けろ。例の謎の能力者によって、ハンターのうち、もう五名が殺されている。我々が倒さなければならない。既に、そいつの賞金は跳ね上がっている」

彼女はくちやくちやくと音を立てながら、オレンジ・ジュースの入っていたコップの中に残っている氷を口に流し込む。更に、音は不快になった。

「じゃあ、行こうか。その前にコード、お前の能力の概要を教えてくれないか？」

十

数時間掛けて、レンタカーで、その場所へと辿り着いた。

それは富豪の屋敷だった。

既に、この屋敷の主及び家族は皆殺しにされており、詰まる所、敵は此処に籠城を決め込んでいるみたいだった。

既に、数時間前に、新たに二名程の能力者が突入していたが、何らかの正体不明の攻撃を食らって、既に始末されている可能性が高かった。

インソムニアはフライド・チキンを食い千切りながら、何名もの能力者で取り囲んだ、その屋敷を見る。

コードは、基本的に彼女を支援する、という態度を取るみたいだった。

「さあてと、今から突入して行って、中の敵をとっととぶち殺して行けばいいわけか」

コードは頭を抱えた。

噂には聞いていたが。……。

このインソムニアとかいう女は、予想以上にキレている。

破滅的で、身の安全をまるで考えないと言われていたが、此処までとは。

「……戦略を練らないといけないんだよ」

「ああ？ そんなもの、必要なのか？ 中に入って、敵を探してぶっ倒せばいいんじゃないかよ」

要するに、馬鹿、なのだ。

それも、徹底した。

それなのに、彼女は生き残り続けて、それなりの戦績を残しているらしい。

「まあ、待て。偵察が必要だ、中でどうなっているかの」

屋敷を監視している他の能力者達も動かない。

彼らからすれば、誰か斬り込み隊長を送り込んで、様子を見たいという所だろう。

「いいか、聞け。敵の攻撃は得体が知れないんだぞ？ 既に、スナイパー系の能力者が狙撃を行ったが、そいつは何らかの攻撃によって返り討ちにされている。しかも、そいつの死因は何と、



自殺だ。一体、何をされたのか分からない。慎重に越した事は無いんだよ」

屋敷の周辺に、狙撃を撃退する為の何かのバリアのようなものを張っているのか？

.....彼はそんな疑問を抱いていた。

ふっ、と小馬鹿にするように、インソムニアが笑う。

そして、彼女はコードの静止も聞かずに、真正面へと向かっていった。

彼は仕方無く、場所を離れて、屋敷の窓に狙いを付ける。

窓からは此方の位置は見えない。

しかし、出来れば窓は避けたかった。

スナイパーの件もあって、窓からの攻撃は何らかの対処が施されていると考えていいだろう。

更に言えば、此処の屋敷それ自体に何らかの“結界”のようなものが張り巡らされているのかもしれない。

とにかく、少しでも敵の能力の全貌を探る事が最重要不可欠だ。

彼のパートナーとなった、インソムニアの方は、本気で玄関へと続く門へと向かっている。

もう、囷にしてみしても構わないだろう。

コードは人差し指を伸ばす。

そして。彼の指の先から照射されるものを、屋敷内に送り込んだ。

場所は、屋敷から少しだけ離れた排水溝だ。その中に、照射物を送り込む。

彼が照射物を送り込むと、反射した音響が彼にのみ伝わる。だから、遠隔操作を行っても、決して視界が途切れる事は無い。

壁などを通過する事も可能なのだが、その場合、照射物が屈折してしまう事によって、精密な空間把握を失う事になる。よって、なるべくならば、反響のみによって送り込んでいる。

排水溝を伝って、水道などから照射物を侵入させた。

彼の能力『クエーサー』ならば、此方を感知されずに、相手の状況を知る事が出来る筈だ。

インソムニアが向かった方向とは、別の部分に指先から出す能力を送り込んでいる。

インソムニアは、どうやら、既に玄関の中へと入っているみたいだった。

まだ、彼女は攻撃を受けていないみたいだ。

彼女を“中継地点”にして、敵の動きを探るという手も考えたが、それは止めにした。仮に、彼女が倒される事によって、こちら側にも攻撃が反射するようなものだったならばと考えると、余計なリスクを負えない。

あくまで、彼の場合は、彼女とは対象的に、慎重に、慎重に動く事を選んだ。

屋敷の地形は大まかには把握した。

一応、予めこの屋敷を建てた建築業者から、内部の地図を配布されていたのだが、それと比べて特に変わった様子は無い。

変わったところと言えば、死体が15体程、横たわっていて、そのうちの何体かは既に腐敗ガスが漂い始めているという事だ。この屋敷の主と家族、そして使用人に加えて、突入したドーン的能力者達。

更に言えば、彼は屋敷の敵を狙っている、他の能力者の人数も完全に把握していた。

山や森の中に、各々、隠れている。

三名いる。

それぞれ、暗殺や隠匿には自信があるように見えた。

直接的な戦闘タイプ、パワー・ファイター・タイプは既に全滅している。

彼らは待っているのだ、敵を倒せる機会を。

そして、おそらくは賞金の額の使い道でも考えているのだろうか。

.....彼は奇妙な事に気付いた。

敵の姿が見当たらない。

本当に、奴らはこの屋敷に潜んでいるのだろうか？

.....未だ正体不明の敵の“能力”と関係しているのだろうか？

敵は透明になっている、という事なのだろうか？

しかし、彼の能力は“音波”を操作するものであり、視覚的に情報を得ているわけではない。音を反響させる事によって、空間を把握する事が出来る。

.....ならば、既にこの屋敷にはいないのか？

インソムニアはまだ生きている。

彼女は平然と屋敷の中を進んでいる。

コードは彼女を捨石にするべきかどうか考えていた。

大体、こんな頭の悪い行動をする奴が悪い。

しかしどうせなら、彼女を使って、敵の正体を見極める、という方法を取った方がいいかもしれない。

彼女の独り言が彼の耳元に入ってくる。

「ああ、いねえなあ？ おい、敵さん、お前。出てこいよ。チキン野郎が。びびってんじゃねーよ？」

堂々と敵を誘っている。

勿論、その挑発なんかで敵は現れない。

彼女は死体が沢山、転がっている居間まで着いた。

そこには、この屋敷の住民達のなれの果てが転がっていた。

頭を、何か鈍器や刀剣のようなもので潰されている。

そして、その凶器らしきものは、そこら辺に転がっていた。此処の住民が所有していたコレクションの一つだ。

インソムニアはそれを見て、何かを考えているようだった。

そして、おもむろに何も無い空中の空間に手を振り翳す。

.....何をやっているんだ？

彼には分からなかった。

そして、数分後、彼女は気を取り直して、別の部屋へと向かう。

コードは気付いた。

敵は彼女を警戒している。

おそらく、これまでの侵入者は警戒しながら屋敷へと突入した為に、かえって標的にしやすかったのだろう。しかし、無防備そのもの、隙だらけの彼女を見て、攻撃するのに、逆に、戸惑っているのではなかろうか。

そう、それくらい、彼女の動きにはまるで恐れというものが無かった。

……只の蛮勇だろうが。コードは軽く溜め息を吐く。

そして、しばらくして、彼女は廊下で倒れている死体を見つける。

コードも、その死体には引っ掛かっていた。

死体は二つ。

ドーンからのハンター二人だ。

彼らはお互いの武器で殺し合っている。

片や、散弾銃。方や、複数のコンバット・ナイフ。

お互いが、お互いに致命傷を負わせて死んでいる。

幻覚や洗脳の類なのだろうか？

幻覚で仲間を敵の姿に見えるようにしたり、操って同士討ちをさせたり。

すぐに思い付くのは、そんな事だ。

インソムニアは死体を蹴り飛ばした。

そして、床に唾を吐く。

「ざまあねえな。私が仇を取ってやるから、そこで、寝てな」

彼女は死体を跨いで、ずかずかと別の部屋へと向かう。

キッチン、クローゼット・ルーム、バス、トイレをそれぞれ開けていく。

最後には、エントランス・ルームに来ると彼女は欠伸を吐く。

「もう、敵さん逃げたんじゃねーの？ アホらしい」

そう言って、彼女はそこら辺に腰を下ろして、携帯を打ち始めた。

どうやら、ネット・ゲームに興じているみたいだった。

コードは呆れて物が言えなくなる。

思わず、キレて叫びそうにもなった。

しかし。

……本当に、敵はこの屋敷から脱出したんじゃないのか？

脱出した気配は無い。

突入して行方知らずになっていた二人の能力者は、例の同士討ちをしていた死体だ。

そして、情報では、確かに“魔法使い”のような格好をした二人の人間が屋敷の中にいる筈だ。そいつらが、敵の能力者である筈だ。

先に突入した五名の能力者達は、屋敷の周囲で、刃物や槍などで刺されたり突かれたりして死んでいたという。

敵が脱出した気配は無い。

それこそ、幻覚だの何だかの手段を使って逃走していて、今はもぬけの殻なのだろうか？

……しかし、後から突入した二人は……？

コードは頭を悩ませていた。

しかし、丁度、事態を突き動かすような出来事が起こった。

コード同様、隠れていた能力者の内の一人が、痺れを切らして、攻撃を加えたのだった。

それは、水の濁流だった。

地面から、ぽつりぽつりと、水の粒が浮かんでいく。

そして、幾つかの水溜りを作り上げると。

一気に、水はうねりながら玄関を突き破っていく。

どうせ、屋敷の持ち主は全滅しているのだ。屋敷ごと破壊した処で、誰からの苦情も来ないだろう、そういった判断からだろう。

屋敷中に、水の濁流を撒き散らしていくつもりだ。

そして、それだけではなかった。

空気中の水分が密集して、雨粒へと変わっていく。

そして、雨粒は散弾のように放射して、屋敷中を槍のように貫いていった。

差し詰め、ウォーター・ランスとでも言った処だろうか。

そいつは既に、侵入しているインソムニアごと始末するつもりだろう。しかし、彼女は平然とした顔で、水の濁流の中へと潜る。

コードは舌打ちする。

音の反射が巧く掴み取れなくなっている。

代わりに、この攻撃を仕掛けた者の元へと、音波を飛ばした。

身長、169センチ。中肉中背の男だ。

茂みの中に隠れている。

彼は眼を疑った。

おそらくは、水を操作している者の方も同じ気持ちだろう。

水流を泳ぐように、何匹もの魚……鮭だろうか？ が泳いでいる。

滝を登るように、水流使いの元へと向かっている鮭の群れは、明らかに敵の攻撃以外の何物でもなかった。

中肉中背の男は舌打ちして、水流を止める。

鮭の群れは、山の中央で止まった。

水流使いとコードは目を疑った。

何と、鮭は次々に変形していき、モグラやバツタ、蜂などへと変わっていく。

……変身能力。

それも、肉体をバラバラにするように、複数の生物に一度に変化出来る。

おそらくは、屋敷の中では、発見されないような動物。

たとえば、………ダニとかに変身していたとすれば？ 無数のダニなんかに化けてしまえば、探しようが無いのではないのか？

水流使いは、何よりもまず、自分自身が逃れる事を考えているみたいだった。

おもむろに、水の刃を、動物達へと飛ばしていき、殺戮していく。しかし、動物達は、バラバ

ラになりながらも、更に小さなテントウムシや蝶などへと変化していく。

コードは支援しようかどうか、悩んでいた。

コードは気付いた。

周囲の温度が上昇している事に。

周りの大気が熱を帯びている。

水が蒸発し続けている。

水流使いは、自分の周囲を水の壁で纏うと、可能な限り、逃走を試みているみたいだった。そして、それを支援するように。

いや、……彼に代わって、倒すつもりで、新たな能力者は動いていた。

温度を上げている者の能力は至ってシンプルなものだった。

そう、多くの能力者が所有している。発火能力。

単純な攻撃だが、極めて実用的であり、対人における十分な破壊力を有しているものだった。

山々の木々が発火していき、次々と炎に包まれていく。

これで、動物達全てを焼き殺すつもりなのだろう。

……なるほど、炎使いと水使いのコンビなのか……？

水流使いの中肉中背の男は、十分なまでに遠くへ離れると、援護射撃として、何かを大気に向かって撒き散らした。

コードはそれらが何なのかを理解して、身を伏せる。

瞬間。

周囲が、勢いよく爆裂していった。

辺りに流れている大気の質を変質させて、熱を加えた事により、水蒸気爆発を発生させたのだろう。

これで、敵は倒せたか、そうでなくとも、かなりの重症を負っている筈だ。

しかし。

……。

爆発によって破壊された空間から現れたのは、今や人間の姿をしている、黒いフードとマントを身に付けた、魔術師風の人物だった。そう、魔法使いのような格好。服の生地には、ルーン文字のような言語がびっしりと描かれていた。

そいつは、手に護身用に使われるピロー・ソードという細く短い剣を持って、炎使いらしきスキンヘッドの男の頸動脈を見事なまでに切り裂いていた。

コードは舌打ちする。

水流使いの男も同じような表情をしていた。

倒せる一番のチャンスであるという可能性もあるが、敵は炎の中、何故か生きていた。やはり、相手は相変わらず、正体不明なのだ。

既に、コードと水流使いは逃走へと移っていた。

しかし、隠れていたもう一人の能力者は、絶好の標的とばかりに、魔法使いの姿の人物へと攻撃を仕掛ける。

それは、細い、強靱な糸だった。

物陰から無数の糸が現れて、魔法使いを締め上げていく。

そして、ついに、魔法使いの左手が締め千切られ、落とされた。

更に、糸は首にも食い込んでいく。

魔法使いの首からは、大量の血が吹き出していく。

魔法使いは唇から血を垂れ流しながら呟いた。

「見れないものを見れる、という幸せ。それをお前は知っている？」

何を言ったのだろうか？

コード達には分からなかった。

いや、それは。そいつの声、というよりも。

別の誰かが、言っているような。

そう、声は同じだが、確かに別の誰かの声だった。

そいつは言う。

「人間は絶対に死ぬ。その事実は覆らない。どれ程の功績を残しても、どれ程の栄華を掴んでも。不幸でも負けばかりでも。どちらにせよ、死ぬ。無になる。それはとても怖い。今日、お前はそれを知る事になるとすれば？ .....恐怖を克服したって無駄だ。何故なら、もうお前は目を逸らせないのだから.....」

魔法使いの首が、ぼきぼきとへし折れるような音が鳴る。

そして、次の瞬間。

ワイヤーは緩んでいた。

茂みから、一人の無精髭の男が飛び出してきた。

「み、水溜りに、も、も、もう一人.....、映って.....」

彼はまるで、混乱しているように周囲を窺っている。

そして、口元からは激しい吐息が漏れている。

そして。

魔法使いは、彼の脊椎部目掛けて、剣を押し込んだ。

ワイヤー使いの男は、それで絶命した。

コード達は絶句する。

「わたし、やったわ。姉さん.....」

「ええ、頑張ったわね」

茂みの影から、くすくすと笑い声が聞こえた。

.....敵は二人いる。もう一人が何処かに隠れている。

コードは音波をそこに飛ばして、居場所を見つけようとして止めた。直感的に、それが危険を伴う事に気付く。

魔法使いはピロー・ソードを引っこ抜くと、コード達の姿を見た。

そして、へし折れた全身が少しずつ戻っていく。ぽとぽと、と小魚などの小さな生き物が間接の節々から現れた。

念入りに隠れていた筈なのに、コードがいる場所は簡単に察知されたみたいだった。

「さて、あなた達も始末しないと」

魔法使いは歩いていく。

二人は既に、逃走に掛かっている。

その最中、コードと水流使いの男は、偶然にも同じ方向に逃げていた為に鉢合わせる。

お互いに、目的が同じなのを確認する。

異存は無かった。

敵を撃退するよりも、今はとにかく逃走に移るしかない。

全身を曝け出して、顔も目撃されるのも構わず、二人は必死で逃走する。

水流使いは言った。

「分かった事がある、あの敵の攻撃は……」

そこまで言って。

二人は気付いた。

周囲には、沢山の動物達が彼らを覗いていた。

野犬。鳩。甲虫。

間違いなく、敵が変化したものだ。

どうする？ 二人は同じように呟っていた。

すると。

上空から、何かが羽ばたきながら飛んできた。

それは、異様な怪物だった。

蛇のような頭が三つあり、蝙蝠のような巨大な翼が生えている。

しかし、何よりも異形なのは、その怪物の全身は所々から、白骨が露出していた。

「おい、お前ら乗れ。いくぞ！」

インソムニアだ。

コードと水流使いは迷わなかった。

迷わず、彼女の奇怪な姿の翼竜の背中へと登る。

そして、コードは音波を。

水流使いは、周囲の大気を操作して、簡単なバリアを作り出していた。

コードは言う。

「二人の敵の能力の正体が分かった」

ああ、と水流使いは頷く。

「一人は、全身を何体もの動物に化ける事が出来る。そして、もう一人は……」

水流使いが先に言う。

「何らかの、“精神攻撃”だ。精神に作用してくる攻撃、その正体が分からなければ、僕達は奴らを決して倒せない……」

インソムニアはへらへらとしている。

「私は平気だったんだけどな」

そう。

何故、彼女は無事だったのか、二人は理解し難いといった顔をしていた。

十

屋敷から数キロ程、離れた喫茶店に三人は隠れていた。

此処は、市街地だ。流石に、相手も無茶はしないとは思いたい。

水を使う能力者の名前は、アクア・シールと言うらしい。

名は体を現すのか、とインソムニアは笑った。

アクア・シールは長い髪の毛を幾つもバレッタで止めている、美青年とも言える男だった。服は両肩を出したカットソーを着ている。外見年齢は、コードよりも、少しだけ若いくらいだろうか。

コードは考え込んでいた。

インソムニアはへらへらと笑いながら言った。

「もし、私があいつらの立場だったら、私達をぶっ殺しておきたいんじゃないの？ これから、狙われるかもな？」

二人は息を飲む。

確かに彼女の言う通りだった。

「とにかく、これからは三名でチームを組んだ方がいい。敵の襲撃が来たら、すぐに連絡を取り合う事。可能ならば、なるべく共に行動した方がいいかもしれんな」

コードの発言を聞いて、インソムニアは不快な顔をする。

「どっからでも、掛かってこればいいだろ？ それとも、お前達は自分一人では対処出来ないのかよ？ 面倒くせえー。私は好きにやるよ」

そう言って、インソムニアは喫茶店を出て行った。

後には、彼女が食べたケーキの残りカスが溜まった大量の皿が残されている。

「これを支払うのは僕達なのだろうか？」

アクア・シールが困ったような顔をする。

「だろうな……」

コードは財布を取り出して、札束をめくっていく。

貯金はそれなりにあるが、手持ちは少ない。計算してみて、何とか足りる事を確認するとほっと、溜め息を吐く。

しかし。……。

敵二人の能力は一体、何なのだろうか？

片方は、変身。もう片方は、何らかの精神操作のように思えたのだが。

いや、それよりも、何故、インソムニアは攻撃されなかった？

二人はまた、陰気臭くなる。

あの頭がぶっとんだ女が味方に付いてくれた事は、精神的にも良い事なのかもしれない。



何故なら、コードとアクア・シール。

二人共、内気で少々、後ろ向きな性格をしていたからだ。

そして、水流使いは溜め息を吐きながら言った。

「僕はこの事件からは手を引くよ、何だか付いていけない、せっかく命を拾ったんだ。ああ、止めておく」

彼は青ざめた顔をしている。

足が竦んで動けない、といったような。

「茂みの中の奴と、眼が合った。……僕はやっぱり、無理なんだよ。さっきから、死んだ相棒の顔がちらついたり。かつて殺した標的とか。……実は、もう僕は敵の精神攻撃を食らっている。だから、僕は、もう……始末されているのかもしれない……」

コードは絶句する。

アクア・シールの顔から、冷や汗がだらだらと垂れ流れていた。

二人は言葉を失う。

そう言って、コードは彼とは別れた。

水流使いの彼は、ぶつぶつと独り言を唱えながら、店を出て行く。

コードは、一人、喫茶店に残って考え込む。

……………。

翌日、アクア・シールの自殺死体が見つかった。

彼は、自らの首や手首を刃物で刺したりしながら死んでいた。

十

フィア・ゾーンは何処にも所属していない傭兵だった。

大きな組織の後ろ盾は何も無い、しかし、何かの内戦には参加するし。

用心棒、時には暗殺の依頼も受けた。

そして、彼は連続猟奇殺人犯だった。

沢山の罪の無い人間を殺している。

表立っては、別の顔を持っているが、『ドーン』にて立派な指名手配犯となっている。

マズイ事に、今、ドーンからの複数のバウンティ・ハンターによって、追われていた。

彼はそれを快く思わない。

二日前に敵を巻いたのだが、左肩を負傷する羽目になった。肩は焼け焦げており、包帯ごしに痛みが伝わってくる。

撃退するのは、正直、容易いかもかもしれないが、いい加減、疲れていた。

何故ならば、表の顔である傭兵家業が成立たなくなったからだ。反りが合わず、激昂して、うっかり、雇い主を殺してしまったのだ。

何処かよい逃げ場所は無いものか。

彼はある場所を思い付いた。

それは、闇の存在、闇の魔物達が住まうとされる場所。

様々な世界、様々な次元の歪の中に存在する、闇の空間。

そこに行けば、隠れ場所は幾らでも見つかるかもしれない。

事実、有名な賞金首であった、畸形怪物のフリーク・リーチや亀竜のタラスクなどは、……最近になって、倒されてしまったらしいが。そこに何十年もの間、堂々と住居を構えていたらしい。

もっとも、そいつらはそれなりに強力であり、人外の姿すらしていたらしく、敵を振り返りにするだけの実力を充分持ち合わせていたらしいが、彼の場合はどうなのだろう。

しかし、そんなものは関係無い。

そう、何よりも。

その場所には、あの有名なドーンのリストに乗っている最強の賞金首の一人である、どんなハンターですら倒せなかった、『デス・ウィング』が堂々と自らの店を出して構えている。

風の噂によれば、デス・ウィングに気に入られる事が出来れば、あの怪物からの保護、守護を受ける事が出来るらしい。守って貰えるのだ。

フィア・ゾーンは、巨大な湖にまで辿り着いた。

此処は、大都市からかなり離れており、ある一定の歩幅、山道を迂回しながら行かなければ辿り着けない場所だった。

こういった“入り口”は様々な場所にあるらしい。

彼はその一つを見つけたのだ。

湖には、一艘の小舟がロープで縛られている。

誰が置いたのか分からない。

彼はロープをナイフで切ると、置かれていたオールで小舟を漕ぐ。

まるで、そこは冥界へと続いているように、霧で覆われていた。

追っ手は此処には辿り着けまい。

彼はほくそえむ。

しばらくの間、オールを漕ぎ続けると、ある場所へと辿り着いた。

腐敗臭が漂ってくる。

周りを見ると、ぶかぶかと溺死死体が浮かんでいる。

それらは魚達に喰い散らかれながら、半分、骨と化している。

どうやら、水流の関係で、何処かで捨てた死体が此処に流れ着いてくるのだ。

彼はそれらを見向きもせず、小舟を進め続けた。

そして。

遠くに、巨大な山脈が見えた。

空は何処までも暗い。

着いたのだ、この暗黒の世界に。

魔物達の住まう、魔界に。

彼は哄笑を浮かべる。

湖を離れると、広い広い草原が見えた。

この辺りには、幾つもの死体が腐らずに転がっている。

さながら、地獄の景色なのだが、何故だか居心地が良かった。

まるで、夢の中を歩いているような浮遊感。

彼はふらふらと、その草原を歩き続けた。

転がっている、ぐちゃぐちゃでバラバラの死体達も、景色を彩る粋なオブジェにさえ見える。

彼は気持ちよくなって、ポケットから薬物を取り出した。

そして、それにおもむろに火を点けて楽しむ。

そして、草原を歩いていると。

ぽつり、ぽつり、と影が見えた。

それは、次第に彼に向かって近付いてきた。

どうやら、猟犬のような姿に見えた。

そいつらは、一つ眼のモノや三つや四つも眼があるモノもいた。

裂けた口を開けて、鋭い牙を見せ付けている。

そんな怪物達が何体も集まってきた。

彼を完全に、獲物と捕捉したらしい。

口からは大量の涎を垂らしている。

彼は、口元から薬物の切れ端を放り投げる。

……上等だ。

猟犬の姿をした怪物達は一斉に襲い掛かってきた。

今や、数十体にも数は増えている。

その踏み込みの速さは、豹やチーターのそれを凌駕していた。

フィア・ゾーン。

彼の能力『アンシリーコート』が発動する。

彼は勢いよく地面に唾を吐いた。

唾の中には、小さな小動物が納まっている。ミジンコくらいの大きさだろうか。

それは瞬く間に成長していき、小さな毛の無いアルビノのネズミへと変化を遂げる。

ネズミ達は、飛び掛ってくる猟犬目掛けて、彼を守るように飛び跳ねる。

そして、それぞれ、猟犬の喉を食い破っていく。

しかし。

猟犬のうち、何体かは彼の肉体に牙を突き立てる事に成功した。

血液は吹き上がる。

そのまま、骨ごと食い千切るつもりだろう。

しかし、フィア・ゾーンはせせら笑う。

怪物達に、彼の血液が大量に付着したからだ。

その血液からも、小さな白い毛の無いネズミが生まれて、逆に怪物達を食いちぎっていった。

瞬く間に、ネズミは大量に生まれて、彼に襲い掛かる猟犬を返り討ちにしていく。

「ああ、……畜生、痛ってえなあ。こいつら、病原菌とか持ってねえよなあ？ 狂犬病とかだったら、シャレにならねえぞ？」

後には、ぼろぼろに食い散らかされた猟犬の群れが横たわっていた。

彼の生み出したネズミ達は、彼が能力を解除するまで、半径2キロに渡って、生物の放つ体温を察知して、昆虫以上の大きさの、動いて、活動を続ける生物を食い荒らしていく。

まさしく、中世における黒死病を撒き散らすネズミの群れのようなだった。

「これで、ハンターの奴らも返り討ちにしたかったんだがなあ。流石に、そうは行かないんだよなあ。追っ手も追っ手で、強いわ、しぶといわで……」

彼は散らばったネズミの居所、動きを全て把握している。

どうやら、此処から七百メートル程先に、沼地に隠れて洞窟があるみたいだった。

そこに、何か奇妙なものが潜んでいるようだ。

彼は取り合えず、そこへと向かってみる。

もしかしたら、住民が住んでいて、食糧に有りつけるかもしれない。

彼は気だるそうに、洞窟へと向かった。

そこは、硫黄の臭いが漂う小さな孔だった。

彼は中へと入っていく。

何か、得体の知れないものに対しては、ネズミが特殊な反応を示すように設定してある。

この洞窟、臭いし、湿っていて居心地が悪い。

彼はすぐに、興味を無くして此処を離れる事に決めた。

……………しかし。

突然、彼は金縛りにあったように動かなくなる。

まるで、何かに命令されているように身体が動かない。

いや。

その正体は、恐怖だった。

得体の知れない未知のものに対する恐怖。

それを直接、肌で感じ取っている。

しかし、逃げたいとは、何故か思わなかった。

恐怖心は、未知のものに打ち勝ちたいという意志へと変わる。

どうせ、これまでもハンター達からの戦いばかりだった。そうでなくとも、彼が雇われる戦場では、つねに未知の恐怖ばかりで溢れていた。

段々、逃げるのも馬鹿らしくなっている。

此処で、新たな危険な目にあつた所で変わらない。

自分自身の能力に絶対な自信があるわけではないが。彼には、奇妙な勇敢さがあつた。どんな相手を前にしても、生き延びてやろうという意志。

彼は自分を鼓舞すると、洞窟の奥へと進んだ。

さて、鬼が出るか悪魔が出るか。

何が出てきても、逃げ延びるか、あわよくば、……倒してやる、と強く思った。

洞窟の中は、石筍と鍾乳石に覆われている。

所々を、蛇やムカデが動き回り。小さな白いゴキブリの群れも見えた。

彼は地面に唾を吐く。

唾の中から、ネズミが生まれて、周囲にいる生き物達に向かっていく。

そして、洞窟内の生き物達を次々と食い殺していく。

静かになったな、と彼は一人呟くと歩みを進めた。

しばらくすると、洞窟は行き止まりになった。

あらかじめ、放っていたネズミ達の群れが、この場所に溜まっている。

そう、此処で何か奇妙な反応があったのだ。

彼は、その正体を知る。

「……何だ？ これは？ ……meth……メス……？」

それは、一本の腕だった。

一本の腕が地中から這い出ている。

それは、土とも人間の皮膚とも付かない、あるいはその中間のようにも見える姿をしていた。

そして、その腕の掌の中に、『meth』という文字が刻み込まれていた。

彼は首を捻る。

何かで、これを知っている。

何だったのだろうか。思い出せない。

それにしても、空腹だった。彼の従者達が幾ら腹が膨れても、彼の腹の中は一杯にはならない。

「ああ、面倒臭せなあ。肉が食いたい。この腕は食べそうにねえしなあ」

何か、こう、食べ物でも運んでくれる使用人でもいればなあ、と彼は考えていた。

彼の従者達は、小さなネズミだ。どうにもこうにも、小回りの利く命令は出せない。

「あー、召使が欲しいなあ。……………！」

彼は思い出した。

この腕に記された文字が何なのかを。

それは、何かの文献を暇潰しに読んでいて、書かれていたものだ。

確か、オカルト系のものだったか。

「この文字の最初に入るものがあつた筈なんだよなあ。何だったかな？ meth……メス、って刃物のメスじゃねーよなあ？ その前に何かくっ付けるんだっけ？ Aか？ Bか？ ……」

彼は自分の指の爪を見る。

指は五本。此処の、腕も五本の指をしている。

五つ。そして、こいつは土。

アース。アースは、最初の頭文字はE。

彼は、Eの文字を爪で、地面から生えた腕の掌に刻んだ。

すると。

地面から生えた、土塊のような腕が伸びていく。

そして、それはそのまま、人間が地面から生えてきた。

「ビンゴォ！ 確か、これって、“ゴーレム”の製造方法だっけか？ 思い出したぜ。ガキの頃に、クソ胡散臭い、オカルトの本を大量に読んでいて良かった。確か、emeth、エメトが“真理”を意味して。その頭文字であるEを消すと、meth……死へと変わって、ゴーレムは只の土くれに戻るんだっけか。じゃあ、逆に文字を足すと、死んだゴーレムは甦るんじゃないの？ って。正解だった！」

彼は無邪気にはしゃいだ。

そう、こいつはおそらく、伝説にあるゴーレムに見立てた仕様を取っている、“能力者”に違いない。酔狂な奴だ。

そいつは、土の中から現れて完全な人間の姿へと変わる。

どうやら、若い男だった。余りにも精緻で整い過ぎた顔をしている。

衣服は身に付けていた。

布切れのようなものを、胸と腰に巻き付けている。

肉体の所々は露出しており、強い色気を放っていた。

フィア・ゾーンはそれを見て、思わず、舌なめずりをする。

「おおっ、いい男じゃねえーか？ 俺はストレートだが、男色家に目覚めちまいそうだが。なあ？ いい男。てめえ、俺の仲間になってくれねえか？ お前、能力者なんだろう？ 見た所、ドーンのハンターにはまるで見えないし。こんな所で何やってるんだよ？」

瞬間。

フィア・ゾーンの全身が吊り上げられる。

首を掴まれたのだ。

彼の巨体を、細身の男は軽々と持ち上げて、洞窟に叩き付けた。

男は不明瞭な声で、喉の中に泥や砂が絡まったような不明瞭な声で話す。

「僕と俺と私、どれがいいと思う？ 自らを指す一人称。ちょっと、どれがいいかなあ？ 口調も迷っている。……人間の言葉は煩わしい。敬語、略語、語尾、面倒臭いものばかり。二人称？

はどうしよう？ 君、貴方、お前、貴様。うーん、そうだね、お前の口調は何か嫌いだね。じゃあ、逆にしようか。私、これはいい。お前は、私に対して、お前って言ったっけ？ ……じゃあ、もっと相手を蔑むように、貴様とかどうだろう？ 自らを指す場合は、私。他人を指す場合は貴様。これでいいかな。気に入った。口調は、まあ、今はいいか……」

男はフィア・ゾーンから手を離す。

フィア・ゾーンはごほっごほっと、激しく咳き込んだ。

「お前は、……何だ？ てめえ、せっかく人が親切に起こしてやったのに？ それか？」

フィア・ゾーンはどうするべきか迷った。

彼は味方に為り得るか？ それともやはり敵にしかならないのか？ それとも、あるいはフィア・ゾーンに対して、まるで興味を示さないのかもしれない。

取り合えずは。……。

「お前、名前あるか？ 名前は何て言うんだ？」

「名前……？」

彼は腕を組んで、悩んだ。

「名前……………そうだな。私の名前は、……『ルルイエ』と言う。多分、それが私の名前なんだろう。処で、貴様は何だ？ 貴様にも名前はあるのだから？」

「俺はフィア・ゾーンっていう。別にフィアでもいい、なあ、お前、俺の友達になってくれないか？ 俺は悪い奴らに追われている。なあ、友達になって俺を守ってくれ。お前が何者なのか何て、この際、どうでもいい。俺は今、一人だ。仲間がいない。なあ、俺の仲間になってくれないか？」

フィア・ゾーンは叫ぶように言った。

それは本音だった。

今、彼には仲間と呼べる者がいない。

ルルイエと名乗った男は、それを聞いて、何か考えているようだった。

唇に手を当てて、眉を顰めている。

「仲間か……。どうやら、貴様は“生者”のようだけれども。生者が私の仲間になるのか。……………まあ、いいかな。それで、私にどうすればいいのかな？ 守って欲しいと言ったが。私には何の見返りがあるんだ？ ……………欲しい見返りなんて別に無いが……」

フィア・ゾーンはそこで言葉に詰まった。

そして、彼も彼で考える。

「なあ、欲しいもの、無いのか？ 何か」

「欲しいもの。……………私が欲しいものか。そうだな。……………目的、かな？」

「目的……？」

「そう、目的だ。貴様らが求めている、生きる目的。生きていく為の目的。私には、それが無いんだな。困った事に。私はこの世界で何をすればいいのだろうか？ せっかくだから、決めてくれないか？ 貴様がだ。勿論、貴様の命を守る、なんていう下らない事なんて、止めてくれよ？ 私にはもっと大きな目的がある筈だ。その為に、この世界に“召喚”されたんだと思っている。この世界に“生誕”したんだと」

こいつは何を言っている？ フィア・ゾーンはいぶかしんでいた。

何というか。

彼の話に吟味する限り。

まるで。

たった今、こいつは“生まれた”かのような。

ゴーレム。

泥から作られた人形。

ひょっとして、本当にこいつは……？

「もしかして、お前を“作った”奴はいるのか？」

ルルイエは笑った。

「ああ、いる。そいつらは双子だった。きっと、私の元へと戻ってくるのかもな。だって、私の

一部を肉体に融かす事によって、新しい命を手に入れたんだから。きっと、私無しじゃ、彼女達は生きられないんじゃないかなあ。だから、彼女達は戻ってくる。でも、困った事にあの二人は、私に目的を与えなかった。その役割は貴様が決めるんだ。どうだろう？ それを決めたら、貴様を守ってやる。どうだ？」

フィア・ゾーンは爆笑した。

腹を抱えて笑い転げる。

「そいつは傑作だ。お前、本当にゴーレムなのか？ 泥人形。そうだなあ、何がいいかなあ。金、女、そんなものは手に入れてきた。でも、それじゃ駄目だ。権力を手にしたい、ってのもいいかもな。でも、そんなもの面倒臭そう。しかし、お前、本当に何者なんだよ？ 本当に何も知らないのか？」

ルルイエは鼻を鳴らす。

「“生まれなかった可能性”」

「なんだそりゃ？」

「そうか。貴様らはこの世界のルールは分からないんだな。いいか、この世界というものは、偶発的により誕生した可能性と、誕生しなかった可能性。誕生した次元と、誕生出来なかった次元が多重に重なり合う事によって形作られている。生まれなかった歴史、生まれなかった世界。しかし、時間、空間、それらを超越して、“誕生出来なかった歴史”も、“誕生出来なかった世界”も確かに存在するんだよ。私は“そこから”来た。生まれたんだ、この世界に。双子の女達が、私を誕生させた。しかし、私には目的が無いんだ。この世界に対しての」

フィア・ゾーンは何を言っているのか分からなかった。

この世界の誕生？

彼にとっては大層な話だった。

しかし、ルルイエは本気の眼だ。だから、本当の事だろう。

「ああ、つまり、お前は本当は生まれられなかった者なんだけれども、ある理由で、生まれる事が出来て、ひょっとして、居場所が無いって事？ この世界に」

「そういう事になるな……」

「なら」

にやり、とフィア・ゾーンは笑う。

そして、小太りの腹を摩った。

「なら、この世界をお前の居場所に変えちまえばいいじゃねえーの？ 何もかも、支配してしまえよ。お前がさあ。お前が王様になるんだ。俺はお前の側近になってやるよ、楽しそうじゃねえか？ それを目的にしちまいな」

ルルイエはふむ、と頷く。

「言う通りだ。私が支配しよう。そうだな、私は……手に入れよう、この世界を」





エイジスは『白骨山脈』を登っていた。

険しい山道だ。

この山は、ありとあらゆる動物達の骨でのみ組み立てられている。

大量の骨によって、道が、木々が崖が作られていた。

彼は明らかに人間が通れるような場所で無い、骨々が針地獄のように突き出た場所を、巧みに進み、歩みを進めていく。

その姿は、サーカスの踊り子のそれだった。

華やかな衣装に包まれながら、彼は猿のように山を登る。

そして、数時間掛けて頂上へと辿り着いた。

そこで、エイジスは叫んだ。

「おーい、いるかい？ ブレイズ。いるんなら、返事しろよ！ サーカスの人員が不足しててさあ、ちょっと、スケルトンを何体か貸して欲しいんだけど」

エイジスの声を聞いて、暗い雲の中から何かが現れる。

それは、戦闘機の轟音のようにも思えた。

何か巨大なものが羽ばたいている。

それは、ゆっくりと山脈の頂上へと下降していく。

それは、まるで聖書のサタンのような翼を広げていた。

詩人ブレイクの絵画に登場する、悪魔のような翼。

そいつは、ワニにも蛇にも似た頭部に、蠍の尾のようなものが付いた長い尻尾が生えていた。

両手は無く、脚の鉤爪が鋭い。青黒い皮膚をしている。

そう、そいつは巨大な翼竜だった。

所謂、ドラゴン。飛竜、スカイ・ドラゴンとかいう奴だ。

ワイヴァーンとも呼ばれている、有名な怪物。

そいつは、エイジスを見るなり、面倒臭そうな声で言った。

「お前、俺様に何の用だよ？ こっちは最近、寒くなってきて苛々してるってのに。よく、こんな面倒臭い所まで来たよな？ その足で。てめえ、今、俺様は音楽の鑑賞タイムなんだよ、どっか行ってくれないか？」

ドラゴンは、酷く人間臭い口調と悩みと趣味を話して、さも、うざったそうに彼を見据える。

「だから、スケルトンを貸して欲しいんだよ、此処の山中に住んでいる。動く骸骨達を。サーカスで人手不足でさあ。今回の劇は沢山の人員がいるんだけど、全然、足りていない」

「ああ？ そんなの、屍峠で徘徊しているゾンビ共、使えばいいんじゃないの？ あいつら、何で腐る程いるんだろうな？ 誰か増やしている奴でもいるんかねえ」

「ゾンビは駄目だね、臭いから駄目だ。観客が逃げていく、あれらは香水でも誤魔化せない。スケルトンだったら、上から鎧と特殊メイクで隠せる。台詞もいらないし。劇の内容は、王様を凱旋させるんだけどさあ。座長が、なんか、ぱあーっと、沢山の役者を出したいらしくて」

「だから、何で、俺様が協力しなけりゃならないんだ？ 大体、お前らのとこのサーカス。俺様は小屋に入れなから、入れてくれねーじゃねえか。だから、腹立つんだよ」

エイジスは悪戯っぽく笑った。

「『ソナタ・アークティカ』の欲しいアルバムがあるんだろう？ 『アングラ』のも、それ上げるから駄目かな？」

「日本製のも付けてくれ。『黒夢』の中期の奴がいい」

「OK、調達してくる」

それで、交渉は終了だった。

がちゃがちゃ、と白骨の山が胎動するように動いていく。

すると、所々に転がっている骸骨が立ち上がっていく。

竜の牙から作られた、動く骸骨達。

ドラゴン・トゥース・ウォーリアーという奴。

ブレイズはこの辺りの骸骨達に、自身の魔力を巡らせて、スケルトンの兵団を作っていた。

エイジスは、飛竜に礼を言う。

今回のサーカスは、大成功だろう。そう考えながら、山脈を降りていく。

十

「力が欲しいんだ、俺はもっと強くなりたいんだ。そして、俺は『ドーン』で狩人をしている。俺は強くなって、自分自身に打ち勝ちたい」

二人の男がいた。

一人は、長身で何処か尖った刃物を思わせる容姿をしている。

彼は人気の無い、街中のマンションの一室を借りて寛いでいた。といっても、彼は此処に住んでいるというわけではない。

あくまで、此処は彼にとっては仮住所であり、家賃だけ払って、年に数回、来るか来ないか、という使い方をしている。

彼は、半分くらいは根無し草のようなものだ。

たまに、大きな仕事が入ってきた時のみ出動する。

それ以外では、彼が一体、何をやっているのかは余り知らない。

これといった問題を特に犯すわけでもないのに、彼の監視は、いつしか手薄になっていった。

.....彼は元凶悪犯罪者であり、アサイラム側はずっと男を監視し続けていた。

そう、今では。この男が、一体、どのような思考を持ち、行動を起こしているのか、アサイラムは分からない。.....

.....

その男の前には、彼よりも一回り程、若い男が無断で彼の部屋の中に入ってきて。一方的に、彼に問い掛けているという形を取っている。

しかし、此処の住居の主は、その行為をまるで無礼とも思っていない。

そして、投げ遣りな口調で言葉を返す。

「ああ？ ……………きっと、本当はお前は倫理とか道德なんてクソなんだと思っているんだろう。何で、狩られる側じゃなくて狩る側に甘んじているんだ？ 所詮、狩る側って聞こえはいいけれども、飼い犬でしかないんじゃないのか。だから、お前はお前が見ている、“壁”を乗り越えればいいんじゃないか」

「……俺なんかが出来るのかな？」

「出来るさ。お前なら出来る。簡単に出来る。だって、お前もこの世界のルールとかって、とつても下らないんだって思っているんだろ？ なら、資格って奴があるんじゃないかあねえのか？」

男は真摯に彼の言葉を聞いていたが。

当の部屋の主は、面倒臭そうだった。

それっきり、彼とは会話をする事を止めたがっているかのようだった。

「なあ、俺は一体、何をすればいいと思う？ ……教えてくれ“暴君”」

会話は噛み合っているようで、噛み合っていない。

男はそれを十分に承知していた。

それなのに、男は会話を続けようとしている。

ちなみに、二人は初対面だった。

訪ねてきた男の方は、部屋の主の事を情報でしか知らないし、“暴君”と呼ばれた男は、彼とは何の見識も無かった。

しかし、住居不法侵入とも呼べるその行為を、部屋の主は完全に黙殺している。

更に言えば、男は彼の部屋の錠を壊して入ってきたのだ。これはもう、どうしようもなく、言い訳が成立たない。

しかし、明らかに、そんな瑣末な事はどうでもいい、とでも言わんばかりに。

「で、お前は誰で。俺の事はどういう風に知っているんだ？」

暴君は男に興味を無くして、側にあった本棚から図鑑を取り出す。

そして、それをパラパラとめくって、物思いに耽っているようだった。

読んでいる本は、鉱物図鑑だ。カラフルな色彩が紙の上を踊っている。

部屋の主は、それに魅入られるようにページを開いていた。

まるで、侵入者の存在など初めからいないかのよう。

彼は窓を開いた、夏の風が入り込んでくる。

この部屋には冷房が無い。

別に彼には冷房など必要無いのだが、やはり風というものは心地が良い。

「……………先日、俺、同僚を殺してしまったんだ。罪には問われなかったんだけどさ。大きな獲物を倒したから、その分け前のいざこざで。……、同僚は獲物によって殺されたって偽装したよ。……俺は晴れて無罪放免、『アサイラム』なんかに収容されなかった」

侵入者はぼつぼつと語る。

そして、まくし立てるように言った。

「なあ、暴君！ お前は“純粹悪”なんだろう。罪の意識が先天的に欠落しているんだろう？ 理由

の無い殺人行為も平気で行えるんだろう？ 俺は罪悪感で潰れそうなんだ。お前なら、……貴方様なら、何か救いの言葉を持っていないだろうか？ ……」

彼は高層ビルの中へと入ってくる風に当たりながら、まどろんでいた。

そして、思い出したように言う。

「脳の一部でも切り取ったらどうなんだ。前頭葉を切除すればいい。それで楽になれる、あるいは、脳を溶かすドラッグを頻繁に摂取して思考を破壊されたジャンキーになればいい。まあ、俺には関係の無い事だがな」

そう言った後、“暴君”はベッドの中で眠ってしまった。

男は、一人、残されたようで、とぼとぼと部屋を後にする。

そして、破壊した錠前を直す。

その後、家に帰り、いつも飾ってあるショットガンで頭をぶち抜こうかと考えたが、何だか滑稽じみていたので止めにした。

罪を背負って、生きていくべきなのかもしれない。

しかし。しかし、暴君には。

彼とは、また再び話せないかと思った。

十

「ほお、すげえ、じゃねえか。こいつはたまげた、そんな事が出来やがるのか」

ルルイエは、洞窟内を泥状にすると、沢山の彫刻を作り出していた。

そして、椅子やテーブル、寝台などを作っていく。

彼が触れた岩は泥状に変わり、彼の思う通りに変形していくのだ。

「そのまま、此処を御殿にでも変えちまえばいいじゃねえか」

ルルイエは黙っていた。

そして、まるで睨み付けるように自らが作ったものを凝視する。

「駄目だ。これは。私の力はこんなものか……」

「いやいや、すげえんじゃねえの？ そうやって、創造してさあ、ひよっとすると、まだまだ色々な事が出来るんじゃねえの？」

ルルイエは、作った家具を蹴り壊していく。

「駄目だな、おい、貴様。……写真という奴を知っているか？」

フィア・ゾーンは笑った。

「写真？ 写真って何のだよ？」

「写真は写真だ。なるべくならば、沢山の写真が載っているものがいいな」

「はあ？ そりゃ、図鑑とか資料とか言うんじゃねーのか？ それともチラシか？」

「何でもいい、持って来い」

「はあ、それより俺は腹が減って動けねえんだよ」

ルルイエはフィア・ゾーンを蹴り飛ばした。

「いいから、行け」

巨体の男は、へえへえ、と面倒臭そうに言いながら、洞窟を出て行った。

十

フィア・ゾーンは臍物の転がる草原を離れて、しばらくすると峠に出た。そこには、沢山の、肉体が腐ったゾンビの群れがうようよと蠢いていた。……あいつらは流石に食えねえしなあ。……。

しばらく、歩いていくと、一つの建物が見つかった。

峠の中で、かなり目立つ場所にそれはあった。

それは、洋風の館にも見えて、日本式の漆喰の屋敷にも見えた。

いや、始めてみるタイプの独特の造りをした建造物。

彼は息を飲む。

元々、彼はこの建造物を探しに来たのだ。

簡素なプレートが下がっていて、どうやら此処が何かの店だという事が分かる。

彼は扉を開けて中へと入った。

中を見回す。

埃臭い。

フィア・ゾーンは軽く咳き込んだ。

店内には奇妙なものが沢山、置かれている。

五方星とルーン文字のびっしりと描かれた髑髏。畸形生物の剥製。謎の生物の大きな牙。

それから、ホルマリン付けにされた人体の各パーツ達。謎の文字で書かれた書物。

幾つもの色が混じらずに、幾つもの層になった液体の入った瓶。

びっしりと札の貼られた刀。ごそごそと不快な音を立て続ける壺。

そして、店の中央では、一人の女性が眠そうな眼でオイルを焚いていた。

フィア・ゾーンは胸の鼓動が鳴る。

そして、僅かに指先が震えた。

肌の色、目鼻の形、唇、頬、歯並び、顎、全体的な顔の輪郭。

スタイルも絶大で、適度に細く、適度に女性的な形をしている。

胸、腹、腰。肩。足首。指の長さ。

およそ、人間女性に可能な域、美の領域を完全なまでに再現し尽くしている。

人形のような、人形に似ているなどとは断じて言えない。

およそ美しいと言われる、セルロイドの人形や球体関節人形。

それらが以下に紛い物であるかが理解出来る。

その気になれば、三千世界の男共は、彼女の虜になり、彼女の為なら平気で命を掛けるなど、のたまうだろう。そして、彼女の気紛れによって簡単に貶められていくのだろう。

まるでこの世の物とは思えないような、異界の美。

その美貌さえあれば、世の栄華を手中にするのは容易ではないかとさえ思わせる程だった。

しかし、……残念な事に、彼女は化粧っ気がまるで無く、どこか気だるそうな表情に、大きく欠伸すらして、顔を歪めている。そして、致命的に髪がぼさぼさで、オマケに埃によって汚れた、着古したニットの服に身を包んでいる。

自らの女という価値を全力で投げ捨てていた。

フィア・ゾーンは声を掛けようか迷った。

店の主であると思われる彼女は彼に気付くと、すぐに笑顔で声を掛けた。

「ああ、いらっしゃいませ。何かお探しで？ 此処には色々揃っています。此処には、人間の欲望という欲望を満たすような代物ばかりですよ。何か欲しいものは？ 見た所、貴方は特別な趣味がお在りのようで。そのような欲望を満たす品物も、勿論、揃っております。ご紹介しましょうか？」

「いや、……………すまねえ。腹が減ってるんだ。何か、喰えるもんねえか？ それから、図鑑。家具とかのカatalogとかあったらくれ」

店の主は、きょとん、とした顔をした。

「そういうものなら、……………この近くに雑貨店があるので、そこでお買いになられては？」

彼女は少し考えて、腹を膨らませる丸薬などを紹介しようと思ったが、どうも、この客人は、本当に手頃な店が見つからなくて、此処に飛び込んできたみたいだ。

……………。

「じゃあ、何か芸術品とか絵が沢山載っている本とかってねえーの？ お友達に、そういうのを参考に、何か作りたい奴がいるんだよ」

「ああ、それなら、西洋美術や東洋美術の建築様式の図鑑。フェルメールやルノワールの画集などは置いておりますよ。勿論、ロマン派や印象派を総合した画集も」

「それから、哲学の本とかってのねえー？」

「ええ、それなら、大体、何でも揃っています。本の類は地下に保管してあるので、少々、お待ちください。ドイツロマン主義も、近代哲学もポストモダニズムも一通り、揃えています。

……………もっとも、“人間界”では出回らない裏の哲学史や、魔術書の類も揃っておりますが」

「……………知らん。ほら、あるだろ？ ページを開くごとに、人生ってのは、何々なんだーって書かれている本が」

彼女は少し、顔を引き攣らせると。

言われた、図鑑や画集を出した後、此処の近くにある雑貨屋の地図を書いて、繊細さの欠片も無さそうな大男に渡した。

十

洞窟の中は、まるで御殿のようになっていた。

彩色も出来るのか、金色や銀色、またはルビーやエメラルドの色も再現している。

洞窟内は、さながら宮殿のような姿へと変わっていた。

大理石のテーブル。ギリシア彫刻をあしらった椅子。

テーブルの上には、黒塗りのゴブレットやキャンドル立てなどが置かれている。

「俺には芸術なんて趣味はねえーんだけどな。美意識ってのも、欠落している、でも、知らねえけど、お前に言われた通り、沢山の美術品やそれを模した家具のカタログを買った。すげーじゃねーか。俺は生涯、こんな場所になんて住んだ事は無い。もっと、こういう場所を襲撃したりした事はあるけどな」

ルルイエは、まだ何か足りない、といったような顔をしていた。

フィア・ゾーンはフライド・チキンを貪り食いながら、べちゃべちゃと彼が作った美術品の上に、油を垂らしていく。

「あー、それにしても、肉は美味いなあ。肉、肉、肉、俺は肉食ってりゃ、それで幸せだ。なあ、お前も幸せって奴、欲しいのかよ？」

彼は軟骨ごと喰い終わったチキンの骨を、虎の毛皮を基調にした絨毯の上へと落としていく。

そして、ゴブレットに注いだ上物のワインを大量に口に入れて、それを自分の衣服が汚れる事も構わずに浴びるように飲んだ。ワインのシミが絨毯に広がる。

美術や芸術、建築に敬意を持つ者達から見れば、明らかに彼の行動は、敵意を持たれるものだった。

しかし、彼らは二人とも、そのようなものには無頓着であり、無感動だ。更に言えば、これは本当に、只の土を彩色した模造品にしか過ぎない。

「幸せか。……大抵の人間は、それを求めて、生きていくらしいな……」

ルルイエは書物を読んでいた。

それらは、一応、哲学書と名の付くものだが、歴史的な偉人の記したアカデミズムにおいて研究されている代物ではなく、そこら辺のコンビニでも手に入りそうな、人生論、有名人の発言の孫引きなどを寄せ集めた本だった。

フィア・ゾーンがついでに買って来た、ヌード・グラビア集などにも、彼は一通り目を通す。感想は、彼女達の肉体は、人間の完全さの形状としては不完全であり、彼女達の性格における性質は、おそらくは自分達の本質を隠して生きているのだろう、といったものだった。

よく分かんねえーな、とフィア・ゾーンは言う。

「次に調達してきて欲しいものがあるのだが、いいか？」

「ああ、何だ？」

「そうだな、人間を創りたい」

フィア・ゾーンは怪訝そうな顔をした。

「人間を創る、って、創るのかい？ それはどういう風に？」

「さあ、どうしようかな。手に入れてきて欲しいものがあるのだが」

「そうか、何が欲しいんだ？」

ルルイエは考えているようだった。

「人間を構成するものは何なんだろうな？」

その時、一人の女が洞窟の中へと入り込んで来た。



フィア・ゾーンが待機させているネズミ達が、気配を察知する。

「誰かは入ってくるぜ。攻撃するかい？」

「いや、彼女は仲間だ」

しばらくして、数分後、女は彼らの前に現れた。

童話の中に出てくるような、魔法使い風の格好をした女だ。

「ニアス、ルアーージュはどうした？」

彼女は困惑していた。

「追っ手がいます、そいつと戦闘している模様。でも大丈夫です、相手はちょっと頭が弱いんで、妹なら勝てるかと」

「そうか、次からは自身の能力の実験はもっと慎重に行うべきだな。まだまだ完全に能力をコントロールしているわけではないんだろう？」

ルルイエは思い出したように言う。

「そうだ、自己紹介をしておいてくれ」

二人にいった。

「私はニアス。他にも、同じ顔のルアーージュという妹がいるわ」

「俺はフィア・ゾーン、此処はたまたま見つけた、よろしく」

ルルイエはニアスの方を見る。

「ニアス、どうやら、私の“目的”が決まった。手を貸してくれるか？」

彼女はそれを聞いて喜ぶ。

「ええ、喜んで。妹も喜ぶかと思えます、これから、どうされるんですか？」

ルルイエはフィア・ゾーンの方を見た。

「私はこの地を征服する。そして、最終的には可能な限り、あらゆる存在している世界を征服する、そうすべきなんだろう？　なあ、フィア・ゾーン」

大男はひひっ、と笑った。

「ああ、そうすべきだ。貴方様は支配者になるべくして生まれたんだよ。この世界を手に入れる為にな、何もかも、蹂躪しちまえよ」

それはさながら、ファウストに助言をするメフィスト・フェレスのように。

フィア・ゾーンは、ルルイエに、悪意ある助言を告げる。

それに対して、ルルイエも満更では無さそうな顔をした。

ニアスも賛同するように、頷いた。

まるで、一蓮托生のように、一味は結託していた。

十

インソムニアは、コードとアクア・シールと別れた後、実はひっそりと、二人の能力者を追跡していた。

彼女は無謀で破滅的な性格をしているが、一応、バウンティ・ハンターとしての能力はあった

.....あの二人は面倒臭そうだから、私一人でやる。

それが、彼女の結論だった。

彼女は自身の能力の一部である『スキゾ・フレニア』を具現化、実体化させた姿である、三つの首を持つドラゴン・ゾンビを召喚する事が出来る。

ドラゴン・ゾンビの視界は、そのまま彼女の視界になる為、そいつを使って、二人の能力者を追跡していた。

魔法使いの姿になった女は、途中から、コード達を攻撃するフリをして、明らかに逃走に移っているのが分かった。

おそらくは、追撃は来ないかもしれない、彼女はそう踏んでいた。

そして、ドラゴン・ゾンビによって二人を乗せて空を飛びながら、しっかりと敵が逃げる方向を見ていた。

おそらくは、あの位置には、名前が定かでは無い、あの“暗黒の地”へと行ける扉が開かれている。おそらく、そこに身を隠しているのだろう。絶好の隠れ場所だ。

インソムニアは、コードとアクア・シールの二人を適当な所に降ろした後、彼らには内緒で、スキゾ・フレニアのドラゴンを飛ばしたのだった。

「やっぱり、私は一人がいいな。味方なんざ、いらねえ。足手まといばかりだ。どいつもこいつも、慎重に、慎重に動きやがって。馬鹿みてえ。大した命でも無い癖に、何で、そんなに生き残りたいのかねえ？ もっとも、私にそんな事言う資格がまったく無いのは分かっているけどな」

彼女は闇の地へと向う。

そこは、あらゆる世界の者達の闇のイメージにおける想念が実体化した場所だった。

此処は、臍物の草原と呼ばれる場所だ。

此処の何処かに、敵はいる。

そこは、草原だった。

所々に、人間の死体が散らばっている。

此処には、入ってきた不幸な者達を無差別に食い殺しにくる獣が沢山、存在する。

「いい空気だなあ」

インソムニアは髪を靡かせながら、屈伸運動を始める。

「この辺りだよなあ？」

彼女は周囲を見回す。

すると。

ローブを深く被った、魔法使いが姿を現す。

雰囲気からして、彼女を迎撃するつもりに見えた。

「ああ、いたいた。私が追ってきているのを知っていたな？ どうする、此処で決着を付けるか？」

おそらく、もう一人もいる筈だ。

そいつは、何処かに隠れている。

「情報では、お前らは“双子”で、同じ顔をしてるんだっけ？」

敵は答えない。

インソムニアはなおも、言葉が続ける。

「何か、喋ったら、どうだ？　せめて、名前くらいは教えてくれてもいいだろ？」

「私はルアーージュ」

魔法使い風の女は、名前を告げた。

「へえ。もう一人の片割れも近くに居るのか？」

ルアーージュと名乗った女は、ゴシック・パンク・ファッション姿の彼女を吟味しているようだった。

そして、告げる。

「姉のニアスは来ない。私がお前を倒す。おとなしく、逃げ帰ってあげればいいものを。貴女の、命。今日で終わり。覚悟はいい？」

不眠症は鼻で笑う。

「へえ。私は随分と舐められたもんだな？　取り合えず、今からてめえを、八つ裂きにして、手足のパーツを並べてやるよ。覚悟は出来ているってのかよ？」

彼女は言いながら、左肩のカットソーの袖を捲る。

そこには、死神のタトゥーが刻まれていた。

タトゥーは、見る見るうちに、彼女の肉体を離れて具現化していく。

そいつは、鎧を身に纏っていて、大きな鎌を持っていた。顔は眼の鼻も口も無く、暗い闇が凝縮されており、眼球のあるべき辺りに、二つの光が燈っている。

そいつは、彼女に大鎌を渡すと、煙のように雲散霧消していく。

「私の『ダンス・マカーブル』で刻んでやるよ。死の舞踏を踊りな」

彼女はとても楽しそうな顔をしていた。

そして、自分の身長ほどもある大鎌を、まるでフラフープのように軽々と振り回す。彼女に腕力があるというよりも、鎌自体にまるで重量が無いみたいだった。

しかし、強く、空気を切り裂く音が聞こえる。

それは、まるで音色のように響いていく。

ルアーージュは、それを見て、まるでせせら笑うような顔をしていた。

インソムニアは、それが尺に触ったのか、大鎌を全力で振るう。

そして、ルアーージュの左肩から右脇腹に掛けて、一刀両断に切り伏せた。

二つに分かれたルアーージュの肉体は、そのまま地面に倒れる。

「ああ、やりい！　馬鹿が、ぼさっとアホ面構えているからだ！　更に、宣告通り、切り刻んでやるぜっ！」

彼女はそのまま、ルアーージュの肉体を何度も何度も刻んでいく。

そして、高笑いを始めた。

そして、一通り、原型を失った部品に変えてしまうと、地面に腰を下ろす。

「弱え！ こいつ、何も出来ないでやるの。さて、もう一人も探すかな？」

彼女は知らない。

コードの話もろくに聞いていなかった。

今、解体したルアーージュが、肉体を分解して様々な生き物へと変化する事が出来る能力者である事を。

……………。

ルアーージュは、勝手に勝利宣言している彼女を、微塵切りにされた肉体のまま、更に観察し続ける。

……この女、本当に馬鹿なの？ それとも、何か作戦でもあるの？

ルアーージュは、正直、判断に困っていた。

しかし、勝手に幸せそうな顔をしている彼女を見て、何だか気の毒に思ってきた。

それに、

ルアーージュの目的は、敵の始末ではない。

あの屋敷を襲ったのだって、手頃な場所で、適当に火の手を上げて、“自分達に発現”した能力の強さを確かめる為だった。

それから、ルアーージュとニアスの双子に能力を発現させた者の元へと、誰も行かせない為。それが目的だった。

……こいつ、このまま帰ってくれないかなあ。そうだ、私が姉さんに化けて、もっかい殺されればいいんだ。それで、騙されてくれるくらい馬鹿かなあ？

ルアーージュは、こっそりと、刻まれた肉体の一部を無数の蟻に変えていく。

そして、彼女の死角になるような場所で、こっそりと肉体を再構築し始めた。

無数の蟻が集まって、小さな鳥の姿になる。

しばらく、彼女を観察する事にした。

インソムニアは一通り罵倒が終わると、今度は、適当に草原内を歩き回っていた。どうやら、姉のニアスを探しているようだ。

すると。

ルアーージュの血を目標にして、草原内の獣達が向ってきた。

豚の頭をした四足歩行怪物で、ライオンのような牙と爪を持っている。

そいつらは、ルアーージュの返り血を浴びているインソムニアへと襲い掛かる。

暗い草原内に、光明が走った。

一体、何が起こったのか、ルアーージュは困惑する。

インソムニアは背中に翼を生やして浮かんでいた。

そして、左手で右腕の肘を握り締めて、右手を大きく開いている。

そして、辺りには豚の怪物の焼死体が大量に転がっていた。

ルアーージュは理解する。

こいつは、自分自身の能力に自信を持っている。

だから、下手な策略などは無駄だと思っているのではないのか、と。

この世界は誕生した生と。

誕生出来なかった生の歴史。

ルルイエは何も無い、何の歴史も無い世界から生まれた。

彼を生み出すモノは何も無く。

何の繋がりも無く、彼はこの世界に存在を与えられた。

過去も現在も未来への道標も何も無く。

……。

生者には為れなく。

死者にも為れなく。

……。

生も死も何も無い。

生も性も何も無い。

時間という概念も無く。

死という概念も何も無い。粒子の塵一つ、存在しない。

この世界にどのようなにも干渉出来ない。

絶無そのもの。

……。

不完全な泥そのもの。

形など無い。形という概念そのものがそもそも存在しない。

何も無い、塵そのもの。

どうしようもない。無、そのもの。

何にも為れない。無、そのもの。

何者でも無い。

……。

彼がその片鱗を現したのは。

只。自然発生的故。いや。

生命。人に模範した。

……。

何を生み出しても無だ。

何にも影響を与えられない。何かからも影響を受けない。

歴史という概念自体を持ち得ない。空虚そのもの。

……………。

ルルイエを生み出したのは。

二人の少女だった。

泥を捏ねて遊んだ少女。この世界にいない、何か。

人間を模造した、泥の人形。  
残念なのは、彼はどうしようもなく。  
不死などではなく。  
只、簡単に崩れて壊れてしまう。  
泥の人形でしかない。

.....。

不完全な姿の墮胎児のような。  
人に類するフリークス。  
せめて。人間らしさ、を与えられたならば。.....。.....。.....。

十

此処は、何処でも無い場所だった。  
何処でも無い空間。  
何処でもない、部屋。  
暗闇の中にぽっかりと開いた、明かりのような。  
セージの甘ったるい、幻惑的な香りが満たされている。  
そいつは、部屋の中にある鏡の向こう側から話し掛けてきた。  
「美しさ、とか。聖なるもの、とか、とは何なのかしらね？」  
鏡の向こう側にいる、彼によく似た少女。  
彼と光と影のように、存在している少女。  
どうしようもなく現れる、自分自身と似通った存在。  
そいつは、特に意味も無く、自分自身の思考を語り出す事が多い。  
「たとえば、薔薇。薔薇は、女性の象徴なのだろうか？ 聖なるものとしての、女性の象徴。女性の美しさを、人は薔薇に見立てているのか」  
彼女は部屋の中に飾られている花瓶に手を触れる。  
赤い、赤い、薔薇の生けられた花瓶。  
「たとえば、ユニコーン。ユニコーンは、女性の眼から見た、男性。男性を美しく描いたものなのかもしれないわね。ユニコーンはきっと、女性にとっての理想の男性だ。よく、少女的なイメージで、理想の男性を、白馬に乗った王子、とかいう言葉が使われるが、ユニコーンも、それに類するのではないかしら。ユニコーンは清らかな処女にのみ近付くという生き物」  
彼女は冷笑する。  
それは、まるで悪意とも空虚さとも呪詛とも取れないような。  
声音。  
「人間は異性を糊塗して、美化したがるのでしょうか。それを聖なるものとして」  
そう、それは芸術品だけではない。  
そもそも、人間は認識において、他人を糊塗して観ているのだろう。

「もし、この世界に存在しない、神の世界の美しさが本当にあったとするのなら。それは、人間の手では創れないのでしょうか。美術品、自然、美しさを感じ取れるもの。それらは、やはり、神の世界にあるらしい、美しさの模造品にしか過ぎないのかもしれないわ。もっとも、神の世界とやらがあったとすれば、だけれども」

彼女は腕を組む。

そして、右手を口元に置いた。

「たとえばね。聖なる女性としての象徴は、聖母マリアとアリスに還元されているのは、頂けないわね。処女性だとか。その先が必ず、在る筈なのよ」

呪文のように、言った。

「美しさ、の基準が在る筈だ」

この世界において、決められた基準。

人間は何を観て、何を美しいと感じるのか。

「私は何者にも汚されたくない」

彼女は言う。

「この世界に生きている、他人が汚らわしくて仕方が無い」

「そうだな。たとえば、性は命の汚れそのものだと、オレは思っている」

そこで、彼は始めて口を開く。

その言葉に、彼女は頷く。

「その通りね」

彼女は満面の笑みを浮かべる。

「真っ赤なモノ、命そのもの。それが広がって、生命は生まれる。けれども、生命の誕生ってのはある意味で言えば、不幸そのものじゃないかしら？ 生きる事は悪夢そのもの、悪意そのもの。苦悩そのもの。生きる喜びに対して、生きる苦しみを生んだという神話は何処にでもある。そうやって、人間は自分自身の苦悩や苦痛を合理化するしかないのよね」

彼女は鏡に触れる。

そして、それを優しく撫でる。

「処で、神は何の象徴なのだと思う？」

彼女は問うた。

彼の方は、首を横に振る。

「神は依存の象徴。人間が愛されなくて苦しいから、孤独が苦しいから、神を作り出したのよ。何かに縋るしか出来ない人間。人間はいつか、それを超えなければならないと思っている。神を超えるんじゃないで、神に対する依存を超えなければならない。私達が存在している意味も、きっとそこに在る」

少女は、部屋の中のクローゼットを開く。

その中には、広い宇宙が広がっており。

中には、沢山の服が並んでいる。

「いい服ね、私も着たいわ」

沢山の白と黒の、ゴシック・ロリィタの服。

彼女は笑う。

彼は笑わない。

.....

十

ニアスとルアーージュの双子が揃った。

洞窟の中は、既に、一つの宮殿へと変わっていた。

ルルイエは玉座に座りながら、大量の読書をしていた。

双子は微動だにしない。

それから、何時間ほど経過した事だろうか。

部屋の中に太った巨体の男が現れる。

彼は背中に、樽のような荷物を背負っているみたいだった。

それから、両手に別々の袋を手をしている。

「買ってきたぜ。知り合いの闇ブローカーが、安く売ってくれた。まあ、ジャンク品も混ざっているが、適当に作ってくれ。一応、ちゃんと保存してあるんだぜ」

彼は樽の中身を床に並べていく。

それは、冷凍パックに入れられた、人体のパーツだった。

目玉。歯。耳。鼻。肝臓。腎臓。小腸。大腸。腕。脚。脊髄。腰。性器。

それから、心臓。

人間数体分は作れるパーツが揃っていた。

彼は袋に入れてあったものを取り出す。

様々な種類と色のウィッグだ。

「さて、どうする？ ちなみに、脳味噌は、.....死んだ脳味噌なら別なんだが、.....臓器として、生きた脳味噌は、裏ルートの中でも違法ってんで、手に入らなかったが、代用品を見つけてきたぜ」

彼は別の袋を開ける。

その中には、円形のコンピューターが入っていた。

「人工頭脳だ。型落ちだけどな。昔、どっかの街でアンドロイドに嵌め込んでいた奴らしい。これを脳味噌の代わりにしよう」

彼は床にどがっ、と音を立てて座った。

そして、おもむろにポケットに入れていた缶ビールを開けて口にする。

「疲れたぜ。幾ら俺でも、この荷物は重かった。しかし、楽しいなあ？」

ルルイエはしげしげと彼が運んできた物を眺めているようだった。

そして、大量の書物の中から、医学書を探し出して見つける。

双子も興味深そうに、並べられたものを見ていた。



ニアスが質問する。

「聞きたい事があるんだけど、ジャンク品、ってのは？」

一本目の缶ビールを飲み干して、二本目を開けているフィア・ゾーンはああ、と答えた。

「ニコチンで黒ずんだ肺とか、糖尿病の腎臓とかだよ。クソ安かったぜ」

「それらは避けた方がいいんじゃないの？」

「あー、そうかもな。でも、最初の試作品にでも使えばいいんじゃないか？　すぐ壊れてもいいように」

十

“人形”の製作現場へと、ニアスは訪れる。

辺りには、沢山の彫像が置かれていた。

積み上げられた医学書や標本の写真集。

ルルイエは、一人、泥を捏ねていた。

「また、失敗だ……」

そう言って、彼は泥で作った人形を蹴り倒した。

パーツは幾らでも、フィア・ゾーンが調達してくるだろう。

しかし、ルルイエの納得するような物は作れないみたいだった。

「私達、の時のようには巧くいきませんか……」

ニアスは呟く。

ルルイエは聞いていないみたいだった。

また、作った人形を蹴り壊す。

中から、人間の臓器が溢れ出してきた。

「駄目だ。血液の循環が巧くいかない。また失敗か」

人体のパーツは残り少ない。

フィア・ゾーンが新たに調達しに出掛けたままだ。

部屋の中には大量の死体で充満している。

それはさながら、血の池地獄に似ていた。

十

製作現場の中に、フィア・ゾーンが現れた。

彼は大きな樽を置く。

「良い物、仕入れてきたぜ？　どうだい？　調子は」

ルルイエは間髪入れずに答えた。

「駄目だな。どいつもこいつも、木偶ばかりだ。一応、私の能力で動かす事は出来るが、まるで知能が無い。魂がまるで入らないんだ」

「魂か。人間の脳なんざ、所詮、電気信号の集積体らしいがな。しかし、良い物、見つけてきたぜ。“あの店”から仕入れてきた。やはり、売っているもんだなあ？」

彼は包みを開く。

液体に浸けられた一個の容器に、一人の女の生首が入れられていた。

長い黒髪の、まるで日本人形のような顔立ち。

「あの店の店員に訊ねたら、紹介してくれた。一目惚れだったよ。どうも、ホルマリンではない、変な液体に入れられて、新鮮さを保っているらしいな。俺好みの死体なんだけどなあ、お前に譲るよ。俺はこいつの生きている姿が見たい」

ルルイエはそれを手に取って、まじまじと眺める。

まるで、生きているみたいだ。

首だけで生きているみたい。

死んで、間もないであろう、死体。

「分かった。必ず、成功させよう」

「ああ、頼む。楽しみにしているよ」

十

そこは東京新宿の歌舞伎町。

その辺りの路地を抜けていって行ける『異世界』だ。

それは、仮に『裏・新宿』と呼ばれる、日本から行ける異世界の一つ。

裏・新宿というのは仮の名称だが、実際の所は、これといった名前が無い。

ただ、“この界限”の裏の人間が沢山集まる場所で有名な所だった。

あるビルの地下のエレベーターを降りていくと、その場所へと辿り着く。

そこはバーだった。

何の変哲も無いバーだったが、此処はある組織の者達の溜まり場であり、情報交換の場なのだ

。

マスターはドリンクを作っていた。

コードは、マスターに聞き込みをする。

「すまない、ブラッディ・マリーと。それから、……この前、“暴君”を倒したとかいう能力者の情報を教えてくれないか？ そいつに会ってみたい」

コードは、酒代と、情報に見合っただけの金額を置く。

マスターはトマト・ジュースを取り出して、ウォッカの中へと注ぐ。

そして、それをコードに差し出した後、おもむろに携帯を取り出して、何処かへと発信する。

そして、しばらくのやり取りの後、コードに静かに述べた。

「会ってくださるそうです。此処から、数百メートル先の喫茶店『グリーヴァ』という場所で、ブラッディ・マリーは飲んでいただけます？」

「ああ、……いただく」

『グリーヴァ』は名曲喫茶だった。

店内ではクラシックが流れている。

一応、音楽を鑑賞する者達が訪れる場所なのだが、迷惑にならない程度での会話ならば許されている。

どうも、コードには馴染みの無い趣味だ。

店内は小綺麗に整備されており、白を基調とした家具によって埋められていた。

待ち合わせの場所は店の奥だ。

バーのマスターいわく、白と黒の服を着ているらしい。

彼は店の奥に進むと、立ち止まった。

一人の女性が座って、本を読んでいる。

.....彼女か？

華奢そうな肢体をしている。

話に聞いた、白と黒の服。

どうやら、それはゴシック・ロリィタという装束で、ドーン界限でも愛好するものが多いタイプのファッションだ。コードはコードで、軽めのパンク・ファッションを好んでいる。

美女。いや、外見的には美少女とっていいような顔立ちだ。

雪のような肌、それから腰まで伸びた絹糸のような長髪は、金と銀を適度に混合させるように染め上げている。頭には苺の刺繍の入ったヘッド・ドレスを乗せている。

服装や髪型などは派手だが、清楚な印象を思わせた。

何やら、物難しげに本の字を追っている。

推理小説か何かに夢中なのだろうか？ 微笑ましいな、と彼は思った。

コードは席まで向う。

そして、その人物に誰何した。

「お前が、暴君、.....ウォーター・ハウスを倒した『フェンリル』とかいう能力者なのか？」

彼女は、本から顔を上げる。

眼が合った。

「そうだけど、君なのか？ オレを呼んだのは」

コードはフェンリルという能力者の前の席に座る。

既に、彼女はメニューを注文しており、アール・グレイの紅茶と抹茶チョコレート・ケーキが置かれていた。

「.....本、何読んでいるんだ？」

「ジャック・デリダの『声と現象』。ハイデガーは大体読んで、理解したつもりだけれども、デリダは難しいな。でも、単語の使い方が好きだ。本人、元々は作家志望だけあって、センスがある、思わず、音読してみたくなる域だ」

「……………そうか、俺は本は読まないな」

彼女は本に、グリーン・ミントで作った葉を挟むと、アール・グレイのストローに口を付ける

。

形のいい唇をしている。

「でもまあ、あの暴君を倒した奴が、こんな可愛らしいお嬢さんだとは思わなかった」

「ああ」

コードはメニューを開く。

紅茶やケーキ、パスタなど、まるで彼の好みに合わないものばかりだ。

それに、どうにもこういう喫茶店は苦手だ。

「分かってて、言っているだろ？ オレが男なの」

コードはメニューを閉じた。そしてウェイトレスにブラック・コーヒーを頼む。

コードは苦笑した。

「分かるさ、他は完璧なのに声がね」

「まあ、ボイス・トレーニングとかしてないからな。女声を出す訓練とかあるらしいが」

「まっ、俺はたとえ声帯を弄ったって、男女の差異が分かるんだけどなあ」

細かな音の反響で区別が出来る。

彼はたとえば、相手が電話先での会話で、ボイス・チェンジャーを使っていようが、性別、年齢、体格、健康状態などを把握する事が出来るのだ。

しかし、その事は言わない。思わず、自分の能力の全てを話しそうになって止める。

「そういう格好が好きなのかい？」

彼女……彼は、コードを睨み付ける。

「さあ？ 分からないけれども、そうせざるを得ない何かが在るんだろう。でも、自分がこうで在るという事。それは決して、曲げない。曲げさせようとする相手がいたとするのならば、そいつは敵だ」

凜然とした口調で言う。

外見の印象とは別に、何か強い意志を瞳に宿していた。

彼は、あの暴君を倒した。

どんな能力者なのだろう？ 気になった。

「処で、君はオレに何の用があって呼んだんだ？ 別に暇だからいいけれども」

言われて、気付く。

何と、聞けばいいのだろう。

「あのさ、ウォーター・ハウスはどんな奴だった？」

フェンリルは、ケーキを一切れ口に入れる。

「凄く嫌な奴だった」

少し、沈黙。

「そうか、俺は尊敬していた。……………いや、だからって仇討ちであんたを倒したいってわけじゃないぞ。奴は犯罪者だったからな」

「ああ、なるほど」

フェンリルは何かを理解したみたいだった。

「君は、オレと会って、話してみて、自分の中の葛藤にケリを付けたいんだな？ そして、自身の人生にとって重要な位置を占めていた人間との関係を整理する。そういう事だろう？」

まるで、心でも読んでいるかのように、彼が言葉にしようとしていた、もやもやを言い当ててくる。

「……まあ、その通りだ。すまん」

「分かる。オレもよく、自分の生き方とかに悩んだり、迷ったりするから」

十

エイジスはサーカスの準備をしていた。

ブレイズから借りたスケルトンに、衣装を着せていく。

座長は、基本的にエイジスにサーカスを一任している。

この無邪気な顔の少年は、サーカスの中でもそれなりの地位にあった。

これから、ある場所にて行われるサーカスの準備に取り掛かっている。

そこで行われるのは、人形劇だ。

エイジスは役者もやっているのだから、台本も覚えなければならない。

彼は表現者だった。

自分でも自覚していないが、表現者だと言われている。

踊り子、空中ブランコ、演劇。

彼はサーカスの目玉だ。

みなから、慕われている。

「楽しみだね、楽しみだね、あの場所でサーカスが出来るとなんて」

彼は夢見るように言った。

そこは、彼にとっての遺憾のある地。

宿命の場所。

そこで、演劇を行う事によって、彼はその地から本当の意味で逃れられるのだと思っている。

まるで、決着の舞台のような。

何枚もの布に隔てられて、座長は一座を見回していた。

エイジスは座長に笑い掛ける。

十

「えっ、まさか。倒していないっての？」

インソムニアは驚いたような顔をする。

そして、頭を抱えた。

ドーンシステムは、『アリアンロッド』という能力者が管理している。

そいつは正体不明であり、何故かそいつ自身が、賞金首のランキングに記載されている意味不明な存在。

そいつは決して姿を見せず、コンピューターなどを通して、ドーンのハンター達に、情報を与え続けていた。

そいつの能力の全貌は分からないが、「生きている者」と「死んでいる者」の判別を行う事が出来るらしい。

生きている、といっても、そいつが亡霊だったり、ゾンビだったりする場合もある。

その場合も、死んだ者ではなく、生きている者として認識されるらしい。

ドーンシステム、賞金首狩りのシステムは、このアリアンロッドの能力によって成り立っているといっている。たとえば、死んだと思われていた者も、何らかの手段で生き延びている場合があるし、更に、死体を完全なまでに破壊してしまえば、検証が難しくなる場合が多いからだ。

だから、この能力者の存在こそが、ドーンの基盤になっているといっても過言ではない。

はあっ、と仕方なく、彼女は溜め息を吐いた。

完全に狐に化かされた気分だった。

彼女は自分では、自らを死神と思っている。思い込んでいる。

召喚する大鎌によって、狙って獲物の首を跳ね飛ばす死神なのだ。

そんな空想。

彼女は自覚が無いが、周りの者は彼女の事を幼稚だと言う。

馬鹿馬鹿しいと思っている。

「死神ってのは、やっぱり、狙って獲物はちゃんときれないといけないんだよな。私は不眠症の死神。絶対に奴の首を刳ってやるぜ」

と言ってみたものの、奴が何処に逃走したのだろうか。

もう一度、決着を付けなければならない。

奴の能力が何なのか、そういえば知らなかった。

もしかしたら、幻覚を見せられていたのかもしれない。

だとするのなら、腹が立つ。

しかし、もしいるとするのなら、どこだろう？

彼女は余り、深く物事というものを考えない。

日々を享乐的に生きている。

どうせ、明日なんて下らない、それが彼女の生き方の根幹を成しているものといってい。だからこそ、破滅的であり、退廃的な生き方をしている。

それでも、ドーンの生半可に考え込んで、敵を仕留めようとするような奴らよりも、よっぽど優秀だったし、彼らよりもずっと生き延びてきた。

どうせ小細工なんて、策を弄するなんて、馬鹿のやる事だと彼女は考えている。

敵と戦う事すらも、楽しめればそれでいい。

それが、自分の命の危険と等価であったとしてもどうだっていい。

それが、インソムニアだった。

「たぶん、あの草原だよなあ。きっと、あそこに奴らのアジトがあるんじゃないかなあ？ 私なら、そうするしなあ。適当に探すかな」

彼女は勘みたいものはあった。

それが人一倍優れているというわけでもないし、能力として確立しているわけでもないが、そういった勘や閃きなどに長けている部分もあった。

彼女はあの草原へと向う。

逃した敵を探しに。

十

フェンリルという能力者。

彼はウォーター・ハウスと、どんな話をしたのだろうか。

彼は余り、何も語ってくれない。

しかし。

コードが知らない事を、フェンリルは知っている。

少しだけ、嫉妬のようなものが湧き上がった。

気付いたからだ。

ウォーター・ハウスはフェンリルを高く評価し、認めていた。それは、コードには与えられなかったものだ。一体、彼には何が足りなかったのだろうか。

少しだけ魅力的な思考に取り付かれた。

フェンリルと戦ってみたい……。

それは思わず、声に出して、呟きそうになった。

彼に勝つ事が出来たのなら、もしかしたら、ウォーター・ハウスも生きていれば、コードを認めてくれたんじゃないのか。……。

しかし、あの女顔の女装の男が、彼との私闘に応じてくれるだろうか。

気付けば。

先日の二人の能力者の事は、段々、どうでもよくなってきていた。

あれから数日ほど、経過しているが、追撃は無い。

彼らに興味が無いのだろうか。

そして、コードは、彼……フェンリルの後に付いていっている。

名曲喫茶に来たのは、ちょうど、近くの美容室に向う予定だったかららしい。

たまたま、彼の予定と合った為、会ってくれたみたいだ。

付いてくるコードを、彼は特に意にも介していない。

「予約入れておいたんだ」

彼はコードの方を見ずに、そう呟く。

彼は店員に案内されて、席に着いた。

「どう致しましょうか？」

店員は訊ねる。

「髪の毛をもう少し、明るくしたい。全体的に、もっと綺麗な金色に。もっといい脱色液使えよな。根元がもう黒ずんで来ている。後、所々の、銀色の部分をもっと増やして」

コードは席に座っていて、せっかくなので、予約を入れて、髪の毛を切って貰う事にした。そういえば、前髪が少し伸びていて、目元に掛かり過ぎている。

店員に勧められるまま、ファッション雑誌を開いた。

髪型はどうしようか。まあ、大体、今のままでいいか。

フェンリルは、頭に脱色液を塗られて、その上からラップを掛けられたまま、熟睡しているみたいだった。

.....隙だらけだ。

.....思わず、そう思った。

やがて、彼も呼ばれるまま、美容室の席に座る。

首下を包む布を掛けられて、注文を聞かれた。コードは望みを答える。

何だか、成り行きでこんな事になってしまった。

しばらくして、散髪が終わる。

適当に前髪を梳いてもらい、肩に掛かっていた髪の毛も切った。

ゴスロリ姿の彼も、髪の毛のカラーリングが終わっており、金色の中に所々、光るように綺麗な銀色を混ぜていた。

「さて、これからどうしようか」

彼は、少し唸っていた。

何だか、眼の色が輝いていて、子供みたいにはしゃいでいるようにも見える。

「さっき、気になっていたルドゥテの画集も買ったし。これから、どうしようか」

店員に料金を支払って、持っていた店のカードにスタンプを押して貰うと、彼は、コードの方を向いた。

「さて。君は何で、オレの後に付いてきているんだ？」

少し、眼の色が鋭くなる。

思わず、コードは身を竦ませた。

「散髪中に、眼がオレを狙っていた。始末するつもりだったのか？」

口元も目元も笑っている。

声も明るい。

しかし、コードは底冷えする程の得体の知れない怖さを感じた。

「.....いや.....」

彼は咄嗟の言い訳を考える。

そして、口に出たのは。

「.....オレの仕事を手伝ってくれないかと思って。.....あんたは強いんだろう？ 少々、苦戦している。既に、ドーン的能力者が何名か殺された。.....あんたはどれくらい強



いかって思いながら、見ていただけだ。たとえば、俺程度の能力が通じるんなら、声を掛ける意味が無いし、な……」

咄嗟に出たが、もっともらしい言い訳だった。

彼は少し、考える。

「なるほど。もっともだ。君の能力はおそらくは、暗殺に向いているな？ 敵の能力は一体、何だ？」

彼は屋敷の前で出会った、双子の事を話す。

そして、ポケットに閉まっていた、双子の写真を見せる。

「ふむ。………、こいつらはおそらく、全ての能力の正体を明かしていないな。そして、おそらくはバックに何かが付いている。違うか？」

「分からない。全てが不明だ」

「現在の賞金総額は？ ランクは？」

彼は聞かれた事を答える。

「まだ、跳ね上がっているかもしれない」

フェンリルは何かを考えているみたいだった。

唇に指を当てて、少し、コードの側から離れた。

そして、おもむろに。

彼は何も無い空間に向って、独り言をまるで誰かの耳元にでも囁くように呟いていた。

それは、なるべく、他人に聞かれないような小さな声だったが。

コードは、自身の能力で、その音を拾う。

……何で、お前が興味を持つんだ？ こいつはとても強敵とは思えない。

……確かに、何かの当てが必要だが。今のドーンは統率者を失ったまま、システムだけが動き続けている。突き当たるとは思えないけどな。

……収穫が在る、と。なるほど、そう“カード”で出ているのか。

彼はコードの方へと向き直る。

「いいだろう。君の仕事、手伝ってやるよ」

ぞっ、とするような寒気のする美しさを放つ顔が再び笑う。

その寒気の正体は何なのだろう。コードは考えながら、気付いた。

そう、それは感情において負と呼ばれるもの。

悪意、敵意、殺意。それらを掻き混ぜたような。

世界に対する呪詛そのものを、感じた。

彼は自然体で、その呪詛をその身の中から放っているのだ。

さながら、鋭利な刃のように。

十

どれだけの制作時間を費やしたのだろうか。

ついに、そいつは出来上がった。

ルルイエは一息付く。

まるで、そこにいるのは、一人の人形職人のようだった。

「ついに出来た……」

赤黒い。

赤黒い、ねっとりとしたものが、地面を張っているようだった。

ニアスは背筋に寒気が走っている。

その人形工房は、まるで、地獄より悪魔を召喚する魔方陣のような形に、泥が蛇のように張って、幾何学模様を描いていた。

ルルイエの前には、一人の女が立っている。

まるで、冥府から呼び戻したかのような女。

反魂、そのもの。……。

生きた、新鮮な脳を使って、そいつはこの世界に誕生した。

そいつの元の人格は何だったのかは分からない。

しかし、赤黒い。生命の赤。真っ赤なものが溢れてくるような。

まるで、この部屋は妊婦の体内のようだった。

生きた女の生首を使って、創った人形。

ニアスは、そいつに着せる服を用意する。

「貴様、言葉は喋れるか？ 貴様の人格は、取り合えず、私と。フィア・ゾーン、ニアスとルアーージュの計四名のそれぞれを合成させた人格になっている筈だ。それぞれの部分部分を足して混ぜたような……じきに、貴様固有の人格に目覚めていくだろうが」

女はニアスが渡した服を着る。

ねっとりとした、血の匂いが充満していた。

「ねえ、ルルイエ様。お身体を洗われた方が……」

「そうだな。しかし、水源を用意していなかった」

「ミネラル・ウォーターの入った大量のペットボトルを用意しております。それで、身体を御洗いでくださいませ。そのうち、こちらに水を通して、バス・トイレも使えるようにします」

「そうか、頼む。さて」

ルルイエは自らが創り出した女を見ていた。

女の顔は、少し童顔だった。少女に見えなくもない。

名前を作らなければならない。今の彼女は名無しだ。

ルルイエは考えていた。

「うーむ、彼女の名前、何にする？ ニアス」

ニアスは少し考えて答える。

「そうですね、こいつの力はおそらく未知でしょうね。それが、“貴方様の能力”ですから」

「未知か、それに関連した名前を付けてやるのはどうだろう」

ニアスは様々な言語を思い出す。

それから、本に載っている伝説なども。

そして、しばらく考えてから答えた。

「では、……………不確実な、不明な、を意味する。“アン・サーテインリィ”とかいかがでしょうか？ 長いので省略して、普段はアンサー、と彼女の事を呼べばよろしいかと。何者なのか分からないものを、創り出す貴方の能力は正体不明なものを、“生まれなかった世界”から引きずり出します。つまり、貴方は能力者を創り出す能力者。そして、今、この彼女は貴方の、まだ未知の能力の“回答者”、アンサーになるかもしれません、どうでしょうか？」

「なるほど、それでいい。彼女の力が何なのか、興味深いが、そろそろ私は休むぞ」

ルルイエは工房を出て行った。

後には、二人の女が残される。

二人とも、ルルイエの手によって、生み出された者だ。

アンサーは、まだ自らが何なのか把握していないみたいだった。

何か、発声しようとしている。

生まれた赤子がそうするような。

発声。

それは、酷く人間らしい言葉のようでもあり、決して人間が出せないような。

異形の声。

がりっ、と彼女は舌を噛む。

そして、口元に手を当てる。

彼女の手の中には、舌を噛んで切った血が溢れていた。

彼女は自らの掌を眺め続ける。

ニアスは驚きの声を上げた。

アンサーの手の中にある、真っ赤な血の痕が広がっていく。

そして、次から次へと、泉のように、彼女の掌から血がぽたぽた、と流れ落ちて。ついには、どくどくっと大量の出血へと変わっていった。

アンサーは笑っていた。まるで、幼い赤子のように。

その純粋無垢なる眼には、悪寒すら掻き立てる笑みが浮かんでいた。

ニアスは、彼女を前にして、寒気ばかりが湧き上がってきた。

十

まず、最初に侵略の拠点が必要だと、フィア・ゾーンは考えていた。

ニアスもそれに賛同して、地図を広げる。

この“暗黒の地”の地図は正確ではなく、所々に空白の部分があるが、大体の場所は記されている。もし、此処を拠点にするとするのならば。

「……“聖なる海溝”がいいな。そこをまずぶっ潰すんだ。俺達の領土に変えてやるのさ」

ニアスは頷く。

そこは、この暗黒の世界において、清らかな場所と呼ばれる処だった。

神々の住まう土地であり、暗黒の地の魔物達は入れない封印が施されている都市。

「では、頼む。私は引き続き、制作に取り掛かる。アンサーを連れて行け。彼女の力を試してみたい」

そう言って、ルルイエは工房へと向う。

また、何か新しいものを作り出したいのだろう。

職人氣質だなあ、とニアスは思った。

十

そこは、ホテルの一室だった。

そのまま、裏・新宿内での手頃なホテルを借りた。

二人の間に会話は無い。

フェンリルはソファの上に座りながら、何処に隠し持っていたのか、大きな画集を広げて読んでいる。訊ねて見ると、ルドゥテという植物を主に描く画家の画集らしい。

「薔薇の絵がな。気に入って」

それだけ告げた。

会話が無い。

考えてみれば、コードは他人と会話を楽しむ事が苦手だ。

まるで、癖のように自分の身体に嵌め込んだ指輪や腕輪から出ている金属の棘を撫でたりしている。ファッションの一部にしか見えないが、実はこれは音叉として使っている、コードの能力の媒介でもあった。

彼は会話の代わりに、目の前にいる相手の、心臓の鼓動などを探知して、相手の心理状態を把握していた。

心音、瞬きの回数、口内においての舌の動かし方。そういったものを察知して、相手の状態を観察している。

フェンリルは余り、彼に対して興味を持っていないみたいだった。

コードがそこにいようがいまいが、どうでもいい、そういった態度を現していた。

お互いに、能力を明かしていない。

ドーンにおいて、仲間内でも互いの能力を明かさない事はしばしば多い。もし、仮に仲間が敵になった場合をつねに予測している。

たとえば、裏切りなどは、当たり前のように行われている行為でしかないからだ。

そのような、環境からか、ドーン内においては、他人の能力を語る事はタブーになりつつあった。よっぽど、有名なハンターであっても、その能力が知れ渡っていない者も多く存在していた。もし、仮に、誰かに能力を教えて回る奴がいたとすれば、それ自体が裏切りであり、命を狙われても仕方が無かった。

しかし。

コードは敢えて、踏み込んでみた。

「なあ、もしよかったら、あんたの能力を教えてくれないか？」

「断る」

即答された。

彼は画集を閉じる。

「君の能力の全貌を教えてくれないか？ 条件はそれだ。それから、さっきから、オレに何かの能力を使用しているな？ それも止めてくれないかな？」

しっかりと見破られていた。

コードは冷蔵庫の上に置かれていたコップを、テーブルの上に置く。

そして、それに向って、人差し指を向けた。指先が僅かに震えた。

瞬く間に。

コップにヒビが生えて、弾け飛んだ。

「何をやったんだ？ 指先からは、……たとえば、光だとか炎だとか弾丸だとかを……何も出していなかったように見えたが」

「音波だ。超音波。人間に聞こえない域の音を発射する事によって、物を破壊したり、周囲の物体の形を把握したり。相手の心音などを聞いて、健康状態などを把握する事が出来る。ちなみに、この音波で攻撃すれば、人間の頭くらいなら、簡単に吹っ飛ばす事が出来る」

「なるほど。見えない攻撃か。凄いな」

フェンリルは素直に感心したみたいだった。

そして、何気なく、割れたコップの破片を掴み取る。

掴み取った破片は、何処かへと消え失せていた。

突然。

凄い勢いで、窓ガラスにヒビが生える。

パンッ、パンッ、と勢いよく、何かが飛んできて、窓ガラスに蜘蛛の巣のような亀裂を生んでいく。

どうやら、それは、外からの攻撃のようだった。

外側から、亀裂を入れられている。

「……何をしたんだ？」

「瞬間移動」

白哲の美貌の青年は、唇を歪める。

どうやら、コードが割ったコップの破片を空中に投げて、それを外へと瞬間移動させ、そのままの遠心力で、コップの破片を外側から窓ガラスに激突させたらしい。

投げた方角、ベクトルすら入れ替えている。

「他にも色々出来るけれど、やってみる？ 勿論、自分、一人を丸々、飛ばす事だって出来る」

コードは生唾を飲み込む。

これが、ウォーター・ハウスを倒した能力。

……………

「明日、敵地へ向かおう。オレの能力で、敵の居場所も察知する事が出来るんだ」

「どうやって？」

突然、そう言われて、コードは眉を顰めた。

フェンリルはにやにや笑う。

「そういう能力なんだ」

そこは聖なる海溝と呼ばれる場所だった。

臓物の草原、屍峠から数十キロ先の場所にある。

“暗黒の地”の魔物達が入れない封印が施されていた。

次元と次元の狭間にある空間をシャット・ダウンして、断層をズラす事により、外部の者達を入れられないようにしていた。

しかし、“門”と呼ばれる入り口が存在し、そこから中へと侵入する事が出来る。

ニアスとフィア・ゾーン、それから、アンサーはそこにいた。

フィア・ゾーンが、また何処からか調達してきたのかは分からないが、数名は乗れるジープを持ち出していた。長い長い臓物の草原を、三名はその大きな四輪車で移動したのだった。

途中、襲ってきた魔物達は、全て、アンサーの『能力』で撃退した。

ニアスとフィア・ゾーンは、彼女の能力を垣間見て、唸り声を上げたのだった。

三名の目の前には、大きな暗い地面の裂け目が開かれている。

まるで、深い深い海溝のようだった。

この下には、この暗黒の地の中で、比較的、平穏な場所があるという。

そう、数少ない、人間が住んでいる場所なのだ。

“門”と呼ばれる場所は、山みtainな石柱が置かれていた。

「合言葉でも必要なの？」

ニアスが言う。

フィア・ゾーンは首を横に振った。

「あそこで仕事をした事があるが、そんなんじゃねえな」

フィア・ゾーンは、懐から袋を取り出した。

その中には、乾燥して、中に布の詰められた手首が入っている。

おそらく、他人から切り取ったものだろう。

ニアスはすぐに、その用途を理解する。

彼はその手首を、石柱の中央へと近付けていく。石柱の中央には、得体の知れない文字がとぐろを巻くように書かれていた。

そして、一際、大きな黒い文字の上に、手首を当てる。

すると、しばらくして、石柱が真っ二つに割れた。

「よし、この手首のDNAによって、どうやらオブジェクトは俺達を、ここの住民だと認識したみたいだぜ？　じゃあ、行くか」

奥は、十メートルくらいの部屋になっていた。

部屋の中に入って、しばらくすると、部屋は地面へと落下していく。

「エレベーターになっている」

しばらく、三名は下へ下へと、向かっていった。

そこは、ヨーロッパの庭園を思わせる景色だった。

沢山の自然が広がっている。

木々は不思議な白みがかったものが多く、薄い緑の葉が地面に広がっている。紫陽花やキャベツに似た、妙な植物が所々に実っていた。大気は乾燥している。

まるで、神々の住まう庭園のようだ。

植物が生い茂り、自然が溢れている。

もう少し、寒くなれば、雪が降り積もるのだという。

空には、地底の底にも関わらず、真っ赤な太陽が昇っている。

此処が、聖なる海溝と呼ばれる場所。

神聖な場所と呼ばれ、暗黒の地の者達が触れられない、隔離された場所。

人口は数十万人くらいだろうか。

面積は、大体、日本の四国くらいの広さはあった。

フィア・ゾーンは嘲笑する。

「此処で作られる天然のドラッグによって、毎年、何万人もの青少年が犠牲者になる。中には死ぬ奴もごろごろいる。此処は神の住まう地らしいからな。取り締まる側も、ハンターも立ち入れない。此処の教皇は最高に腐っている処がクールなんだ」

「天然のドラッグ？」

ニアスは訊ねた。

「そう、天然のドラッグだ。そこら辺に生えている。此処に住民には耐性があるけれど、外の奴らには無いのさ。でも、盛大にトリップ出来る。気持ちよくな。それに、此処の女はよく売れる。何でも、妖精のように見えるらしい」

げはははっ、と大男は高らかに笑う。

ニアスは不快そうな顔をした。

「とても綺麗に見えるけれども、中は腐っているって奴？」

「そういう事だ。まあ、何が神の住まう地だ、って話だ」

アンサーは、見える景色全てに興味を示していた。

彼女はまだ、幼児くらいの精神年齢なのだろうか。

ニアスは彼女の拳動を見て、そんな事を考えていた。

「処で、ニアス。お前、どれくらいの間人なら殺す覚悟ってある？」

「場合によるわよ。でも、.....あたしはかつてこの世界の者達を憎んでいた。今でも、それは変わらないかも」

「そうか。俺は今、心が躍っている。なあ、何もかもぶっ壊してやろうぜ？ 手始めに、此処からな。何もかもだ」

フィア・ゾーン口いっぱいを含んだ唾液を地面へと吐く。

そこから、白いネズミが沢山、生まれてくる。



ネズミ達は、散り散りに飛び散っていく。

「半分くらいは殺しちまっても構わないよなあ？ 四十万？ それとも五十万くらいか？ 此処の人口はよおお。ルルイエには王様になって貰わないといけないんだよ。だったら、まずは住民達には恐怖を与えなければならない。ニアス、お前、覚悟は出来ているかよ？ 大量殺人犯になる覚悟はよお？」

「……………あたしの能力じゃ無理よ。無差別攻撃なんて。でも、その片棒を担ぐ覚悟はあるわ」

「充分だ。じゃあ、これから殺すぜ、軽く二十万人くらい。此処を血の池地獄に変えてやる。樂園を地獄にな。原子爆弾を落としたトルーマンを思い出すが。万単位で殺すってのは、どんな気分なんだろうなあ？」

ニアスとフィア・ゾーンがそんなやり取りをしている間、アンサーは白い森の中で、花を摘んでいた。

まるで、無邪気そのものだ。

二人は彼女のそんな姿を見て、毒気を抜かれる。

アンサーは、花を摘んで、それを輪っかにしていた。

そして、まるで髪飾りのように自分の頭に掛ける。

ニアスはくすくすと笑う。

フィア・ゾーンは溜め息を吐く。

「まずは、飯でも食ってからだな。……お前ら腹減っているだろ？」

ごく当たり前のような言葉。生体の維持に対する気遣い。

女の方は苦笑した。

「此処の特産品って何なの？」

「キノコと兎肉のソテーが美味いらしい。……肉食いてえな？」

「本当に貴方って肉ばかり食べているわよねえ、身体に悪いわよ」

「るせえな、だからこんな体格してんだよ」

フィア・ゾーンは、自分の丸々に太って、体脂肪の乗った腹を摩る。

そういえば、此処のレストランの料理は絶品であるというのも、有名だった。

十

コードが寝静まった後、フェンリルは巧く寝られずに、睡眠薬の錠剤を口にして、それが効いてくるのを待っていた。

突然、辺りの闇がぼんやりとした光の形に変わる。

光明。

温かな光のようにも見えるが、しかし、それは余りにも寒気がする程の、暗黒の存在のようにも思えた。

あるいは、そのどちらでもない。

そいつは、窓枠に座っていた。

透き通るような肌。

フェンリルに似寄る、白と黒のコントラストをしたファッション。

風も無いのに揺れている、草木のような萌黄色の髪。

赤い、紅玉のような眼。

そいつは、まるで嘲笑するかのような笑みを口元に浮かべている。

おそらくは、常人が彼女を見ようものならば、足が竦んで動けなくなるであろう。

恐怖を纏っているといっている。

恐怖にも様々な種類があるが、彼女と対峙した時に感じる恐怖は、さながら、自分自身の中の闇そのものと対面するかのよう、まるで鏡の向こう側を覗き込むかのような怖さであろう。

フェンリルは彼女を見るなり、面倒臭そうに、ベッドへと転がる。

「で、お前は何の為に、彼の目的に手を貸そうと提案したんだ？」

金と銀に染まった髪を束ねている青年は訊ねた。

「興味が湧いたからよ」

「興味が湧いた？」

「そう、彼の名前はえっと……何て言ったのかしら？ 彼の生き方、目的に少しだけ興味が湧いた」

青年は苦笑する。

「興味が湧いた？ お前が興味を持つのは、”死の翼“や”青い悪魔“のような奴らだけだと思っていたよ。誰よりも強くなりたいんだらう？ 誰にも届かないくらいに。しかし、少なくとも、このコードとかいう彼は、君の興味の歯牙にも掛けないような奴だとは思うけどな？」

「そうね」

彼女はあっさりとしてそれを肯定する。

「しかし、死の翼も青い悪魔も、奴らとも、いずれ決着を付けるわ。私は“最強”になる。誰にも届かないくらいに」

その眼には、咽ぶような敵意が宿っている。

そして、ふっ、と笑った。

「まあ、それはいい。そのそこで熟睡しているコードとかいう男、多分、彼が巻き込まれているであろう事件。その先に興味があるのよ。おそらく、彼が戦ったとかいう敵、そいつの背景にいる者。そいつに興味がある」

フェンリルは少し、うとうととしてきて、毛布を深く被る。

「まあ、勝手にしろよ。オレは暇潰しでいい。ウォーター・ハウスを倒した賞金がまだまだ残っている。しかし、まあ、君の手伝い、という形でコードに同行するよ」

彼は徐々に深い眠りに落ちていく。

もう少し、飲む錠剤を減らさなければなあ、と、そんな事を考えながら、彼は眠りに落ちていった。

教皇と呼ばれる老人がいた。

彼はこの地を何代にも渡って、統治していた。

教皇の権威によって、この聖なる海溝は護られていた。

彼の年齢は幾つくらいなのだろうか。

彼が父親から権力を譲られたのは、五十年程前の事だろうか。

遙か昔から、何代にも渡って。

この地は護られてきた。

彼は王冠を被っている。この地を統治するものの象徴として、所々に葡萄の房のようなものが掘られた王冠。葡萄は此処の民族にとって、神聖な果物だった。

血肉の象徴、かつて降りてきた神が自身の肉体を砕いて、人々に分け与えたという伝承。

その王冠は、いまや、地面に転がり、彼は呼吸すらままないほどの体制で地上数十センチを離れて、吊り上げられていた。

「お前が此処の王様なんだろ？」

フィア・ゾーンは下卑た笑いを浮かべる。

ニアスと、背後に控えている、アンサーは何の感情も灯らない眼で、その老人を見ていた。

紫色の絨毯が敷かれて、絨毯の所々には、密教などに使われる曼陀羅のような幾何学模様の絵が幾つも幾つも織り込まれている。壁や床は、冷たい石畳だ。此処に住まう僧兵達は、みな、紫色のヴェールを、全身からすっぽりと被っていた。

彼ら侵入者の背後には、何名もの側近の僧兵達が死屍累々と横たわっている。

そいつらは、何に脅えたのか、恐怖に引き攣りながら、自身の持っている槍や剣などの得物で自害した者もいれば、頸動脈などを小動物によって食い千切られている者もいた。

何百年もの間、続いてきた歴史が崩されようとしている。

彼らはほぼ事態を飲み込めずに死んだ。

この街……国家において、反逆者などがいよう筈が無いと思いついてきたからだ。

ニアスは手持ちの籠から、一個の林檎を取り出すと、しゃりしゃりと半分まで噛み砕いて食べると、残りを地面へと放り投げる。

「この町は、フルーツが特産品だと聞いたけれども。まあまあよねえ」

そして、籠の奥にあった白葡萄を一房、口にする。

そして、もごもご、と口の中で咀嚼した後、地面へ皮と種を吐き出す。

「あら、やっぱり、名物の葡萄はおいしいのね」

吊り上げられた教皇は、口元から泡を垂らしていた。

フィア・ゾーンは、完全に気絶した老人を、放り投げる。

老人は壁に激突して、悲鳴を上げる。

「簡単に制圧してしまっただけ。なあ、おい。どうするよ？」

アンサーは宮殿の窓の外を覗いている。

外には、海溝の住民達が、長閑に過ごしていた。

とても、平和そうな顔だ。

いつものように、皆、愛を語り合い、労働に奉仕している。

夕方には、家族と一緒に、晩御飯を食べるのだろう。

彼らは、宮殿の侵入者にまるで気付いていない。

「仕方ねえなあ。なあ、王様。俺達、もう此処を制圧、侵略しちまったぜ？　なあ、抵抗してみろよ。お前が死ねば、此処の民の半分くらいは皆殺しにするつもりだ。何かねえーのか？　切り札とか、助っ人とか。お前を守っていた兵士達、全員、殺しちまったぜ？」

フィア・ゾーンは無感動に喋り続ける。

教皇は何かをぶつぶつ呟いていたが、侵入者の三名は彼の話聞いていない。

「絶対に侵入者を撃退する使い手がいる筈なんだよなあ」

フィア・ゾーンは呟く。

しかし、彼らが倒した兵士達は、全員、普通の人間だった。

突然。

壁に投げ付けられて、ほぼ身動きの取れなくなっていた老人は、服の中から何かを剥ぎ取ると、それを口の中へと放り込んだ。

どうやら、宝石のようだったが、それを吞んで以来、老人は動かなくなる。

宝石のように見えたが、どうやら、毒物だったらしい。

老人の口元から、異様な臭いが漂い、彼の胃の辺りは溶け出して、孔が開いていく。

「えっ、自害した？」

ニアスは呆けたような顔をする。

「それだけ大した事無かったようだぜ」

ニアスは面倒臭そうな顔をする。

アンサーは自分の髪の毛を弄っていた。

これだけ、意気込んできて、このザマだ。

邪悪なものを入れない地と呼ばれている、聖なる場所も、蓋を開けてみれば、こんなものだったというわけだ。

「どうするかなあ？　取り合えず、ルルイエに報告するかあ？」

フィア・ゾーンは、胡坐をかいて、大欠伸をする。

ニアスは老人の死体を眺めていた。

「どうやら、一応、やる気はあるらしいわよ」

老人の死体からは、何かが生え出していく。

どうやら、それは植物の蔓のように見えた。

街の中に生えている木々に似た色をしているが、明らかにそれは敵意を持った何かの姿へと変わっていく。

老人が死ぬと発動する能力だったのか、それとも、呑み込んだ宝石のほうに、何か仕掛けがあったのか、それは分からないが。

とにかく、そいつは奇怪な生物へと変貌していく。

しゅっ、といった音が建物内に響いた。

一瞬にして、フィア・ゾーンの右腕から、大量の血液が噴出する。

彼は思わず、小さく悲鳴を上げた。

ニアスはそいつに向って、彼女の能力を“発動”させるが、意思が無いからか、まるで効いていない。

ニアスとフィア・ゾーンは、咄嗟に動いていた。

樹木のような姿になったそいつは、彼ら二人を狙って、攻撃を繰り出してきた。

フィア・ゾーンは、既に、反撃を開始している。

受けたダメージによって、飛び散った血液から、大量の白いネズミを生誕させる。ネズミ達は、一斉に、植物の怪物へと襲い掛かっていく。

しかし、怪物に触れた途端、触手によって絡まれて、ネズミは樹木と同化し、消化されていく。

。

やるじゃない、とニアスは小声で呟いた。既に、彼女は部屋の外に向っているが、教皇の謁見の間である、このフロアはやたらと広い。

怪物が暴れるには、うってつけの場所だった。

アンサーは、離れた場所で窓を見ながら、のんびりと、まるで現在の危険などに興味が無いかのような態度を取っている。

ニアスとフィア・ゾーンの能力は、完全に無力と化していた。

敵を舐めて掛かっていた。

敗因があるとするのならば、それだけだろう。

今や、ニアスは肩と腹から血を流し、フィア・ゾーンは血塗れになりながら、どうにかして、致命傷を避けようと、次々と、噴出する血液や流れ出る汗によって作り出されるネズミを使って、自らを防御するのに精一杯だった。

怪物は、石畳や、フィア・ゾーンの作り出すネズミなどを喰らって、少しずつ成長していく。手が付けられない。更に、根っこを張り巡らせて、兵士達の死骸に触れると、死体の体内へと入り込んで、その養分を吸い取っていく。

ニアスは思い出す。

そういえば、この聖なる地には守り神がいる、と。

そいつは、この地を守っている王の死と共に、誕生するのだと。

守り神は、決して、外からの蛮族を赦さないのだと。

既に、フィア・ゾーンは、逃げに入っている。

生み出したネズミ達を、まるで方陣を描くように集めている。

外の扉までの距離は、大体、13メートル少しといった処だろうか。

まるで、ニアスの盾になるかのように、彼は怪物の前に立ちはだかっていた。

「引くぞ。やはり、戦力不足だ。こんな辺境の地すら制圧出来ないなんて笑えてくるなあ、おい？」

ニアスはよろよると、傷付いた脚を引き摺りながら呟いた。

「本当、世界、征服なんて。笑ってしまうわよねえ……」

ニアスは更に、後ろに下がる。

それに合わせるように、奇怪な植物は蔓を捻って、彼女の足首に深手を負わせた。彼女は床に倒れる。フィア・ゾーンは、ネズミ達を、彼女の周りへと向わせた。

絶体絶命だった。

果たして、この部屋から出られるのだろうか。

アンサーは、まるで部屋の光景を意にも介していないかのようにだった。

怪物も、彼女には無関心のようにだった。

アンサーは、窓を開ける。

すると、窓の中から、鳥が入ってきた。

鳩のような生き物だ。

鳥は、ばたばた、と羽ばたきながら、部屋の中央へと向っていく。

そして、おもむろに、奇怪な怪物の肉体の一部へと止まった。

みるみるうちに、鳥は植物の肉体によって食い潰されていく。

アンサーはその光景を眺めていた。

瞬間。景色がぐら付いたような錯覚。

ニアスは血を失って、朦朧としていた。

すぐに、意識を取り戻す。

アンサーの表情がくっきりと、まるで、無表情のセルロイドの人形が動き出すかのように。

アンサーと名付けた少女は、はっきりとした感情を露にしていた。

それは怒りに近く、悲しみにも似ていた。

しかし、そのどちらでもない。

あるいは、それは歓喜にすら似ていた。

彼女は、今、彼女が愛でた鳥が好きだったのだろう。それが簡単に潰れてしまったという感慨。まるで、自分自身の郷愁的な思い出を引き千切るような。

ある種の陶然にも似ていた。

ニアスが酷い眩暈に晒されて、地面に半ば、倒れる。

巨大な蔓の攻撃が、ニアスの首があった空間を薙いでいた。彼女は間一髪で、致命的な攻撃を避けた事になる。

その蔓が引き戻されて、反動で地面を穿つ。

気付くと。

アンサーがゆったりと動いていた。

怪物はアンサーを認識したみたいだった。

彼女は、フロア内に置かれている篝火へと近寄る。

小さな指先が、焰に触れた。

刹那。

煌々とした爆裂が巻き起こる。  
ニアスは這い蹲って、身を守っていた。  
まるで。  
まるで、踊るように赤い少女は回る。  
その指先には、篝火から引き千切るように掴み取った焰が纏わり付いていた。  
巨大植物は、確かに赤い少女に向かって、攻撃を向けていた。しかし、まるで舞った羽箒が焼け落ちるように、植物の蔓は、空中で炭火となって、黒檀のように炭化していた。  
真紅の焰が、一面に広がっていく。  
それは圧倒的なまでの破壊だった。  
ニアスが、フィア・ゾーンが、その光景を目の当たりにして驚愕し、言葉を失っている。  
焰は拡大し、燃え広がり続けている。  
赤が増殖し続けているのだ。  
ニアスは唾を飲み込んだ。  
これが、ルルイエが創り出した、正体不明の存在であるアンサーの能力。  
万物に存在する“赤”を増大させる能力『サーキュレーション』。  
赤が巡り、赤が回る。赤が循環し、赤が輪舞する。  
焰は、蛇のように、舞踏のように、狂った動きの下、怪物の肉体を焼き尽くしていく。  
それは、赤い。  
赤い、赤い、焰が物質を喰らい続けている。  
宮殿は倒壊していく。  
後には、無傷のアンサーが佇んでいた。  
何か、感情を出そうと、顔を様々な形に歪めるが、どうにも巧くいっていないようだった。  
多分、今、笑いたいのだろう。

十

フェンリルとコードの二人は、“暗黒の地”へと辿り着いた。  
フェンリルは相変わらずマイペースで、此処に来るまでにあつた、奇妙な魔物達が暮らしている街路にて、何着かの服やアクセサリなどを購入していた。  
それから、タロット・カードや水晶などの占い道具も買っていた。  
コードには、彼の行動がよく分からなかった。  
何着ものゴシック・ロリィタ服が入った買い物バッグを片手に下げて、楽しそうに、また次の店を覗く。  
此処は、“暗黒の街路”と、一応、呼ばれてはいる。  
服を売っている店員は、どうやら、亡霊だったり吸血鬼だったりするみたいだった。一体、彼らはどのような存在として、この世界に生きているのか分からないが、取り合えず、亡霊などに対しては、コードの能力が通じず、まるで生体反応を示さなかった。

そうやって、何時間もの間。あるいは下手すると、半日近くもの間、時間を潰された後、フェンリルは街路の中にある馬車を借りようと言った。

馬車の御者は、首から上が無かった。

馬車は、二頭の骸骨の馬に引かせているみたいだった。

.....不気味な世界だな。

コードは溜め息を吐く。

正直、彼が主な拠点としている裏・新宿の街角よりも、此処はより気味の悪い空間が広がっている。

馬車の運賃を前払いして、二人とも幌の中へと入る。

いつの間にか、フェンリルは持っていた手荷物が消えていた。

一体、何処へと隠しているのだろうか？ コードは思う。

おそらく、彼の空間移動の能力と、何かしらの関係があるのだろう。

御者が革の鞭を振るう。

骨だけの姿をした馬達は走り出した。

しばらく行くと、屍峠と呼ばれる場所へと辿り着く。

幌の中の窓から、峠の景色が見えた。

泥沼の中で、大量のゾンビがうようよと彷徨いながら歩いている。

まるで、生きとし生ける者達を、憎悪するかのような呻き声を上げていた。ぷしゅり、ぷしゅり、と腐敗ガスが噴出している。

「何でも、ゾンビは風物らしくて。よく短歌なんかに使われているらしいぜ。季節によっては、増える時期があるそうだ」

ゾンビのうちの一体が、いきなり崩れ始めた。もう腐って肉体を維持出来なくなったのだろう。何でも、彼らは別に危害を加える事は稀らしい。

更にしばらく行くと、大量のバラバラ死体が転がった草原へと出た。

臓物の草原。そう呼ばれている場所だ。

「此処は、本当に危険だ。此処を渡らないと行けないから、わざわざ、馬車を使ったんだが」  
死体は何故か、腐らずに転がっている。

まるで、ライオンのような怪物が何頭も共食いを行っている光景を目にした。

「大丈夫だ。この馬車は外にオレ達の匂いが漏れない。御者と馬は死体だからな。興味を持ちはしないよ。けれども、外に出れば、命の保障は出来ない」

しばらく草原を進んでいくと、フェンリルはふと馬車の中の何も無い空間に向って、小声で語り掛けていた。

.....今回は都合がいいんだな。相手の方が呼んでいるのか？

.....なるほど、その位置ならば、確かにその場所しか無いな。オレも行った事は無いが。

コードは聞き耳を立てている。

どうやら、彼は視えない何かに話し掛けているらしい。

それが何なのか、訊ねたい所だが、聞いても答えてくれそうに無かった。



フェンリルは御者に明確な目的地と、その方角を言う。

更に、何時間か経過した。

フェンリルとコードは馬車を降りる。

降りた場所は、小さな山脈にも見える、大きな岩石などに囲まれて、巨大なオベリスクが聳え立っていた。

それはまるで、エジプトなどで発掘される、古の地のような。

しかし、エジプトとは違って、湿った空気の風が肌を薙いでいる。

「まだ戻らないでくれ。もし、入れなかったら、歩いて帰るわけには行かないから」

彼は御者を待たせていた。

フェンリルは、その古墳へと向っていく。

大きな門のようなものが見えた。

彼は少し考えて、言った。

「なるほど。中は空洞になっているな」

彼はコードを手招きする。

そして、御者に向かって叫んだ。

「もう、帰っていいぞ。オレ達は此処から先へと向うから」

コードはフェンリルの元まで向う。

フェンリルは彼の手を握り締める。

「じゃあ、行くぞ」

目の前が反転したような感覚。

気付くと、まったく別の場所にいた。

どうやら、オベリスクの中だという事を理解するのに、十数秒もの時間を有していた。

がたん、と地面が揺れている。

どうやら、地下へと下降していつているらしい。

更に、数分。

外に出る。

空を見上げると、燦々と太陽が昇っていた。

暗闇の、光がまるで差し込まない暗黒の中から一転した景観。

森が広がっていた。白い森だ。

葉草の匂いが漂っている。

「此処が、“聖なる海溝”と呼ばれるらしいな、噂には聞いていたけれども」

街へと降りていく長い階段があった。

此処からは、街全体を眺望出来た。

広い街だ。

どのくらいの、面積があるのだろう。

少なくとも、住民の数はそれなりに多いのだろう。

街の所々では、列車が走っていた。どうやら、それが移動手段らしい。

コードは、街の一角を訝しげに見た。

どうやら、隣の白と黒のドレスを身に付けた彼も、それに気付いたらしい。

一際、大きな建造物だった。

城のようにも見える。

そこからは、煙が上がっている。

すぐに、察した、何か異常な自体が起きているのだろうと。

炎が燃え続けている。

城の周りにいる住民達は騒然としていた。

城は既に、半壊しており、火事後のまだ消化されていない炎が燻り続けているかのようだった。

二人は階段を降りていく。

城までは少々、遠い。

長い長い階段を降りた後、近くにあった駅へと向う。

「コード、此処の通貨は持っているか？」

「まさか」

二人は顔を見合わせて、苦笑する。

「仕方無いよな。もし古道具屋とか見つけたら、何か売ってお金にしよう。でも、もしかして身分証明書とか必要なのかなあ？」

二人は更に笑みを浮かべた。

フェンリルは、コードの腕を掴む。

そして、列車の中へと入り込んだ。

堂々と、二人は無賃乗車を行う。

「車掌に切符を拝見したいと言われたら。何か金目のものでも、握らせておこう」

彼はそう呟いた。

列車は動き出す。

この時間帯は空いているみたいで、乗客が余りいない。

そうやって、何駅か乗り続ける。

しばらくすると、乗客が増えてきた。

彼らの何割かは、顔面蒼白だった。

二人はすぐに気付く。

あの城らしき場所で起こった惨状。

その惨禍に巻き込まれたであろう者達の、家族なのだ。

城に近付くに連れて、そのいった者達は増えていく。

ゴシック・ロリィタの青年は、うとうととまどろむように外の景色を眺めては、ぼうっとしていた。たまに、街の自然が美しいな、と呟く。

コードは少し神経質に色々な事を考えていた。

.....こんな場所まで来て、本当に例の敵がいるのだろうか？

先ほどから、そんな事ばかりを考えていた。

また、駅に着く。あと、一駅ほどで、目指す場所に辿り着く。

乗客。

その中に、深くフードを被った女を見た。

コードは、一瞬、思考停止する。

運命？ そんな馬鹿みたいな言葉が頭の中で響いた。

その女は、屋敷で会った双子の内の一人だった。

確かに覚えている。

どうやら、彼女は負傷しているみたいだった。

彼女は連れている、一回り小さい同じようにフードを被った少女の分まで、駅員に運賃を渡す

。

コードは少し考える。

彼女が連れている、もう一人は何者なのだろうか？

彼女達は双子だった。身長も同じだ。

では、あの少女は何者か。

女は全身が痛むのか、よろめくように席へと座った。

そして、荒く呼吸する。

薄っすらと、着込んだ服から赤い染みが滲んでいた。

.....誰かと戦っていたのだろうか？

コードは既に、自身の能力である『クエーサー』によって、彼の敵である女の健康状態を調べていた。

呼吸、鼓動。

おそらくは、肉体にかなりの損傷を負っている。致命的な重症こそ負っていないものの、出血が酷い。

.....暗殺するならば、今だ。

コードはゆっくりと、指先を彼女の頭部へと向ける。

照準を定めていく。

列車内は、少々、人が多い。

可能ならば、確実に始末したい。決して、他の誰も傷付けずに、だ。

隣では、フェンリルが窓から眼を離す。

そして、小さく言った。

「駄目だ。お前、あっちの方が先に気付いている」

コードはそれが引き金となるかのように、クエーサーによって作り出される音の弾丸を発射させていた。

フェンリルの忠告は、却って、彼の闘争本能を鼓舞する形となってしまったのだった。

クエーサーによって発射された超音波が届くよりも早く、敵の能力者である双子の内の一人、ニアスはコードと視線を交わしていた。

ニアスの右側頭部が出血する。攻撃はかすらせただけに止まっていた。

既に、ニアスの攻撃は完了していた。

ニアスの能力である『モーザ・ドゥーグ』の攻撃を、その身に受けて、何故、他の能力者達が、自ら死を選んだのかを、その身で理解する事になった。

それは、深い、深い悪夢だった。

辺り一面の景色がガラガラと崩壊していく。

フードを被った女の顔が崩れていく。

それは、黒い黒い大きな孔だった。

まるで、黒い渦巻きのような顔へと変貌していく。

そして、彼の耳元で囁き声が聞こえた。

声。声。声。声。

声が聞こえてくる。

彼はその声を知っていた。

気付けば、彼は自身の肉体を離れていた。

酷い、離人感。

彼は自らの肉体が完全に失われてしまったかのような感覚に陥る。

気付けば、無人の列車の中にいた。

いや。

まるで、人々が影絵のような姿をしている。

人間が人間でない、人間のいない世界。

もう一つの合わせ鏡のような世界。

顔が合った。

それは、頭の中に直接、映像を流し込まれているかのようなようだった。

その顔は、かつて、……彼が誤って殺した男の顔だった。

友人だった男。仲間割れ。

何故、あの時、巧くやれなかったのだろう。

後悔。

……………。

そう、後悔だ。

彼はいつも、心の中に罪悪感を封じ込めていた。

それを、今、無理やり引きずり出されている。

大量の腕達が、列車の隙間から這いずり出してくる。

それは、彼を冥府へと引きずり込もうとする、亡者達の腕なのだろう。

彼は思わず、眼を覆おうとする。しかし、腕が思うように動かない。

声が残響している。

お前のせいで、死んだ、俺は殺された、殺された、お前は一体、何をやっている？ 何故、今もなお生きている？

コードは絶叫する。既に、それは声には為らない声だった。声帯が引き千切れんばかりの、限界まで引き上げた声。

十

フェンリルは床に横たわるコードを見て、敵の攻撃にしばし戦慄する。

コードは、完全なまでに恐慌状態に陥ってしまった為、見るに耐えなくなり、思わず、手刀を首に入れて、気絶させる。気を失ってもなお、彼は悪夢の中にいるみたいだった。全身が痙攣している。

.....何をされた？

既に、数メートル先には敵が迫っている。

此処から、彼を置いて逃れるのが手っ取り早い。

「なるほどね」

フェンリルの隣には、萌黄色の髪をした、一人の少女が座っていた。

いつの間にそこにいたのか。

彼女はまるで愉快そうに、言った。

「このままだと、彼、死ぬわよ？」

フェンリルに似る、白と黒のコントラストのドレスを纏った少女。

酷薄な微笑を浮かべて、氷のような声音を歌のように紡ぐ。

そこには、冷徹なまでの無感動さしかない。

「どうにか為らないのか？」

「それどころじゃないかもしれないわよ？」

敵側の方も、警戒している。

フェンリルの方は、既に、自身の能力を使っていた。

それは、コードの音響の反射と類似する効果を持つものだった。

フェンリルの瞬間移動の能力は、更に、その能力の派生として、周囲の空間の形を頭の中で思い描く事が出来る。眼で見なくても、手で触れなくても、ぼんやりとしているが、大体の形の輪郭が分かる。

敵は警戒して、此方に踏み込まない。

既に、コードを戦闘不能にしてもなお、動かない。

列車は動き出している。

乗客達は、不審そうに倒れているコードを見ていた。

誰も手を差し伸べる者はいない。

周囲がまるで、凍て付いている。

乗客達は、異常事態が起きているのだと、理解しているみたいだった。

「分かった事があるわ。今の敵の能力は、おそらくは、私と同じように、“認識”や“概念”、あるいは“意識”に依存した攻撃なのでしょうね」

淡々と分析していく。

そして、少し首を傾げた。

「問題は、どういう動作が攻撃のスイッチになるのか。視線なのか？ それとも、顔を合わせた時点で攻撃を受けるの？」

既に、二人とも攻撃の準備に移っていた。

問題は、相手の出方だ。

列車は動き続ける。

相手側から、口を開いた。

「……………そこにいるんでしょう？」

二人とも、敢えて反応を示さない。

「正直、今、あたしは戦いたくない。怪我がちょっと酷いから、さっきの彼はあたしを狙っていたから、仕方無かったけれど」

フェンリルの眉が、ぴくり、と動く。

「能力を解除しろ」

それだけ告げた。

「彼の動悸がおかしい。何か、強いストレスを与えたのか。かなり汗をかいている。お前の能力が何か知らないが、このままだと、彼は衰弱死する」

数秒の間、沈黙が起こる。

「いいわ」

そう言って、女は指を鳴らした。

すると、倒れているコードの肉体が跳ね上がると、彼の動悸が静まっていく。

「さて、と。あたしはこれから、怪我の治療を行わなければならない、今回は気が乗らないし、あなた達、ドーンとやらの刺客なんでしょう？ 今日の所は、引いてくれないかしら？」

女は疲れたように、空いている席へと座った。

そして、コードの音波の攻撃を受けた箇所に、タオルを当てる。

「濡れタオルなら、もっと良かったんだけど」

列車は停止する。

どうやら、次の停留所に停まったみたいだった。

そこは、例の城の近くだった。

近くで見ると、破壊の痕は付近の建造物をも巻き込んで、まるで暴風のように爪痕を残していた。

フェンリル達は此処で降りなかった。

大体の状況を理解したからだ。

彼はコードを座席に寝かしつける。

そして、列車が動き出すのを待つ事にした。

案の定、此処で沢山の乗客が降りていった。

列車はこのまま進むと、一周して、元いた街の入り口へと戻っていく。

そして、それで終わる筈だった。

フェンリルはコードが再起するまで、彼女を見逃すつもりだった。それが取引だった。お互いに万全な状態から、再び対戦する。

その筈だった。

しかし。

.....

再び、列車は動き出す。

がらがらと空いた列車の中、二人の少女が対峙していた。

一人は、光明のような白に漆黒のような黒を交差させたようなドレスを纏った少女。

彼女はまるで、空間そのものを蝕むかのように、そこに存在していた。

彼女を取り巻くように、光と陰が、くっきりと唸り声を上げているかのようだった。

薄い黄緑色の髪が揺れる。

口元は、薄っすらと歪んでいる。

真っ赤な眼は笑っていない。

周りの乗客は、彼女の存在にはまるで気付いていないかのようだった。

しかし、彼女は確かにそこに存在している。

そう、フェンリルとニアスの二人だけが、その少女の姿を認識していた。

.....もう一人を除いて。

対峙する、もう一人の少女。

彼女は今や、フードを投げ捨てて、はっきりと顔を見せていた。

黒色の長い髪。

その全身に纏う装束は、赤だ。

真紅のドレス。いや、ドレスというには、身体の所々を露出させている。

足元など、膝まで露出させた素足の上にヒールの高いブーツを履いていた。

腹は肉体のラインを強調する為に、赤黒いコルセットで締められている。

列車は走り続けている。

まるで、鏡を覗き込むかのような表情で。

二人の少女は、互いを見つめている。

先に口を開いたのは、白と黒の少女の方だった。

「貴方は何？」

誰何されて、赤い少女は答える。

「私は赤」

「そう」

風も無いのに、白と黒の少女の髪は靡いている。

まるで、結界でも張っているかのよう。

誰も、彼女達の空間には立ち入らなかった。

窓の外を見ると、太陽が沈んでいく。

此処の太陽は、一体、どのような現象として存在しているのだろうか。

とにかく、太陽は沈んでいく。闇が広がっていく。

「で、貴方の名前は何？ 私の名はレイア。名前があるんでしょう？ 何にでも名前はある。名前を付けて、自分自身を確立するのだから」

赤い少女は答えた。

「わたし、私の名前はアンサー。そう呼ばれている、わ……。何の為に創られたのか。まだ、分からない、……………わたしは」

突如、少女アンサーは自分の掌に歯を突き立てる。

皮膚の表面を噛み切って、真っ赤な血液をぼたぼた、と流していく。

血液はあっという間に、増殖し、列車内に赤いプールを作っていく。

レイアは彼女を吟味しているみたいだった。

「で、質問だけど。貴方って人間なの？」

短い、それは酷く本質を射抜いているかのような内容だった。

赤い少女は、きょとん、としたような顔をする。

「え、えと。私、フィア、ゾーンから言われていて。その、そのね、もし、敵に会ったら、やってやれ、って。私が持ってる、思いっきりで」

もじもじするように、彼女は言う。

そして、いつの間にか、手の中には、あるものが収められていた。

それはマッチの箱だった。

ばしゅっ、という音を立てて。

取り出した無数のマッチに焰が燈る。

ぽいっ、と円を描くように、マッチは周囲に投げられた。

一瞬だった。

マッチが一瞬にして、火柱へと変わる。

列車内が焼き尽くされていく。

何名もの乗客達が火達磨になっていく。

人間が生きながらにして、焼肉になる臭いが充満する。

レイアは焰の中で、平然と立っていた。

そして、まるで呆れるように小さな溜め息を吐く。

「みんな、みんな、殺さないと、殺さないと。そう言われたんだ」

アンサーは、きよろきよろと、辺りを見渡す。

そして、まるで自分で自分のやった事に対して、うろたえているかのような。

「お馬鹿さんね……」

嘲笑の言葉を放つ。そして。

レイアの動きは速かった。

もはや視認出来ない速度で、赤い少女、アンサーの顎半分と胸元に拳の連撃を与えた後、最後には、腹に捻じ込むように拳をめり込ませて、アンサーを後方へと吹っ飛ばす。



離れた場所に避難していたニアスは、呆けたように口を開く。

列車はなおも燃え続けて、乗客に被害を出し続けていた。

「やっぱり、倒した方がよかったかしら？」

レイアは、相棒のフェンリルの方を向いた。

「何で、手加減したんだ？」

「そうね。……………今、あいつを倒す意味が無いからよ、もう少し、様子を見たい」

沢山、人が殺され続けているというのに、こいつはこれだ、とフェンリルは心の中で悪態を付く。

燃え盛る焰の中から。

赤い少女は立ち上がってきた。

顔半分が少し、変型している。

そして、まるで、声にならない叫びを上げた。

「わ、よ、よくも、あ、あたし、私を、酷いわ、酷い。あたし、創られて、生まれて、どうすればいいか、教えて欲しいだけ、なのに。なのに。ねえ、教えて、よ。あなた達、あ、あ、あたしは何の為に、生まれたの？」

「知らないわ」

レイアは冷然と言った。

そして。

今度は、滅多打ちに両手の拳を、アンサー目掛けて振るい続ける。

その眼には、何の容赦も躊躇も無かった。

顔面、胸、顔面、腹、肩、顔面、顎、側頭部、鼻、腹、顔面、顔面、顔面、顔面。

顔面、顔面。胸。顔面。腹。顔面。顔面。顔面。顔面。顔面。……………。

レイアはひたすら、原型を留めないくらいに、彼女を殴り続けた。

そして、殴られたアンサーの肉体は、列車の壁を、叩き付けられた衝撃で破壊して、時速数十キロで走り続ける列車の外に吹っ飛ばされていく。

見事なまでに、空中を旋回しながら、地面へと激突する。

レイアは満足げな顔で、燃え盛る列車の座席に座った。

とても楽しそうな笑顔をしていた。

「可哀想な事するなよ。お前の能力なら、一撃で殺せるだろうに」

「どうでもいいわ。そんな事より、先ほど買ったアールグレイ、そろそろ、“あの空間”で冷えている頃だから。二人で飲みましょうよ。喉が渴いたわ」

あの空間。

フェンリルが、沢山の道具や、武器として使っている剣などを収納している異空間だ。

そこは、基本的には、フェンリルとレイアの二人しか行けない。……………。

彼はコードを抱えると、列車から飛び降りた。

そういえば、いつの間にか、もう一人の敵であるニアスもいない。

「おそらく、あれは人間じゃないわね」

光と闇を纏う少女は言う。

「多分、復活してくるわよ。あそこで始末しても良かったのだけれども、問題は、彼女の背景にいる奴。そいつに行き当たらないといけないと思うわ」

夜の闇の中、燃え盛る列車が止められて、数分ほど経過した。

市街地のオープン・カフェに座って、二人は惨劇のあった場所を眺めていた。

コードはなおも、半覚醒の朦朧とした状態が続いており、時折、意識が混濁したまま叫び出す事もあった。

「人間ではない？」

「殴った感触で分かった。人間の形状をこそしているけれども、まるで土と人間の肉を混ぜたような、というか。あれが何者なのか、おそらく知る必要がある」

レイアは分析を続ける。

倒さなかったのは、倒さなかったなりの理由があるらしい。

「ひょっとして、もう一度、襲撃してくるのを待つのか？」

「ええ」

注文したサラダが運ばれる。

生ハムの入ったサラダだ。

金と銀の長い髪をした青年は、その中から、白っぽい野菜を除いていく。

少女の方は、何も食べない。

青年の方にだけ、水の入ったコップが出されている。

「何か食べないのか？」

美しい顔をした青年は訊ねた。

「此処の食事は好きじゃない」

少女は木彫りのメニューも見ようとはしなかった。

どうやら、此処では食事も水分も取らないみたいだった。

「そうだな、所謂、ドラッグというものが自然に料理の中に出ている。此処の住民は慣れ親しんで平気なのだろうが、オレ達は駄目だ。幻覚作用、興奮作用がある」

「それに、此処の奴ら、女を見る眼が気に入らない。本当に気分が悪いわ」

店員も、他の客も、少女がいる事に気付いていないみたいだった。

青年は、少し不味そうに、サラダを食べ始める。

少し前に、適当な装飾品を質屋に売って、金に換えていた。数日分の宿代くらいは持っている。しかし、どうも言語が通じなかった。店員には、身振りだけのジェスチャーなどでコミュニケーションを取った。

やはり、此処には慣れないなあ、と二人して思った。

二人とも、自然が好きだったが、人間は嫌いだった。

罪、重過ぎる。

罪悪感。

贖罪感。

何故、そのようなものを抱え込んでしまったのか、自分でも分からない。

きっと、生まれつき、そういう性格をしていたのだろう。

本当は、ドーンなんて場所にいるべきではなかった。

人を殺しても、何とも思わない程、強い人間にはなれない。

人を傷付けても、何とも思わない程、強い人間には……。

いや、そもそも。

何が、強さなのか。……。

殺してしまった、同胞、友人の顔が、また浮かび上がる。

そして、消えた。

彼の幽霊には、何度も悩まされた。何処かで、思考の隅にいる。消える事は無い。

そして。

あの男。

「問題は何故、お前が俺に対してどう評価されているのかを気にするという事じゃないのか？  
お前にとって俺は反響でしかないのではないか？」

ふん、とそいつは彼を見て、鼻で笑っている。

相変わらず、小馬鹿にしているのだろう。

何とかして、認められたかった。しかし、どうすれば、こいつから認められるというのだろうか？  
こいつは、そもそも、コードに興味を示していない。

……………。

思考の海の中を漂っていた。

全てが混濁としている。

感情が剥離されたかのような感覚。

「人間は弱さを克服出来ないからこそ、進化し続けてきたのだろうな。他の全ての生き物だって  
そうだ。その弱さに根付いているものは一体、何なのだろうな？」

男は言った。

「きっと、それは感情だ。怖いだとか、悲しいだとか、嬉しいだとか。まあ、そんなもの、俺な  
んかはだからこそ、人間の悲劇はそこにあると思うんだけどな。感情によって、醜さが露呈し  
ていく」

……醜さ？

そう呟いていた。

「醜さ。もしかしたら、それは愚鈍さとも呼ぶのかもしれない。たとえば、こうやったら、どう

しようもなくなるだとか、こうしてしまう事によって、他人を傷付けてしまうだとか。まあいいさ、だからこそ、人間は愛すべき存在なのかもしれないがな」

そいつは、また幻影のように夢の中に現れた。

実際に、彼と話した会話なのか。

それとも、コード自身が彼の輪郭を掴み取ろうと、彼の思想を補強しているのか。それはもう、分からない。

しかし、そいつの言葉は続く。

「たとえばだ。人間の視点でしか人間はモノを見ようとしなないな。獣の視点、昆虫の視点、植物の視点、無機物の視点が有用になる。……つまり、何が言いたいのか、というと、俺はつねにそう思考しているんだ。そういう風に想像し、思考するようにしている。それによって見えてくる世界がまるで違うぞ、無機物とは言わない、自分とは異なるものは確かに存在する。どのような概念で括ろうとしてもな」

思考が、また裂けていくかのようだった。

崩れていきそうな思考を、何とか繋ぎ止めようとする。

そこは、ニアスの攻撃『モーザ・ドゥーグ』によって引きずり出された、見たくない過去、触れられたくない記憶そのものだった。

彼は今や、この世界にはもういない、純粋な悪意を望んだ存在の事を思って、どうにか意思を繋ぎ止めようとしていた。

それはまるで、醒めない悪夢のようなもの。

沢山の、これまで彼が殺してきた者達。

望まず、傷付けてしまった者達の顔が声が、濁流のように流れていく。

心的外傷。

彼が抱えている、重い、重い十字架。

きっと、彼はそこから降りる事は無い。

そして。

圧倒的な存在感として、コードの中で根付いている、尖った刃物のような顔の男。

暴君。……。

彼の存在の影に、今もなお、脅かされている。

十

ニアスは少し離れた場所で燃え盛る列車を眺めていた。

敵からの襲撃を受けてから、一時間ほど経過している。

どうやら、追撃らしきものは無い。

列車の荷台の中に侵入していたフィア・ゾーンと合流する。

二人とも満身創痍だった。

この聖なる海溝から、一度、離れた方がいいのかもしれない。

此処の教皇を始末したのはいいものの、問題は、どう住民達を屈服させるかだ。

勿論、やり方次第では容易なのだが、正直、今はそのような余裕はまるで無かった。

「それにしても、見事なまでにパニックを起こしているわね」

「テロリストの襲撃にあった場所なんて、そんなものだろう」

彼は街で手に入れた鶏肉の束を口にしている。

ぼろぼろに怪我をしているというのに、よく食べる奴だな、と彼女は思った。そして、だからこそ、こんな肥満体になるのだろうか、とも。

「お前も何か食べておいた方がいいぜ、体力を回復させた方がいい。随分、血を失ったからなあ」

「あんたほど、杜撰な感性ならよかったんだけどねえ」

それよりも。

アンサー。

彼女の回収を行わなければならない。

顔面を激しく損傷している筈だ。全身も幾つも骨折していると思われる。

それに。

一体、彼女の肉体はどこまで耐久力があるのだろうか？

ニアスは不安が込み上げてきた。

せっかく、ルルイエが精魂込めて創り上げた人形。

それが簡単に壊されてしまっただけでは、主人にどう顔向けすればいいか分からない。

あの赤い少女が吹っ飛ばされた場所。

その辺りは、丘陵になっていた。

更に、その先は森になっている。

少女が落下したであろう場所には、大量の血液が点々と続いていた。

ニアスは眼を疑った。

冷や汗が流れる。

怖い、と表すべきか。それとも、不気味と表すべきか。あるいは頼もしいとも。

あるいは、これは素晴らしい、とも。

そこには、赤い少女がいた。

少女は損壊して潰れた顔面を気にする事なく、ある作業へと移っていた。

肉。

植物繊維。

彼女はそこら辺にいた鳥や草木を貪るように喰らっていた。

その動きはまるで非人間的で、動物的ではなかった。

まるで、さながら昆虫の捕食のような。

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこり、と少女は鳥を花を草を樹木を蟲を掴んでは、口の中に入れて、貪り続ける。

生命エネルギーを搾取する事によって、彼女の傷は少しずつ、少しずつ治り続けていった。

正体不明の怪物だな、とニアスは思った。

ルルイエの能力。

彼女は自分の主人の能力により創られた物を誇らしく思う。

大切な、大切な彼女の主人。

何も無かった人生と、終わってしまった命に、新たな意味を与えてくれた、彼女の愛しい主人

美しい、という感性がある。

ニアスにとっては、主人こそが美しいと思っていた。

愛しい愛しい、大切な主人。

これから、ニアスの人生は始まるのだ。

生きる為の人生。

それは、妹のルアージュも思っているのだろう。

我々は、どうしようもなく。何も無い、何も積み上げられていない。

だから、この世界に爪痕を残さなければならない。

自分の歴史をこの世界に築かなければならない。

闇の中から、新たな命を与えてくれた主人。

彼に仕える事が、彼女にとってのこれからの人生なのだ。

「アンサー、聞いている？ あんたには知性が必要だ。今の敵、本当にどうしようも無かったでしょ。さっきの宮殿で私達を助けてくれたのは感謝している。でも、あなたじゃまだまだ、さっきの奴が一体、何なのか分からないけれども、もうどうしようもないくらいに、強敵なのが分かったわ。あんたは知性を身に付けろ、あたし達は敵を出し抜かなければならないんだ」

そう、これからもずっと、そうなる。

ルルイエを王として戴冠させるには。

敵を倒し続けなければならない。

自分達の心許無い能力で、果たしてそれが可能なのだろうか。

いや、それでも。

決して、諦める気にはなれない。

それが、世界と戦うという事。

生きる、という事なのだから。

十

ルアージュは、姉の事を思いながら、ルルイエを見ている。

二人は、死んで、生まれ変わった。二人が、呼んだものが、ルルイエ。

そして、ルルイエによって、二人の新たな肉体と、力が与えられた。

ルアージュは、姉の為もあって。ルルイエを信望している。……。

……………。

.....。

今や、洞窟の御殿の中は、二人だけだった。

ルルイエは眠り続けている。

彼には休息が必要だろう。何しろ、何日もの間、眠らずに飲まず食わずで、人形制作に取り掛かっていたのだから。

ルアーージュは、姉やフィア・ゾーン達が留守にしている間、この御殿を守ろうと考えていた。

自身の肉体をバラバラにして、様々な生き物へと姿を変えて、洞窟の外を監視していた。蝙蝠やネズミ、昆虫など、なるべく小さい生き物達へ。

大体、どれくらいの時間が経過しただろうか。

彼女は驚愕する。

死神の姿をした女。

いや、少女とっていい姿をしている能力者。

そいつは、洞窟の方へと向ってきた。

撃退しなければ、ならない。

やはり、彼女が死んでいない事がバレていたのだろうか。あるいは。

何らかの手段によって、人間の生死の状況を把握出来る、何かがあったとするのならば？

.....。

もしかしたら、ドーンにはそういった手段が存在するのかもしれない。

ドーンに関して、ちゃんと調べていなかった事が悔やまれる。

とにかく、今は死神を倒す事に集中するべきだった。

相手がどういう出方をしてくるのだろうか。

おそらくは、以前のように鎌を使ってきて、右手から放つ閃光によって切り刻んだ相手を焼き尽くすのだろうが。しかし。

.....もし、何らかの策略があったとするならば？

彼女は自分の能力が何処まで強いのか分からない。

肉体をバラバラにして、生き物へと変える能力。

問題は、防御面こそ優秀であるが、攻撃面において少々、威力に欠けるのが致命的だった。敵を殺せるだけの動物、昆虫、.....ライオン、ワニ、スズメバチ、.....フィア・ゾーンが扱うようなネズミになって、体内に入って食い破る事も有効かもしれない。

しかし。

おそらく、あの死神の少女の能力、というか肉体は.....。

「何か、問題が起きたのか？」

洞窟の宮殿の中で、首から上だけ、元の人間の姿のままにしていたルアーージュに向って。

彼女の主人は言った。

やはり、自身の疲労を隠せず、顔は少し蒼褪めていた。

出来れば、もう少し休ませて上げたい。

「い、いえ.....何でも、御座いません、只、少々.....」

「此処に侵入してくる敵がいるんだな？」

ルルイエは別に咎めるような口調でもなく、訊ねた。

「わ、私の能力では、多分、倒し切れません。……おそらく、あの敵は……」

「分かった。丁度いいじゃないか。アンサーを創る過程において、何回も失敗作を生んでしまったからな、彼らを有効活用させようと思っている。彼らの戦力も知りたい処だしな」

ルアージュは歡喜の眼で、自分の主人を見た。

頼もしい。

心の底から、そう感じた。

ルルイエは、“物置”にしている部屋へと向った。

そこの扉を開く。

中からは、無数の異形の者達が、醜悪な声を上げて、眼球を爛々と光らせていた。

人間に為り切れなかった者達の雄叫びだった。

それは悲愴であると共に、ある種、滑稽でさえあった。

こいつらを使うぞ、とルルイエは言った。

十

死神は洞窟の中を進んでいく。

そこは、岩陰などに隠れて余り見えない位置にあったが、何処か不可思議なまでの、この暗黒の地においてもなお、異界の匂いを漂わせていた。

おそらく、位置的に臙物の草原を進んでいった後、もし敵が辿り着こうとした目的地があったとするのならば、きっと此処だろう。

そんな事を考えていた。

特に根拠は無い。勘でしかない。

しかし、何となく、この洞窟に入ってみたい。

そういったいい加減な気分もあって、入ってみた。

洞窟の奥を進んでいく。

別に何の変哲も無い洞窟だ。

インソムニアは大鎌を取り出して、無意味に振るう。

こうって、格好を付けるのが大好きなのだ。

しばらくすると、何故か、大きなフロアに出た。

明らかに人為的な手が入られている。

フロアの形状を見回す。

何故か、闘技場を思わせる場所だった。

ひたり。と物音がした。

物音が近付いてくる。

彼女は身構える。



足音はまるで、引きずるような。

そいつは姿を現した。

それは、人間に為り損なった者だった。

顔が崩れ、手足が挽げ、ゾンビの一種なのだろうが、そいつらは屍峠に徘徊している奴らよりも、遥かに邪悪であり、まるで死んだ人間を無理やり蘇生させようとして、それが何度も失敗してしまったかのような。

そいつは、大柄の人間程度の大きさをしていて。

インソムニアは物も言わず、そいつの首を鎌で落とす。

べっちゃ、と首が地面に落ちた後。

そいつは、首を刎ねた鶏のように、しばし動いた後。

肉体の所々から、膿を吐き出して。

まるで、それが衝撃波の粒のように、彼女に向けて撃ち込まれていく。

彼女は全身を蜂の巣にされる。

しかし、それでも致命傷には至らなかったのか、彼女は立ち上がった。

敵のゾンビは、しばし、全身を痙攣させた後、もう動かなくなった。

そいつを倒した後も、更に、足音は向ってきた。

彼女は楽しそうに笑っていた。

敵が沢山、集まってきている。

当然のごとく。

どいつもこいつも、奇形で奇怪な姿形をした、ゾンビ達だった。

首が百八十度回転して、さかさまの両眼で睨む者。手足が溶け出して崩れながら、歩いているもの。両手が溶けて、腰の辺りにあるもの。顔の筋組織が露になり、舌で自分の孔だらけの肉体から覗く臓器を舐め回している者。

彼女は笑う。

笑い続ける。

そこには、何の恐怖も感じていない。

このような、敵と戦うのは慣れているといった感じだった。

普通の間人が不快だと感じるもの、気持ち悪いと感じるもの、そういった形状をした敵と戦うのは慣れているといったような。

あるいは、そういう敵こそが、もっとも愛しいとでもいうような。

「さて、お前らの死の刻限だ。死の舞踏を踊りな」

くるくる、くるくる、彼女の持つ大鎌が回る、回る。

ゾンビの一体が這いずりながら、両手を掲げた。

すると、洞窟の土という土が盛り上がり、それが、怪物の顔へと変わっていく。それは、インソムニア目掛けて、襲い掛かっていく。

「なんだ？ お前らって、全員、違う能力持ってやがんの？ すげーな」

彼女の眼が爛々とする。

まるで、純粹無垢な戦闘狂のような。

大鎌は回転し続ける。

それは、まるでその名の通り、舞踏のようだった。

怪物達の肉体は、大鎌が振るわれる度に、刻まれて、地面へと転がっていく。

何処か、狂っている。

この少女は、狂気の中にあった。

彼女の哄笑はなおも続く。

十

「駄目だ。やはり戦力不足だ。一端、引いた方がいいかもしれないな。しかし、面倒臭い事になっている」

ルルイエは酷く鬱陶しそうに言った。

「多分、敵も敵で高い不死性のある肉体を持っているんじゃないのか？ たとえば、脳などを完全に破壊しなければ、死なないのかもしれない」

「そうなんですよねえ……」

ルアージュは首だけで頷いた。

「しかし、収穫もあった。私の能力は、どうやら、生み出した者に対して、能力を付与する事が出来るらしい。それが何なのか、私にも分からない。生まれなかった可能性、それは一体、何なのだろうか？ 私が一体“何なのか”その片鱗が見えてくるかもしれないな」

しかし、とルルイエは呟く。

それは、舌打ちにも似ていた。

「駄目だな。みんな、能力者として不完全だ。私の能力により、誕生させる事が出来たものは、やはり、アンサーと、それから、お前だけみたいだ」

不完全さ。

それは、きっと。彼自身もそうなのだろう。

目的は、あの巨体の男に言われて決めた。

彼はまだ、何者でもない。

ルアージュは、ふと思い出して言った。

「ルルイエ様、貴方様の能力。お決めにならないのですか？」

「……………そうだな、名付けるべきなのだろうな、アンサーがそうだったように」

ルアージュは思い出す。

確か、姉が言っていた話。

神話において、夜を神に例えたもの。

夜の女神ニクス。

その女神の胎内から、人間にとって悪しき神々が生まれたという。

死や、苦難、争いといったモノ達が。

「姉がルルイエ様の能力の名前を考えていましたよ」

「そうか、なんと？」

「『ニユクスの母体』。人類にとって、様々な苦難を生み出したギリシャ神話における夜の女神の事です。ああ、姉、自分の名前にも似ているから、という理由でも気に入っていました。いかがでしょうか？」

「そうか、なら、そうしよう。それが、私に与えられた理由なのだろうから」

そして、ルアージュは思う。

果たして、彼の持つ能力は、本当に彼が創り出したゴーレム達に能力を与える、という事ではないのだろうか。

彼の『ニユクスの母体』、おそらくは、更にその先が存在する筈なのだ。

彼女はそう考えている。

そう、ルルイエは。

彼女達に、生きる道標を与えてくれた。

生きている間、決して何も無かった彼女達双子に。

生きていけるだけの、価値を。……。

ルルイエは自身の両手を見る。

水で流したが、爪の中には、まだ泥と血がこびり付いていた。

彼が創造者であるという証。

「侵入者は、私が撃ち迎しよう。貴様は此処で待っているんだ」

凜とした声。

どんどん、彼は自我が強くなっていく。

まるで、使命さえ帯びた意思。

悠然と、細身の男は宮殿の入り口を出ていく。

侵入者を倒す為に。

ルアージュは、ふいに、彼を止めたくなった。

もし、彼女の主人が倒されてしまったのならば？ ……………。

想像は、したくない。

それくらいならば、自分が犠牲になった方がいい。

「ルアージュ」

彼は言った。

「私達はおそらくは、とてつもなく弱い。まだまだ、この世界に対抗出来るだけの力を何も持ってはいない。フィア・ゾーンという男も、貴様の姉もそうだ。だからこそ、我らはこの世界から勝ち取る必要がある。そうだろうか？」

首だけの女は、目尻が熱くなり、雫を流していた。

彼に付いていきたい。どこまでもだ。……。

「もう終わりかよ」

両眼を血走らせながら、死神は悪態を付く。

彼女の肉体はボロボロだった。

それでも、その負傷に対して、意に介する事無く、彼女は愉悅の笑いを浮かべ続けている。肉体の骨も幾つかへし折れて、剥き出しの血肉が露になっている。けれども、まるで痛みを感じていないみたいだった。

彼女の何かが狂っていた。その狂気はきっと、彼女自身しか知らない。

闘技場のようなフロアには、無数のバラバラ死体が散らばっていた。

そして、気配だけが近付いてくる。

今度は、足音が聞こえない。

まるで、幽霊のように、ぼうっとそいつは此処へと向ってきていた。

彼女は理解する。

こいつが親玉だ、と。

「待っていたぜ。今度はてめえの首を刎ねてやるよ」

彼女は舌なめずりをする。

現れたのは、華奢な男だった。

所々に、布を巻いて服にしている。

美青年といってもいい。

しかし、何処か作り物のような顔と、肉体をしていた。

マネキンのような肉体。

「此処は、私の住居なのだが。貴様のような下種が立ち入るべき場所ではないのだが」

死神は血の唾を地面へと吐く。

「そうかよ、でも、此処にドーンが指定した賞金首がいるんでね、てめえが何者なのか知らねえが、立ちはだかるってのなら、切り刻ませて貰うぜ？」

「愚かだな」

ルルイエは哀れむように、インソムニアを見る。

ルルイエは腰に、布で包んだ何かを下げていた。

そして、包んでいたものを取り出して、地面へと突き立てる。

それは、腐った人間の腕だった。

「こういう事も出来る」

腕が潰れながら、地面の泥と混ざっていく。

そして、それと同時に、天井の鍾乳石が肥大化し、一本の腕へと変わっていった。

それはそのまま、巨大な拳を否睡へ向って振り下ろしていく。

彼女は大鎌でそれを両断しようとするが、あっさりと、拳は彼女の全身を押し潰して、地面へと叩き付けた。

「すまん。私の『ニユクスの母体』。その全貌は、一体、どういう能力なのか自分でも分か

らん。だから、貴様を使って、試させて貰うぞ」

突然、地面が発光する。

拳を押し付けた場所だ。

巨大な拳は爆裂して、無数の石飛礫へと変わっていく。

その飛弾を、ルルイエは難なくかわした。

地面からは、更にズタボロになった少女が現れる。

へし折れた右腕の掌を広げて、よろめきながら立っていた。

左腕で、折れた右腕を支えている。

右手の掌の中には、一個の宝石のようなものがあった。

どうやら、そこから何かのエネルギーを発射させたみたいだ。

「別に私の能力は、『ダンス・マカーブル』だけじゃねえんだよ。多重能力者だっけか？ どうやら、私って複数の能力を持っているらしいんだよね。もしかしたら、一つの能力の派生なのかもしれないけれど」

彼女の背中から、骨の翼が生える。

そして、彼女は空中へと飛翔していた。

インソムニアは、右手をルルイエへと向けながら叫ぶ。

「死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ね、死ね、死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね！」

掌に埋め込まれた宝石の中から、光の弾が誕生し、ルルイエへと放たれていく。

命中すれば、岩石や鉄の扉くらいは、軽く吹っ飛ばすような威力。

「既に、貴様への攻撃は終わっている」

地面から巨大な腕が生え出してきて、華奢な男の身体を守る。

そして。

まるで、樹木のように。

フロア内の壁という壁から、細長い何かが無数に飛び出してきて、彼女の全身を貫いた。それは、彼女の肉体を貫くと共に巻き付いて、一気に彼女の肉体を、四肢を、胴体を、バラバラにする。

インソムニアは、砕け散って、肉片を地面に撒き散らした。

ルルイエは、ふんっ、と鼻で笑った後、彼女に背中を向ける。

「貴様ごときに構っているのは無駄以外の何物でも無いのでな、私達には目的がある。だから、貴様には沈黙していて貰いたい」

細切れになった少女は、垂れ下がる自分の頭蓋骨を舐める。

そして、肉片がずりずりっと戻っていく。

「不死身の能力者なんだろう？ 貴様は。だから、自分の肉体が幾ら損壊しようが怖くない、というわけだ。しかし、これ以上、私の邪魔をするというのなら、貴様のような存在に相応しい処遇を受けて貰うが？」

ボロボロになった声帯は、音を発する。

「別に、……不死身過ぎるってわけでもねえよ。脳を完全に破壊されたら、ヤバイ。お前、そうすりゃいいんじゃないの？ もっとも、私は弱点教えても、お前をぶっ殺してやる自身があるけどな？」

ルルイエは黙る。

そして、無言のまま、もう一度、巨大な岩石の拳を、彼女の肉体へと振り下ろした。

「実験材料に使えるかもしれんな。貴様から、よい人形が創れるかもしれん」

そう言いながらも、彼は少し疲れたような顔をした。

この敵と相対すると、大体の相手はそうなのだろう。

意味が分からない、精神的消耗にさらされる。

それは、彼女が何処か常時、発している、得体の知れない狂気に触れるからかもしれない。

「人間は何かを信じずには生きていけないのかしら」

光と闇を纏った少女は言う。

彼女は窓から見える風景を眺めていた。

街中から、祈り声が聞こえてくる。

そういえば、此処の宿を借りる時も、宿の主人の顔は蒼ざめていた。

通りを歩いていると、飛び降り自殺を行った者の死体が置かれていた。

何でも、此処の宮殿がテロリストによって襲撃されて、教皇が殺されてしまったらしい。それを嘆き哀しんで、今、街中は完全にパニックなのだ。

「神様だとか、政府だとか、宗教だとか」

まるで、無感動に彼女は言う。

「どうせ、お前は何よりも大切なのは自分自身。お前が崇拝すべき者は自分自身なんだろう？」

曼陀羅のようなものが描かれたソファに座っている青年は言った。

彼は美少女そのものの姿で、銀の混じった長い金髪を弄んでいる。

ベッドの方には、一人の青年が寝かされていた。

彼は未だ、悪夢の中にあり、魘され続けながら、目覚める事が無い。

敵の攻撃によって、未だ精神に深い傷を負っているみたいだった。

「彼の仕事にこのまま付き合うか？」

「さあ？」

彼女は気まぐれだった。

ただ、彼女は強さを求め続けている。そこに、耽溺と執着を見出している。

決して、誰にも届かせない為に。

決して、何にも触れられない為に。

「敵の目的は何だと思う？」

「そうね、多分、只の愉快犯ではないわ」

おそらく、この街を襲撃した事には何か目的がある。

「でも、この混乱は予想外だったみたい。事を引き起こした本人達ですら、混乱しているかもしれないわね。……人間の脆さに対して」

青年は何も言わなかった。

代わりに、少し、ムツとしたような顔をする。

「仕方ないだろ。みんながみんな、オレ達のようにニヒルに生きているわけじゃない。世界の規範に従う事を生き甲斐にしている奴らもいるんだよ」

「あら？ 貴方は何故、そこで苛立つのかしら？ 本当は、貴方は心底、馬鹿にしているんじゃない？ 自分以上の存在を求めるしかない、人間の弱さに対して」

彼女の言葉には、明らかな悪意があった。

まるで、全ての幻想に毒を吐くように。

人間の作り出す信仰の全てが、虚構以外の何物でも無いと言わんばかりに。

そこには、明らかな嘲笑と悪意が含まれていた。

「人間の弱さ、か」

彼は何気に訊ねた。

「たとえば、何だ？」

「そうね。たとえば、恋愛」

少女は蔑むように言った。

「人間が自分以上の物を創り出さなければ為らないという、呪いそのものよね。たとえば、みんな他人に恋をして、異性に恋をして、自分以上の対象を創りたがるのよねえ。他人を崇拜したがる。人間は一体、いつになったら、その鎖から逃れられるのかしら？」

青年は溜め息を吐いた。

もし、ベッドに寝ている彼が、彼女の話聞いたのならば、そこに見出すのだろう。

彼女の持つ、そのどうしようもない、狂気を。

狂人はいないが、狂気の部分は存在する、そんな事を言った哲学者がいた筈だ。

しかし、彼女を目の前にすると、彼女が発する言葉の内容以上に、彼女からは、その声の音律に、会話の内容の持つ意思に、狂気を感じずにはいられないだろう。

彼女は狂っている。……、精神病などではなく、むしろ、強靱な意志によって作られた精神と共に、強烈な異質さとしての、狂った調律がそこにはあった。

狂人だな、と、彼女と会って、話をした者の多くは、そう感じるのだろう。

「逃れなければならない、私はそう思っているわ」

「普通はそれで幸福なんだろう、オレ達と違って」

「幸福ね」

彼女は窓の外を指差した。

また、自殺者が出たみたいだった。

どうやら、無理心中らしく、幼い我が子を背負っての飛び降り自殺だった。

地面にこびり付いた肉片は痛々しいものだった。それはまるで、灰色のキャンバスに赤く、赤く赤い絵の具をぶち撒けるような惨状。

縋るべき存在がいなくなった者達の弱さ。

一体、此処の国の王とは、此処の民にとって、どれ程の価値を置いた存在だったのだろうか。

「……………、薬物の流通ルートが封鎖されてしまったのよ。此処の王様の死によって」

彼女の口元から、笑みが消える。

そこには、凜としたような響きがあった。

「……なるほどな」

彼は少し考えて、呟いた。

「なあ、お前、……………本当は、怒っているのか？」

「さあ？」

彼女の表情には、淡々とした無感動さしかなかった。



そうか、と青年は呟く。

「じゃあ、言う。オレは多分、今、ムカ付いている。しかし、それがこの惨状を引き起こした敵になのか。それとも、この街のシステムそのものなのか、正直、分からないな。ああ、分からない……」

鴉の濡れ羽のような髪の色をした青年は、まだベッドの中で斃されている。

二人は気付いていた。

敵の能力の概要を。

多分、顔や視線、そういったものが攻撃のスイッチになるのだ。

だから、まともに相対しては勝てない敵だろう。

「もし、戦う事になったら、私がやるわ」

彼女はそう言った。

相棒の女顔の青年は、少し安堵する。

ベッドで寝込んでいる青年。

彼は、きっと、“軌道に乗ってしまった”のだろう。

きっと、これは彼にとっての試練なのだろう。

彼が一体、何を抱えて生きているのかは分からない。しかし。

十

ニアスは夢の中にいる。

それは深く深い、淵の底の、泥の中で呼吸するような。蔓延る苔を食すような。

深い、深い、淵の底。

彼女は、“前世の記憶”を底に見る。

あの洞窟の中で、死ぬ前の記憶。

人間として生きていた頃の記録。

どうしようもなく冷たく重い、彼女の心を切り開いて止まない、悪い夢を見続けているような閉じ込められた出口の無い世界。

初めて妹に出会ったのは、いつの頃だろう。

もう記憶が定かではない、淵の底。

表層意識には出現しない悪い夢が、浮き上がっていく。

……………。

妹のルアーージュが家に来たのは、確か、彼女が七歳の頃だった。六歳だったかもしれない。みすばらしい姿をした、彼女と同年くらいの少女。ひょっとすると、彼女の方が年上だったのかもしれない。

ニアスの両親は、もう一人か二人くらい、子供が欲しかったが、不妊の為にそれを諦めていた。ニアスは生まれ付き、身体が弱かった為、二十歳まで生きられないだろうと言われていた。見捨てられた幼少時代。彼女は両親の失望を微細に感じ取っていた。

彼女は失敗作だった。

どうしようもない、出来損ない。

生まれるべきではなかった、命。

存在するべきではなかった、生命。

ニアスは自身が生まれた事は罪なのだと思います。

物心付いた頃から、ずっとずっと思い続けた。

ニアスは夜に、自分を描く。

夜は深く、彼女を包んだ。

みなが寝静まった、静かな時間。

彼女は、自分自身に命を見出す。

夜の呼吸は、肉体を優しく包み込む、歌のようだ。

冷たくも、温かな時間。

彼女は一人、群青色の空を見続けて、溜め息を漏らすのだった。

ニアスは幼い頃より、夜を愛する少女だった。暗く、寝静まった時間、そっと寝台から抜け出して、屋根裏部屋に行く。その日も、こっそりと寝台を抜け出して、屋根裏部屋へと向かっていった。

屋根裏部屋の中からは、寝静まっている筈の両親の声は聞こえてきた。屋根裏部屋の下には、台所があった。

ニアスは気付かなかったが、隣で寝ている筈の両親はいなかった。

台所で、彼らは会話をしていたのだった。

ニアスは彼らの会話を、聞いていた。

その時の凍り付くような恐怖は、確かに覚えている。

.....孤児院から、子供を引き取ろう。

.....養育費なら今の蓄えで何とかなるだろう。それにどうせ.....。

.....それにどうせ、ニアスはきっと十五までには死ぬだろうから。

死ぬ、だろうから。.....。

気付くと、涙が流れていた。

それは、もうどうしようもないくらいに。

医者よりも、遥かに深く深く彼女の胸元を突き刺した。

両親からの、死刑宣告だった。

その言葉は、今なお、覚えている。

その日から、彼女は両親を信じられなくなった。

ルアージュが来たのは、その日から五日後だった。

ルアージュは、ニアスとは似ても似付かぬ少女だった。

孤児院の中で、一番、可愛らしい少女を選んだらしい。

彼女の第一印象は、みすばらしいな、と思った。

まるで、雨粒に濡れた小動物のような眼をしていた。

そう、絶対に自分の方が可愛いに決まっている。

絶対に、両親は自分を可愛がる筈なのだ。

それから、数週間もの時間が経過した。

ニアスは発作を起こして、医者に掛かる事になった。

昏睡状態。

ああ、自分は死ぬんだな、と思った。

何も築き上げられなかった人生。何の為に生まれてきたのか分からない人生。

このまま、私は消えて無くなるんだな、と。

混濁した意識の中で、両親の顔が見えた、病院に見舞いに来たのだろう。

その時、覚えている。両親の眼を。

淋しそうだが、何処か、安堵したような。もう、これ以上、苦しむ必要が無いように、と。そんな表情。ああ。見捨てられたんだ。そう思った。

その時、初めて思った。

本当に、人を憎まずにはいられない、という衝動を。

はじめまして、と最初に彼女に言った言葉だ。おはよう、だったかな？

彼女は笑った。同い年くらいの少女。

密かな情念の炎が、幼いニアスの中に芽生えていた。

どうすれば、彼女が傷付くのだろう。そんな事ばかり考えて。

妹となった少女は笑みを返した。

屈託の無い、この世界において、自分を汚す黒いものなんて、一つも無いんだ、と言わんばかりの。無垢な。

この時、自分はどんな風に作り笑いを浮かべていたのだろうか？

十

ニアスは眠りから覚めた。

昔の記憶だ。

どうにも思い出したくない記憶。

フィア・ゾーンは何処から奪ってきたのか分からないが、この街の中で使われている硬貨を手にして、宿を取った。

ふかふかの羽根布団だ。

強い弾力が全身を巡って、布団それ自体がマッサージ機能すら持っている。

それにも、関わらず、安らかに眠れなかった。

此処の教皇を殺してしまったせいで、街中がパニック状態だった。言葉は分からないが、みな、口々に祈りのポーズなどを取ったりしている。

教皇を信仰していた者達の中で、何名もの自殺者が出たらしい。

それくらい、此処の街は神人のような教皇を信仰する事によって成り立っていたらしい。

信奉者達の一部は、教皇を殺した者を探しているみたいだった。

証拠は全て消し去っている筈だ。

目撃者は全員、殺している。

しかし、脆いものだ。

信心によって、築かれている場所というものは。

まだ、発熱しているみたいで、ニアスはベッドに再び、横になった。

全身の傷がズキズキと痛んでいる。

生きている、という事象そのものだ。

フィア・ゾーンは元気そうに、一リットルもの野菜ジュースを飲んでいて。下品な音と共に、深緑色をした液体が口元から零れ落ちていく。

隣では、アンサーが吃音を直す為の発声練習をしている。

二人は元気そうだった。

昨日、あれだけのダメージを負ったにも関わらず、二人共、楽しそうに笑っている。

フィア・ゾーンは包帯を引き剥がして、中の傷を掻き毟っていた。

アンサーは、骨折しまくって添え木だらけの肉体に、未だ顔面の所々が腫れ上がっていたが、腹が減る度に色々な物を食べて、その都度、肉体の損傷を修復させているみたいだった。

「なあ、お前も食べないのか？ 何か」

ニアスは黙る。

この男のような豪胆さがあつたのならば、少しは楽になったのかもしれないが。

彼女は考える、こいつは何の為に自分達に協力しているのかを。

この男にとって、何の意味があるのだろうか？

どんな人生の目的があるのだろうか？

しかし、ふと思った。

そんな事を考えてしまうのは、ニアス自身が人生の目的だとか意味だとかを考えてしまうからだろうか。

こいつは、楽しければいいだけなのかもしれない。

どうしようもない、享楽主義とでもいうべきか。

何だろう。

ニアスと違って、世界に対する呪詛のようなものを抱えていないようにも思える。

水袋を手にして、口の中に流し込む巨体の男は何気なく呟いた。

「なあ、ニアス。テロリストになったんだぜ、俺達は。これから、この街では、慎重に、正体を隠していかなければならないよなあ。お前も、色々、面倒に巻き込まれないように気を付けろよ」

彼女は、心臓の鼓動が激しく脈打つ。

この男にとっては、さり気無い雑談の一つでしか無かったのだろうが。

彼女にとっては、その何気無い言葉に、強い重みを感じ取ってしまった。

.....テロリスト。

そう、紛れも無い、彼女達はこの街にとっての、テロリストなのだ。

破壊者であり、多くの人間を不幸に追いやる存在なのだ。

この街の体制、秩序、構造は彼女達の手によって、変えられてしまった。

これからも、この街はどんどん変わっていく。

彼の言葉を思い出す。

.....お前、万単位で殺す覚悟はあるか？

笑いながら言うこの怪人の発した言葉は。

ニアスには、ひたすら、覚悟が足りないという事実を突き付けられたものだった。

十

ニアスの能力である『モーザ・ドゥーグ』は、他人の記憶の中から、あるいはそいつの表層に浮かび上がらない潜在意識の中から、トラウマやそいつが無意識の内に防御している恐怖症、抑圧している感情や感覚などを表層意識へと無理やり引きずり出す能力だ。

確か、精神医学と結び付いた能力だった筈だが、詳しくは自分でも分からない。

とにかく、そいつが心の中で“見ないようにしているモノ”を引きずり出して、そいつにぶつける事が出来る。

それによって、どのような現象が引き起こるかは、様々だ。

しかし、大体は、彼女の攻撃を食らった相手は。

軽く当てれば、幻覚や幻聴、妄想、パニック発作、過呼吸、神経症などを引き起こし、重く当てれば、そいつは耐えられずに精神が破壊され発狂に至るか、生きている事自体が怖ろしくなり自ら死を選ぶ。

ニアスは、彼女のモーザ・ドゥーグを受けた者が、どのようなモノを見たのか、感じたのか、まるで分からない。おそらくは、そいつ自身にしか分からないのだろう。

相手は、どのようなモノを見て、感じて、狂って、死んでいったのだろう。

彼女は少しだけ、心が痛む。

こんな能力になったのは、おそらく理由がある。

いや、明確にその理由を知っている。

それは、彼女自身が、恐怖に対して敏感だったからだ。

この世界に蔓延る、恐怖。

どうしようもなく、存在する人間の、弱さ。

それから逃れる為に、人間達は歴史を築き上げていくのかもしれない。

弱さから、逃げる為に。怖さから逃げる為に。

人間は街を作り、文明を作り、哲学を創った。

その積み上げてきたものは、みな、恐怖を克服する事であるのかもしれない。

恐怖とは何なのだろうか。

人間、個人。個人が持っているであろう。

見ようとしないうち。  
分からない、もう一つの自分。  
自らが覆い隠している物。  
余りにも重く。余りにも重く。余りにも、人間は重く深い海溝のような意識の断層を抱えている。  
そこからは、逃れられない。  
哲学だとか宗教だとかは。  
その海溝が何なのかを知らうとする為、築かれてきたのだから。  
ニアスは、自分の能力を怖ろしく思う。  
忌々しいとさえ……。  
ぞわっ、とするような寒さ。  
肌を刺すような寒さ。  
まるで、素人が本物の拳銃を手にした時のような感覚。  
人間を、破壊出来るという力。  
そして。  
分かっているのは。  
この能力のもう一つの使い道だ。  
それは、彼女自身がつねに自分自身の心を守る為封じていた。  
出来る事は分かっているが、決して、使ってはいけないもの。  
実際、使うメリットは無く、只、自分を破壊する事象しか引き起こさないであろう。  
能力のもう一つの側面。  
彼女はそれを封じている。  
いや、そもそも、きっと全ての能力者はその使用法を封じているのだ。何故ならば、意味が無いし、只の自害でしかないのだから。  
そう、自分自身に、自分の能力をぶつけて見る、という事。  
モーザ・ドゥーグを、彼女自身にぶつけて見ると、一体、どういう現象を引き起こすのだろうか。それは、少し甘い誘惑だった。果実のような。  
自己破壊願望。  
そう、自分自身だって確かに抱えているのだ。  
暗い、視てはいけない暗黒を。……………。

十

エイジスはオベリスクの場所に来た。  
そして、門の処に手を翳す。  
「此処に来るのは、一体、何年ぶりの事だろう。まさか、此処でサーカスが出来るなんて思わなかったよ」

彼はクスクスと笑う。

門は開いた。

そして、エレベーター・ルームに入る。下降。

エレベーターの扉が開く。

その際に、数匹の白いネズミが、彼の足元をすり抜けていった。

彼は違和感と、少し不吉な予感を感じたが、ネズミを見過ごす事にする。白いネズミはそのまま、数十秒後に自動的に元の世界へと、上昇するエレベーターに乗り込んでいた。

.....そういえば、何か災害の前兆には、ネズミや虫、鳥などがその場所から逃げ出すとかいう話を聞いた事がある。

彼は、この街で起きている惨状を、すぐ、眼の辺りにする。

沈黙。.....

街に着くと、沢山の武装した民間兵によって囲まれてしまった。

彼らは口々にこの街の言語を話し、しきりに、エイジスの身分を訊ねていた。

「どうしてこういう事になっているのかなあ？」

エイジスは、この街の言語で、民間兵達を説得する。

三十分弱の説得の末、ようやく、彼が此処で教皇の為に、サーカスを行おうとしている一座の一人である事を納得して貰う。

街の所々は、無法地帯と化していた。

おそらくは、一時的なものだとは思いたいですが、此処の教皇がテロリストによって殺されてしまって。街中がパニックを起こしていた。まだ街に潜んでいるであろうテロリストに対する恐怖と、“神”として君臨していた教皇の死と、何よりも、彼が水や食物のように摂取させていた薬物の流通の停止によって、街中が混乱を極めていた。

教皇の意思によって、薬物の流通は取り仕切られていた。

薬物は、神との交流。

神の血肉の一部。

そう、住民達は教えられて、生きていた。

実際、彼らは薬物無しでは生きていけなかった。

すぐに、禁断症状を引き起こしてしまい、狂ったように喚く者が現れる。それが引き金になるかのように、次々と狂気は連鎖していく。

みな、神に祈り続け、ヒステリーを起こしたように、周囲の人間といがみ合いを始めていた。まだ、残っている薬物の粉や葉を奪おうと、他人の家に強盗をする者まで現れていると聞く。

更にだ。

神の血肉.....権威の象徴であった、薬物の倉庫を襲撃しようとする者達までいるらしい。まだ、表立っては外に現れていないが。クーデターは確実に起きるであろう事が予測された。テロリストが新たなテロリストを生んだ事になる。

エイジスはどのような感情を向ければいいのか分からなかった。

此処の街には確かに思い入れがあったのだが。

しかし。

「うーん、……僕には関係無いといっちゃ、関係無いからなあ。あんまり、巻き込まれたくないよねえ。取り合えず、座長に報告した方がいいかなあ」

十

それから、数時間後の事だ。

洞窟の中に、白ネズミが入り込んでくる。

洞窟の中まで辿り着いたのは二匹だけだった。他の何匹かは、臍物の草原を駆け抜ける中、怪物達に襲われて食われてしまった。

それを完全に予測して、フィア・ゾーンは一匹で事足りるものを、数匹送り込んだのだった。

白いネズミのみの、帰還。

それは、狼煙だった。

ルルイエが凱旋する為の狼煙。

「流石に、早いな。もう、聖なる海溝とやらを制圧したのか」

彼は溜め息を吐く。

フィア・ゾーンは怖ろしいくらいに優秀だ。

何から何まで、彼が標のように、ルルイエの道を作ってくれている。

ひょっとすると、本当の主人はフィア・ゾーンの方ではないのだろうか。

ルルイエはそんな事を考える。

彼の隣には、大きな瓶が置かれていた。

人間一体を、ぎゅうぎゅうに押し込めた瓶。

頭から爪先までを押し込めて、押し潰して詰め込んだ瓶。

その中には、一人の少女が入っていた。

彼女は比較的損壊の軽い顔面を笑みの形に歪めて笑っている。

笑い続けている。

今や、完全な人間の肉体へと戻ったルアージュは不快そうな顔をしていた。

「こいつ……早く、黙らせましょうよ……」

「その所なのだが。……今は、フィア・ゾーンからの伝令があったのでな。私は赴かなければならない。奴から渡されている物もある。それは鍵穴に差し込む為の鍵らしい。そして、私はそこへ赴かなければ為らない。そいつは後にしてくれ」

ルルイエは洞窟の外へと向かっていく。

ルアージュは、此処の留守番係、というわけだ。

人形工房などの、主人の住処を守らなければならない。

瓶の中から、底冷えするような声が響いてきた。

……こいつと一緒にいなければならないのか。

多少、げんなりする。



こいつの笑い声はまるで、呪詛そのものだった。

こいつを精神的にも屈服して支配して、心を破壊してやりたい。

ルアーージュの中から、サディスティックな感情と同時に、怖ろしい不安や吐き気が込み上げてくる。

化物。

そんな単語が頭の中を過ぎった。

しかし、そんな風を感じる事自体が。きっと。

こいつの思うツボに思えて仕方が無い。

純然たる悪意、嘲笑。生命そのものを笑い続けるかのような。

破壊されてもなお、生きている肉体。

ルアーージュは一瞬、錯乱する。視界が曇って、暗転していくようだった。

そう、自分自身も化物なのだ。そのどうしようもない、嘔吐感に。

頭を掻き毟りたくなるかのような衝動。

十

エイジスは座長に相談に向かう。

座長は薄いカーテン越しに、余り、顔を見せようとはしない。

聖なる海溝での惨劇を聞いて、座長は深く溜め息を吐く。

「……非常ニ、残念ダナァ」

機械音のような声。

それは、何かの装置によって音声を書き換えられているのか。それとも、この座長と呼ばれる者、こいつは本当に人間なのか。……。

エイジスはまるで、皇帝にでも対峙するかのように身を低く屈めていた。

「僕としても、サーカスがしたかったんだけどねえ」

「仕方ネェヨ。アソコハ、内部ニ閉ザサレル事ニヨッテ、保ッテイタ場所ダカラナ」

「僕としては。少し腹立つなあ。ならず者達におしおきがしたいよ、ねえ、どう思う？」

「勝手ニヤッテクレ、相手ガ、我々ヨリモ、ヤバイ連中ダッタラドウスンダヨォォ」

「そう言うと思ったので、僕は死の翼に相談しようと思っているんだ」

エイジスは舌を出す。

まるで、いたずらっ子のような顔付き。

十

凱旋の為、ルルイエは一人、“車”に乗っていた。

それは、ボロボロに朽ち果てたスクラップ車だった。

これも、フィア・ゾーンが予め用意していたものだ。

ガソリンが、数十キロ以上も走れるように、大量に入れられている。

ルルイエが失敗した“人形”の出来損ないの中で、簡単な動作くらいならば行える知能の奴もいたので、そいつにハンドルを握らせている。

白ネズミ達に道案内をさせて、目的の場所へと向かっていた。

途中。

草原の中から、大きなミミズのようなものが姿を現した。

そいつは、口内の中にも幾つもの口を持つ化物だった。

ルルイエは難なく、地面に出来損ないのパーツの一部を放り投げると、そこから腕やら脚やらが現れて、化物を薙ぎ倒していく。

数時間後。

ルルイエは、オベリスクのある場所へと辿り着いた。

フィア・ゾーンから、預けられていたものを開く。

中には、一本の手が入っていた。

これが、鍵らしい。

聖なる海溝の住民の腕から、直接、切り落としたものだ。

あの巨体の男は、かつて、何らかの手段で、此処の住民の腕を落とす機会でもあったのか。それとも……また、あの例の店とかいう場所で仕入れてきたのか。まるで分からないが。……。

「これが、鍵らしいが……」

ふんっ、と鼻を鳴らす。

すると。

地面から、草や泥、砂や石を材料とした巨大な腕が作られて。

それが、勢いよく、扉の部分を殴り付けた。

しかし。

まるで、同じ衝撃を跳ね返すように。

殴った腕自体にダメージが帰り、腕は亀裂だらけになって、碎け散っていく。

「なるほどな。外部の者が無理やりこじ開けようとする、その攻撃のエネルギーが跳ね返るのか」

ルルイエは、フィア・ゾーンから教えられた通り、住民の腕を扉へとかざす。

そして、中のエレベーターを降りていった。

十

あれから、二日近く経過したが、一向にコードの様子はよく為らない。

フェンリルは、少し焦燥に駆られていた。

正義の味方を気取るつもりはまるで無いが、友人や……そうでなくとも、知り合いが死んでいくのは、正直、気持ちのいいものではない。

実際に、何度も仲間に死なれた事がある。

あれは、未だに耐え切れるものではない。

巻き込まれてしまった、そのような形だし、引き返す事などいつだって出来る。

しかし。……………。

馬鹿馬鹿しいとは思いつつも、首を突っ込んでしまったものだ。

引き返すのも、馬鹿馬鹿しい。

そんな事は、レイアに見抜かれている。

元々は彼女が興味を持った事件。

彼女はどうするのだろうか。

フェンリルは、ぼうっと、と物想いに耽ながら、部屋に飾ってあるものなどを眺めていた。

そして、しばらくすると。

がばっ、と勢いよく、黒髪の青年がベッドから起き上がる。

「あ、ああ、……」

「おはよう」

長い髪の、美少女のような顔をした青年はそう答えた。

沈黙。

「き、来て、来て、い、いる……」

彼の音響の反射による感知に引っ掛かったのだろうか。

何者かが、泊まっている宿の、彼らの部屋まで向かってきていた。

足取りを計算すると、四名くらい。大体、中肉中背の男達。

手には何やら、得物を持っている。物騒だ。

ドアには鍵を掛けていない。壊されるのが面倒臭いからだ。

そいつらは、勢いよく、扉を開けた。

まるで、僧服のような物を着込んだ男達。

彼らは普段、被っている紫色のフードを取って、強面を晒していた。

頭は剃り上げて、所々に刺青を入れている。紫色の半身を曝け出したローブのようなものに身を包んでいた。

この、聖なる海溝の戦闘僧兵達だ。

彼らは口々に喚いている。

無論、彼らの言葉は分からない。

しかし、大体、何を言っているのか簡単に予測が出来た。

……お前らは、余所者に見えると、通報があった。テロリストの一味なんだろう？

フェンリルは、中指を軽く立てる。そして、色々な指の形へと変化させる。親指だけを下へと向けたり、指二つを軽く上方へ向かって差し向けたり、手首を自分の首にすんと、と当ててみたり。……………。

どれかは通じているだろう。このジェスチャーが。

要するに。

お前らの事情など、知った事か。とっとと帰って、クソして寝ろ。間抜け。

ぴくり、ぴくり、と僧兵達の顔が引き攣っていく。

「で、仮にオレ達がテロリストだったらどうするんだ？ もし、その場合は、お前ら全員、その場で処刑されるぞ？ 聞く処によると、奴らは此処の王様……教皇とかいう奴と、その側近達を簡単に倒してしまったそうじゃないか。お前らで果たして勝てるのか？」

と、フェンリルは言葉が通じないのにも関わらず、お構いなしに、冷淡に言い放つ。

僧兵達は、一気に襲い掛かってきた。

両手には、拳銃のようなものが握られている。

更には、ククリやカタールのような形状の武器を取り出してきた。

「駄目だ。お前らじゃ、無能力者の平均よりも二百年、……三百年は戦闘技術が遅れている」  
彼らは突進しようとする。

しかし、彼らの手にある筈の武器は、どこにも無い。

フェンリルは、何かを窓に向かって放り投げた。

窓は完全に閉まっている。

しかし、確かに、窓の外に、彼らの持っていた数々の武器が放り投げられているのだった。

僧兵達は、一体、何が起きたのかまるで分からないみたいだった。

美少女のような顔をした男は、ほぼ微動だにしていない。

僧兵達は、口々に祈りの言葉を奉げ続けると、部屋を出ていった。

コードは、呆然とその光景を眺めていた。

「ああ、ちなみに、オレ達は此処の部屋を出るつもりは無いから。何とか、テロリストの一味ではないと説得出来ないものか」

完全に余裕の眼だ。

コードは、まだぼんやりとした頭を摩りながら、答える。

「お、俺は一体、……どうしていたんだ？」

「よく分からないが、とんでもないものに、巻き込まれたらしい」

おそらくは、薬物を強奪する民間の組織が今頃、結成されている頃だろう。

薬物を管理している場所は何処なのだろうか。

その工場か何かがある筈だ。

敵の立場に立って、考えよう。

もし、敵の目的が愉快犯の場合ならば、その管理場を破壊して、更に住民をパニックに陥れる筈だ。しかし、もし仮に、敵の目的が住民達の統治ならば……？

「とにかく、そこを探し当てる必要があるな」

十

ニアスは、まだ傷の調子がよくないらしく、宿で待機している。

フィア・ゾーンは既に、その場所を見つけていた。

というよりも、教皇の宮殿を襲撃するに際して、おおよその場所に見当を付けていたのだ。

彼は、もうすっかり、殴られた傷が半ば完治しているアンサーを引き連れて、そこにやってきた。

そこは、宮殿から数キロ離れた地下にあった。

少し、薄暗い場所だ。

シェルターのような場所を彷徨とさせた。

一応、この“管理場”は複数の場所に施設を設けられているが、此処が、一番、巨大だった。此処を中心に流通させている。

勿論、そこら辺の街角などにも、薬物の元となっている草花は咲いているので、そこから摂取する事も容易だが、住民達は、既に、教皇の開発した濃度の高い薬ではないと、満足出来ない肉体へと変わっていた。

地下の中に、白い草が咲いている。

太陽光ではなく、人工の光によって、植物は育てられていた。拳銃や電話もマトモに作れない文明都市だったが、この人工のライトには力を注いでいるみたいだった。

おそらく、自然のものから品種改良したものだろう。

神の血肉。……。

ここの住民は、みな、それ無しでは生きられないのだ。

それは、大きな樹木の根を加工して作った樽のように見えた。年輪のような模様が幾つも見える。全て、砕いた植物の粉だ。専用の柄杓などを使って、中の粉を取り出していく。

この中から、スパイスとして料理の中に薬物を混ぜていく。

更に、朝昼夕、神の血肉を体内に取り込み、自身も神の子であるのだと伝えられていた為、生まれた時から、此処の住民は薬物の汚染を受けている。

それが、当たり前的人生、生涯を送っている。

「さて。アンサー、此処を占拠するのが、俺達の目的だが……まずは、ルルイエを待たないといけないんだよなあ」

フィア・ゾーンは、くちゃりくちゃり、と鳥の唐揚げを食べていた。

此処で購入した食品には、多かれ少なかれ、この薬物の粉末が混入されているのだが、それでも彼は気にもしない。

大体、一時間近く経過した頃だろうか。

そこに、そいつらはやってきた。

蹲って寝ていたフィア・ゾーンは、大欠伸をしながら、そいつらを見る。

当たりだ。

やはり、彼らはやってきた。

そいつらは、手製のククリや、長刀のような武器を構えている。

僧兵には見えない。

民間人達だ。

完全に、計画通り、彼らの一部は此処から薬物を狙おうと襲ってきた。

彼らは現地の言葉で、何やら叫んでいる。

罵詈雑言。

そいつらは、少しずつ二人の下へと向かっていく。

「おお、アンサー。お前の力、見せてやれよ」

悪漢達の一人が、いきなり大声を出す。

そして、足元を覗き込んだ。

スティムリーという、古代ローマで使われていた、マキビシのようなものだ。幾つもの杭を地面へと打ち込んで、地面の外に出た部位には、鉤針のようなものが覗いている。それが、悪漢の一人の、靴底を突き破って、足の裏の肉へと突き刺さったのだった。

薄暗く、足元が覚束ないのを良い事に、フィア・ゾーンは、暇潰しに、この辺りに作成したトラップだ。

アンサーは、研ぎ澄まされた自分の爪先を、手首に向ける。出血。

彼女の手首から、ぽたぽたと血液が流れ続ける。

悪漢達は、一人が怪我したにも関わらず突っ込んでいく。

トラップの数は少ないので、何名かはそれを突破して向かってくる。勿論、中には、そんなものは関係無しに向かって来る者も多い。

アンサーはくすくすと、笑顔になる。

彼女の手首から流れ出る血液の量が増えていく。地面へ流れ続ける。

男の一人が牛刀で襲い掛かった。

アンサーの肩に、深くめり込んでいく。

彼女はそれでも、痛みを感じていないのか、きょとんとした顔をしている。そして。

彼女は、男の首筋に自分の爪を突き刺した。

いや、爪というよりも、指ごと深く、めり込んでいる。

見る見るうちに、男の首は膨れ上がっていく、まるで風船のように、そのまま男の肉体は膨らんでいく、顔も、胸も、腹も、腰も、脚も。それは、ほぼ一瞬の出来事だった。

ぱんっ、と。音を立てて、風船は割れる。

後には、バラバラに飛び散った粉々に砕けた骸骨と、ぐちゃぐちゃに潰れた内臓。それから、真っ赤な血溜まりだけが残されていた。

更に、真っ赤な血の池は増殖していく。

それは、男達の足元を飲み込んでいく。

ぱんっ、ぱんっ、と。音を立てて。

足の裏を、トラップによって、穴を開けられた者達から先に弾け飛んでいく。続いて、弾け飛んだ肉塊の中に混じった骨片によって、擦り傷を負った者達も、次々に弾け飛んでいく。それは、面白いように連鎖していった。

後には、数名の男達が残った。

運良く、肉体に小さな“赤”を作らなかった者達だ。

万物に遍くある“赤”を増殖させる能力である『サーキュレーション』。

血液は増量し、焔は肥大化し、そして、人体の小さな傷を伝わって、人体の赤を増殖させて、

結果、人間を風船が割れるように爆発させる事が出来る。

そいつが、人間である限り、赤は存在する。

赤を増やす事によって、彼女の攻撃は、人間である以上、いや、動物である以上、食らってしまうと、ほぼ防御不可能な破壊力を有していた。

血の海に沈みながら、アンサーは笑う。

生き残った男達は、元来た道を引き返そうとする。

少女は血溜まりの中から、骨の幾つかを拾った。

そして、男達へと投げ付ける。

それが刺さると男達は転倒した。

そして、次の瞬間、ぽん、といった花火でも上げるような音を立てて爆発する。

「あは、うは、あは、うへあはははあはあ、はははははあははあははあ！！」

少女は笑い続ける。

寝転がっていた大男は、欠伸をしながら言った。

「もう少し、手際よく殺れねえのかあ？ まあ、次は俺様が見本、見せてやるよっと」

この男からすれば、まだまだ彼女は甘いみたいだった。

十

病み上がりのコードは、この街の惨状を知って、ショックを受けているみたいだった。

そして、強い意志を持って、敵を探しに向かうと言った。

「心当たりは無いか？」

美少女顔の青年は黙る。

「君は、相手の居場所を知る事が出来る能力を持っているんだろう？」

フェンリルは首を横に振った。

「駄目だ。波長、相手からのメッセージ、そんなものを受信しない限り、“彼女”の能力は、発動しない。万能じゃないんだ。只、万能に見える時は見えるけれども。今は、“カード”が使えないらしい。運命の車輪、とかとも言っていたけれども、とにかく、運命の歯車と完全に合致しない限り、出来ない」

「この、“聖なる海溝”に敵がいるって事の情報までつかめたのに？」

「出来ないのは、出来ない。そういったムラのある能力なんだ」

コードは明らかに苛立っているみたいだった。それに。

まるで、鬼気迫るような顔をしている。眼の周りが、隈で彩られている。

もう少し、休んだ方がいいかもしれない。

このまま、行き当たりばったりで、飛び出していきそうだ。

しかし……。

「只、予想は出来ている。おそらく、敵のいるであろう場所。この街には、八つの“保管所”と一つの“管理所”が存在する。管理所から、保管所に配った後に、薬物のスパイスは住民達に渡る。

もし、敵が占拠するとするのなら、その施設だろう」

コードは口を噤んだ。

彼は考えているのだろう。

犠牲者を出したくない。

彼にとって、ドーンに在籍している理由は、おそらくは犯罪者を赦したくないからかもしれない。確実に殺す。そういう決意のある表情だ。しかし。

おそらく、敵は何か罠を仕掛けている可能性が高い。

十

ルルイエは、ニアスのいる宿へと向かった。

何名かの民間兵から尋問を受けたが、片っ端から、物言わぬ塊へと変えてやった。

ニアスは傷の為に無理が出来ないのと同時に、ルルイエがやってくるのを待つ役割も当てられていた。

さっそく、此処の言語の書かれた本を、主人へと渡す。

そして、何名かの適当な住民を捕虜にして、発音や発声方法、会話の内容を記憶して貰った。

ルルイエは、此処の街の言語を習得した事になる。

そして、ほぼ瓦礫の山同然の建造物へと侵入する。

残った僧兵達が、二人の下へと向かってきたが、構わず、彼らは僧兵を始末する。

そして、瓦礫と化している階段を駆け抜けながら、最上階へと上った。

これも、フィア・ゾーンが用意したものだ。

「これは、どう使うのかな？」

ハンドマイクを手にして、優男は首を傾げる。

「ええ、此処のスイッチを押せば」

そして、ルルイエは、音量を最大にして、街に向かって高らかに叫んだ。

「いいか。人間共。この聖なる場所の、その……教皇とやらは私が殺した。貴様らの信じていた神の奇蹟とやらは何も無かったのだ。私は天空から降りてきた、新たなる神だ。貴様らにとっての新たなる支配者だ。貴様らは私に従う事によって、元の平穏を手にする事出来る。神の血肉も与えてやろう。私に従え、再び、幸福を与えてやろう。そして、貴様らは、本当に、新たなる命、新たなる不死の命が手に入るのだ」

まるで、ルシファーだな、と、ニアスは思った。

神の座を奪おうとした墮天使達の王。

聖書によると、ルシファーは敗北し、地獄に落とされたが。

これは、ルシファーが神に勝利した物語。

十



管理所の前まで来た。

コードは愕然として、膝を付いた。

管理所は焔に包まれていた。

巨大な火柱によって、地下から建造物全てが燃え上がっている。

敵の姿は、既に無い。

相手も、こちらの行動を予測しているとしか思えない。

ひょっとすると、薬物は既に運び去られた後なのかもしれない。

そして。

唐突に、教皇の住んでいた宮殿の辺りから、大音量の音が響き渡った。

いわく、新しく、この地を支配するのは、自分である、と。

「どうする、敵は姿を現している。今すぐ、倒しに向かうか？」

フェンリルは訊ねた。

今、演説をしている奴は、おそらくは敵の首領だろう。

そいつの能力は不明だ。

しかし、他にも、精神攻撃を放ってコードを廃人に追い込みかけた奴と、小さなマッチの焔から火柱を作り上げた女の二人がいる。それから、此処に来ているかどうかは不明だが、コードの話によると、更に肉体を分解して、動物やら魚、昆虫へと変えられる女も存在する。

まずは敵の数の把握が必要だった。

最低、四名。

今、姿を見せている、痩せた男の周りには、護衛の者が付いていない。もしかしたら、姿を隠しているかもしれないが。ひょっとすると、本当に少数で動いている集団なのかもしれない。

フェンリルは、隣で腕を組んでいる少女の方を見る。

コードには、彼女の姿が見えない。

既に、彼女の能力の“影響下”にあるからだ。

彼女……レイアは、今、演説している、痩せた男を、興味深そうに見据えていた。

コードの方を見ると、指先を男の方へと向けている。

明らかに、彼の『クエーサー』によって、音の弾丸を命中させるつもりでいるみたいだった。此処からの距離だと届くのだろうか？ 少なくとも、自分の能力はとても届かない。

いや、それよりも、敵に気付かれるリスクの方が高い。

「また、あのフードを被った女の攻撃を受けたら、今度は助けてやらないぞ？」

フェンリルはキツく告げた。

実際、仮にあの敵の攻撃が、遠距離にも対応出来るものだとすれば、列車の中で説得を試みた時のようにはいかない。

それを言われて、黒髪の男は、まるで怖気付いたように、頭を抱えてしゃがみ込んだ。

今にも、過呼吸状態に陥りそうな顔だ。

まるで、トラウマを抉られたような。

そうこうしている内に、住民の何名かが、黒焦げた宮殿の中へと入っていく。

三名も、取り合えず、宮殿へと向かった。

距離が少し遠い。

フェンリルは溜め息を吐く。そして。

コードを掴むと、その場所へ向かって、瞬間移動を繰り返した。

一度に移動出来る距離は、せいぜい十数メートル程度だ。

何回か、移動して、ようやく、目的地へと辿り着く。

三人は沈黙する。

「迂闊に宮殿内部には入れないな、どんな能力者がいるか分からないからな」

フェンリルは、淡々と言った。

勿論、これは能力者同士の、戦闘の基本中の基本だ。

まずは、相手の能力の正体、能力者の数、効果範囲などを事前に可能な限り、調べ上げる。

そして、相手の能力の正体を知ったならば、自分の能力との相性、戦力差、能力差を可能な限り考える。

既に、コードもフェンリルも、自身の能力の一部を発動させて、宮殿内を調べていた。

音の反響と、空間把握。

住民達は、どうやら、黒焦げになった瓦礫をかき分けて、最上階へと目指しているみたいだった。何名かは、その手に武器を持っている。

どうやら、あの痩せた男を殺すつもりでいるらしい。

しかし。

最上階まで辿り着くと。

どうやら、地面から這い出してきた何物かによって、叩き潰されてしまった。

「腕だな」

とコードは言った。

そして。

「あの、精神攻撃を行う能力者の女も、物陰に隠れているが、確かにいる」

敵はおそらくは二人だ。

少なくとも、あの焰使いの少女はいない。

いや、……焰使いではなく、赤、を使う少女か。名前は、確かアンサーといったか。

あの少女の能力の全貌は分からないが、おそらく、赤に関する能力だろうという事。

管理所を火の海にしたのは、おそらくは、アンサーだ。

あの少女、どこか知性が壊れているようにも思えたが……。

だとするのならば、彼女を示唆している敵がもう一人いる筈だ。

そいつは、きっと狡猾で、知略に長けている可能性が高い。

フェンリルは、相棒のレイアの方を見る。

彼女は、余り協力的では無さそうに見えた。只、何かを思索しているようだった。

ただ。

「足元に気を付けて」

そう告げる。

何かに感付いたのだろう。

二人の音波にも、空間把握でも気付かなかった危機。

「一体、何に気付いたんだ？」

フェンリルは、何も無い空間に向かって訊ねた。

コードには、彼女の姿は見えない。……。

レイアは地面を指差す。

砂と土、沢山の人間が踏み鳴らした足跡。踏み潰された草花。

瓦礫。

フェンリルはその中から、違和感を感じるものを発見した。

それは、小さな動物の足跡だった。

一見すると見落としてしまいそうだが、どうにもおかしい。よく、見知った動物の足跡の形に似てはいるが、どうにも変だ。

まるで、飛び跳ねたような足跡だが。少し深く陥没している。

只の動物にしては、その動きが奇妙だった。

「ネズミか」

コードは呟いた。

フェンリルは頷く。

「相手は既に、こちらに気付いていると思うか？」

「分からないわ」

即答された。

でも、と彼女は言う。

「もし私なら。先日やりあったように、襲撃してくる事を前提に迎え撃つ」

コードは、音波を飛ばし続ける。

そして、その能力により、その動物の形状を把握する。

「やはり、ネズミだ……」

そう言った。

「ネズミの鼓動を感じる。移動している。何匹も……」

「そのネズミがもし、“眼”の役割を果たしているとすれば。既に、オレ達の位置は気付かれているかもしれないな」

あちらにも、こちらの動きが把握されている。

そう考えて、行動した方がいいかもしれない。

先走りそうになるコードに対して、相棒の助言を聞きながら、フェンリルはなるべく制するよう行動していた。

そして。

やはり、警戒すべき相手は、コードの精神を崩壊寸前にまで陥れた、フードを被った女だ。そいつの攻撃を食らってしまったら、敗北の確率が高くなる。そう踏んでいた。

それから、赤を使う少女。

そいつの能力の全貌はまだ未知数だ。

赤を使う、赤を媒体にして増やす、という事までは分かるのだが、一体、赤とは、何処までが赤なのだろうか……？

「瞬間移動で宮殿内部まで入ろう」

フェンリルはそう提案した。

既に、強敵の敵の女の位置は分かっている。

彼女に接近さえされなければ、どうという事は無い。

「なあ、コード、先に言っておくが。オレの瞬間移動の能力は万能ではない。何だろ、オレが直接、視えている相手じゃないと、“攻撃のエネルギー”をヒットさせる事は苦手だし。それに、色々、不便な所がある。……オレの精神的弱さ、脆さが出た時も、能力の威力や効果の振り幅が強くなるし……。その点、ひょっとすると、君のクエーサーの方が、柔軟性、応用性に飛んでいるかもしれない」

と、意外と弱気とも取れる事を口にする。

三名は、宮殿内部へと入り込む。

何度も、瞬間移動を繰り返して、最上階の、敵のボスの前まで向かうつもりだった。

出来れば、ボスの能力の正体も知っておきたい処だが、計画としては、相手に能力を出させる前に倒す、という意見で収まった。

しかし、レイアの方は、小さく呟く。

「奴は果たして、死ぬの？」

それは、フェンリルにも聞き取れない声音だ。

勿論、音を拾えるコードにさえ、そもそもレイアを認識出来ない為、聴こえない。

宮殿は、所々が破壊されていて、歩くのも混迷を極める状態で、瓦礫を避けていく。

八階建てで。

まるで、修行場のような場所も存在した。何を考えているのか分からないが、人体に針を刺す道具が置かれている瞑想場。人間が入れる大きな滑車。それから、潜水用のプールなどが置かれている。

困った事に、遮蔽物が余りにも多い。

勿論、本来ならば、二人の能力の性質上、特にコードの能力の性質上、遮蔽物が多い方が、有利に働き、暗殺に向きやすいのだが、問題は相手の方も、それを利用した能力を使ってくる可能性があるという事だ。

精神攻撃を使ってくる女のいる場所は、ボスらしき痩せた男の近く。

順調に向かえば、すぐに敵の元へと辿り着く。

すぐに、瞬間移動で、敵の側まで行かないのは、移動してきた瞬間を狙われる可能性を考慮しての事だ。

コードは言った。

「ネズミの鼓動が増えてきている」

フェンリルは驚く。

彼の空間把握の能力は、コードの音響反射に比べれば、余り優秀ではない。大体の物の形状を把握出来るが、小さな物体などはつい、見逃しがちになってしまう。

「ネズミが俺達の周りに集まってきているぞ」

あのネズミは、何をしてくるのだろうか。

偵察にしては、どうにも動きが奇妙だ。

というよりも、明らかにこちらへの攻撃の隙を窺っている。

コードは不快に思って、超音波で、ネズミの一体を攻撃する。

ネズミは簡単に弾け飛んでしまった。

「大丈夫だ。近付いてきても、俺が簡単に倒せる」

三名はなるべく、遮蔽物の少ない広い場所を選んで。

なおかつ、宮殿内に押し寄せている人間達の少ない場所を選んで、移動していく。

もう、最上階は近い。

ふと。

一人の民間兵が、慄きながらも、敵のボスの処を目指していた。

彼の眼には、強い意志が灯っていた。

確実に、この街を守る為に戦う決意があるのだろう。

しかし。

三名共、気付いていた。

彼の周囲には、得体の知れないネズミの群れが近付いてきている事に。そして、彼らは、その兵士を使って、敵の能力の正体を知る手掛かりにしようとしていた。

精悍な顔をした、民間兵が歩みを進める。

それは、天井からだった。

一匹のネズミが降ってくる。

そのネズミは、何の躊躇も無く、その兵士に飛び掛り。

首筋を噛み破っていく。

叫喚。

コードとフェンリルはほぼ同時に動いていた。

コードは、超音波の弾丸で。

フェンリルは、何処かから取り出したナイフを投擲して。

民間兵に襲い掛かる、ネズミを貫き倒す。

「あら、囷にして見捨てるつもりじゃなかったの？」

と。

背後にいる、黒と白を纏った少女は、冷たく言い放つ。

「煩いな。……思わず、腕が滑ったんだよ」

「素直じゃないわよねえ」

くっくっ、と少女は笑った。

しかし、だ。

既に、二人が攻撃した事によって、敵側に二人の存在と、動きが完全に知れ渡ってしまった。このフロア帯にある天井が抜けていく。

大量の、白いネズミがぽとぽと、落下してくる。

コードは項垂れて、フェンリルは舌打ちする。

レイアは冷ややかに笑った。

敵は、彼らの良心を逆手に取って、民間兵を利用したのだ。

この辺り全てにネズミが潜んでいる事は既に、熟知していた。

問題は、相手はこちらの能力を知りたがっている、という事にあつた。

それはいい。

ネズミは、二人を威嚇している。

そして、飛び掛る様子を見せる。

数秒、経過する。

ぽつ、ぽつ、とネズミの身体が膨れ上がっていく。

フェンリルはコードの手を掴んだ。

「この場から、逃げるぞ」

まるで、爆弾のようにネズミが破裂していくのと、二人が別の場所へと飛んだのは、ほぼ同時だった。

民間兵の肉体も爆裂する。

フェンリルは、無人の場所まで飛んで、舌打ちをした。

「敵は、人を殺す事を何とも思っていない。……ダメだな、オレは非情になれない」

民間兵を見捨てられなかった、……いや、助けられなかった憤りだろう。

「貴方のそういう処はきっと良い性質なのかもしれないのでしょうけれども。このままだと、死ぬわよ？」

何も無い空間が語りかける。

「今、ネズミが爆裂した後に、あの兵士の肉体も吹っ飛んだ。敵の能力は何だと思う？」

「さあ？ まだ、分からないわね。でも、貴方の『フェンリル』の空間把握の有効範囲は、せいぜい頑張って、半径20メートル前後でしょう？ おそらく、敵はその外から攻撃している。どうするの？」

彼は少し、迷っていた。

出来るならば、民間人を巻き込み続ける敵を倒してしまいたい。

「ダメだな。やっぱり、なるべくならば、余り人が殺されていくのは気分がいいもんじゃない。どうにかして、先にこの敵を始末したい」

隣にいる、彼以外には認識出来ない少女に言う。

「こいつを何とかしなければならぬと思わないか？」

「私は興味が無いわ」

突き放すような言い方だった。

冷然とした微笑を浮かべている。

彼女は興味が無い、と言った以上、この無差別に民間人を巻き込もうとする、敵を始末するつもりは無さそうだ。

彼は少し、頭を抱えた。

「私はこの建物の最上階にいる男に興味がある。この敵には無い」

そう言いながら、白と黒の彩色を纏った少女は、上の階へと登る通路へと向かう。

「貴方がこの敵を何とかしたいのなら、貴方が行動すればいい。私は最上階の男に会いに行くわ」

そう言って、すたすたと階段の方へと向かった。

もう一人の青年は、独白にしか見えない彼の話を呆けたように見ていた。

「なあ、コード、どうする？」

彼は音波使いに問うた。

「お前、その……何ていうか。人って殺せる？」

少し気恥ずかしそうな口調。

それは、妙な問い掛けだった。

訊ねられたコードは、少し困惑する。

「……どういう事だよ？」

「率直に言う。オレは人を殺せない。殺した事が無い。ドーンのバウンティ・ハンターとして、明らかにダメなんだろうが。そうやって生きてきた。人殺しが悪だとか、そういう事を言っているんじゃない。殺せないんだ。その……別に情けないとか、弱いとか思っても構わないけど。だから、どうしても殺さなければ為らない相手は、……人に頼む。……自分でも卑怯だと思っている……」

コードは頷いた。

秩序を破壊する“悪人”を始末する。

それが、ドーンのハンターとしての仕事だ。

この敵が何であれ、倒す必要がある。

街に並ぶ家々から少し離れた、丘陵。

白い葉が萌える森に覆われた場所。

フィア・ゾーンは、瓦礫の宮殿を眺めていた。

数キロ離れた先から、双眼鏡で宮殿の光景を眺めている。

彼の『アンシリーコート』で作りに出すネズミには複雑な命令は与えられない。

取り敢えず、ルルイエとニアス以外で、動く物体を襲え、くらいのいい加減な命令をインプットしているだけだ。

しかし。

隣にいる、アンサーを見る。

「ルルイエは王様だなあ。ああ、王様だ。戴冠式だよなあ、それを邪魔する狼藉者共は、みんな人柱になっちまえばいい。みんな血の海に沈むんだ。スープにしてやるぜ、なあ、アンサー。

お前、生きていて何だと思う？」

赤い少女は彼の言葉を吟味する。

「生きている？」

「ああ、生きていて事さ」

「うーん……」

少女は首を傾げた。

こうして見ていると、微笑ましい仕草だ。

フィア・ゾーンは無骨な手で少女の頭を撫でる。

ごしごしっ、と黒い髪に手櫛を入れる。

そして、地面に唾液を垂らす。

その中から、ぷつり、ぷつり、と蛆虫のように白いネズミが生まれていく。

「生きていて、ってこういう事だなあ。カタルシスを得る事だ。自分のやりたい事をやるって事だ。アンサー、お前、やりたい事無いだろう？ 見つかるといいよなあ？」

巨漢は口元から、唾液を垂らし続ける。

ぷつり、ぷつり、産卵するように、ネズミを生んでいく。

彼の肉体はまるで、それ自体が母体のようなだった。

そのまま、もう片方の手でごしごしっ、と少女の腕に触れる。

爪を立てて、撫でる。

何度も、何度も、撫でる。

摩る。

そして、彼は勢いよく、自分の口の中に指を入れる。

嘔吐。

嘔吐物が地面へと散らばる。鶏肉、ジュース、胃酸。

ネズミが生まれる。



アンサーの腕をまた撫でる、自身の嘔吐物で汚れた腕でだ。指先が楽器を奏でるように、激しく蠢く。

少女は黙止している。

醜い顔をした巨漢の右手は、美貌の黒髪の少女を愛撫し続ける。指先は腕から背中になり、腹をなぞっていく。

もう片方の手は、頭から首筋へ、そして胸元へと移っていく。

男は唾液を垂らし続ける。

少女は無感動。

突然、男は囁いた。

低い、底冷えするような声音だった。……。

「アンサーァ、お前を喰わせてくれ」

男は食人鬼だった。

何名もの女を解体して食べた殺人犯だった。

好みの女を食いたくて食いたくて仕方が無い。その衝動を幼少期から持ち続けて、その欲望を実現してきた。

彼はポケットに仕舞っている小さなナイフを取り出す。

そして、少女の肩に突き刺した。

流れ出る、赤。

ふわり、と舞い上がる。

男は、赤を啜り続けた。

赤が増殖し続けていく。

増殖する赤の中から。

白いネズミ達が産声を上げる。

ネズミ達は、骨組みを露にした、樹木のような宮殿に向かって、走り続ける。

『アンシリーコート』は、『サーキュレーション』の能力を宿し、生きとし生ける者達を食らいに行く。

「アンサー。お前は俺の理想の女。……少しばかり幼いのが難点だが。お前が首だけの時から好きだった。お前の服は全て、俺が用意した。ああ、お前を食いたいなあ。頭の先から、足の爪まで。愛している。今すぐ、バラバラに四肢切断して内臓を引きずり出して、食べてしまいたい。……おかしいんだよ、俺は。たとえば、ニアスには軽蔑されるかなああ？ ……でも、仕方無いよなあ。俺の生まれ持った性なんだよお」

くちゃりくちゃりちゃりくちゃりくちゃりくちゃり、と。

まるで、ガムでも噛むように、彼は少女の肉片を頬張っていた。

アンサーの肩が抉られて、小さく骨が露出している。

ぺちゃぺちゃぺちゅぺちゅべきいゆい、べきいべきいべきい、舌で肩の傷を舐めていく。

少女の眼には、何の感情も灯っていない。

そして、ふいに男は少女への愛撫が終わる。

空は陽光が輝いている。

まるで、祈りを捧げるように両手を合わせる。

そして、叫んだ。

「アンサーァァァァァァァ！ 俺達是最強だ。敵がどんな能力者だろうがあ。俺とお前の合わせ技なら、勝てる。皆殺しだ。全員、血の海になるんだ。真っ赤にしてやろうぜ。赤い王国を積み上げてやる。俺達の世界だ。ルルイエに見守られる世界。神に愛される世界。俺達はそこに住もう。俺達の為に世界は開かれる、そしてルルイエは神だ」

真っ赤に焼け付いた太陽。

二人は、何よりも巨大な赤に見とれていた。

十

ルルイエは街の様相を眺めていた。

ニアスは彼の傍らで、彼を守護するように立っている。

破壊されたフロア内は、ルルイエの能力によって、あの洞窟の中のように、黄金や宝石を散りばめられた絢爛豪華な、しかしやはりどこかおぞましい空間へと変わっている。

ニアスは主人から離れ、階下の様子を見に行く。

.....敵は三名。見えない弾丸のような攻撃を放ってくる男.....あれは、もう何とでもなる。それから、私に話しかけてきた、.....悔しいけど、少し好みのタイプな女の子のような男の子。... ..それから。

ニアスは目深に被っていたフードを取る。

肩で切り揃えた、黒髪が垂れ下がる。

.....あの女。.....少女は何者だ？ 私には見えたが、列車の中の乗客達には見えなかったみたいだぞ？ あいつは本当にヤバイ。.....。あれが、何なのか分からないが。あいつを倒さないと、私達に勝機は無いんじゃないの？ あれの能力は何なんだ？ いきなり、空間に姿を現したように見えたが。.....いきなり、この世界に現れたかのような。

彼女は、少し俯く。

階段の途中で歩みを止めた。

.....いきなり、存在し出したかのような。そうだ。だっておかしい。姿が消せる、というよりも、認識それ自体を消せる、といったような感覚。思うに、人間が存在している、という事はエネルギーを伴う事なんじゃないかしら？ たとえば、人はそれを分かりやすく、気配だとか、言うのだけれども。私からしてみれば、エネルギー。存在している、って事はエネルギーだって思っている。

.....ならば、ひよっとすると、奴の能力は、あるいは奴の存在それ自体が、空間、認識、意識から乖離した存在なのかもしれない。私の主人のルルイエが“何者でも無い何か”のように、アンサーもそうであるように。おそらく、あの少女も.....。

彼女は髪の毛を弄る。

そして、齒軋りをする。

……私の『モーザ・ドゥーグ』は意識を持っている相手になら、通じる筈。たとえ、そいつが幽霊の類だとしても、あるいはもっと別の概念や、神みたいなものだとして。そいつが、意識を持っているのなら。……。

彼女は右手を掲げる。

指先を花のように開いた。

彼女の背中には、獣の気配が充満していく。

モーザ・ドゥーグ……それは、ヨーロッパの地方で伝わる、黒い犬の名前。ブラック・ドッグなどとも呼ばれ、色々な亜種が存在する、雷光と共に現れて、恐怖で人を殺せる黒妖犬。ニアスがかつて、よく通っていた図書館で観た神話の神々の載った図鑑、怪物の載った図鑑に挿絵として描かれていた黒犬の名前。

それは、禍々しい真っ黒な気配を放つ犬だった。

恐怖そのものを実体化したかのような怪物。

その挿絵のイメージが彼女の頭の中で、反芻される。

化け物。

人間が誰しも抱えている、恐怖、トラウマ、悪夢。

それを引きずり出してぶつける攻撃。

心理学とか、精神医学とかは、そういったものを克服する為に発達していった学問なのだと彼女は思っている。

誰しも、人間が抱えている闇。

押し殺した恐怖。視ないようにしているモノ。

相手が何者であれ、それを克服出来るのだろうか？

ニアスは七階のフロアに着く。

そこには、押し寄せてきた民間人達が、それぞれ、頭を掻き毟ったり、壁に頭をぶつけ続けたり、あるいは叫び声を上げ続けたりしながら、それぞれの悪夢に蝕まれ続けていた。

……フロイトとか、ユングとか結構、読んだけど。私の能力は、彼らが色々と解き明かしているんじゃないかしら？ でも、人間の悪夢の持つエネルギーって、何処までも広がり続けるのよねえ。

彼女はまるで、その世界の女王のように、高らかに呼び掛ける。

「ねえ、貴方達、あの先に貴方達を救う光がある。あそこに向かえばきっと、救われる。貴方達が迷い込んだ暗い森、深い迷宮の出口はそこにあるわ」

まるで、地獄の亡者達に呼び掛けるような声音。

苦しみからの解放を求めて、悪夢に閉ざされた者達は立ち上がる。

まるで、亡者の行進のようだった。

.....意識を攻撃している能力でしょうね。.....間違いないのは、恐怖を呼び起こしているという事。人間、個々の持つ恐怖を呼び覚ましている。

レイアはコードの受けた攻撃をあらかじめ、分析し切っていた。

六階のフロア。

フェンリル達は五階の時点で引き返した。

住民達の被害を最小限に留めたい、余計な事だと思うが、彼らがそうしたいと思うのならばそうすればいい。もっとも。

.....もし、敵が本気で無差別に虐殺を行おうとしてきたら、貴方達が何しようが、被害は広がり続けるだけなのだけれども。それは、始めから覚悟するべきだ。あるいは、諦めるべき、というか。でも.....。

それは、まるで支配者の思考だ。

戦争、政治、統治。

始めから、ある程度の被害を受ける人間を想定して、それを受け入れて行う行為。

人間は可能な限り、多くの者を生かそうとして、文明を築いてきたが。.....。

六階のフロアは、破壊された瓦礫が並んでいる。

入り組むように、樹海のように、壊れた柱が積まれている。

まるで、計算して設計されたような破壊の痕。

彼女は気付いていた。

この空間は、敵が攻撃を仕掛けやすいように設計しているのだと。

物陰、死角が多過ぎる。

敵が正確に、こちらに攻撃を仕掛けやすいように、練り込まれている。

彼女は少し、むっつりとしたような顔をする。

.....この敵は。.....やっかいね。私に届く、かもしれない。本来ならば、どうせ、私の能力が発動してしまいさえすれば、敵が何やってこようが、関係無いんだけれども。

レイアは立ち止まった。

そして、即座に踵を返す。

挑発に乗るつもりは無い。

このフロアを横切らずとも、上の階へと向かう手段は無数にある。

.....天井を割り貫いて、上に向かうか、それとも一度、外に出て壁をよじ登る方がいいか。どっちにしる、若干、隙が出来るのよねえ。.....。

考えてみたが、どの道、この敵は倒しておいた方がいい。

彼女はそんな事を考えていると、物陰から、ひたひた、と足音が向かってくる。

彼女は、足音の主が姿を現した瞬間に、即座に自身の能力を発動させた。

それは、一人の中年の男だった。

猫背でふらふら、と歩いている。

首筋には自分の爪で掻き箸った痕。胸も少し抉っている。

血塗れで、浮浪者にすら見える。

その男は、既に、彼女を認識出来ていなかった。

レイアは壁に寄り掛かり、男の行動を観察する。

.....。

レイア的能力である『エタン・ローズ』は、存在の在り方に還元された能力である。

レイアは、元々、他人に認識されるわけではなく、先にレイアの方が自身の能力を周囲にいる者達に片っ端から使って、レイアを認識の外へと弾き飛ばしている。

彼女はこの街に入った時、特にいけ好かなかった為、住民を見るたび、片っ端から、自分の能力下に巻き込んで、自分の姿を見失わせ続けている。

なので、誰も彼女を視る事も、触れる事も不可能にしていった。

相棒のフェンリルを除いて。

始めにコードに会った時も、コードと視線を合わせた時点で、コードの脳がレイアを認識して捉えるコマ数秒以内で、彼女を認識外に弾き飛ばしたのだった。

別に、透明化出来るだとか、そういう能力ではない。

とにかく、他人の認識の中から、彼女という存在を弾き出す事が可能なのだ。

透明化と違って、予め、対象に使う必要があるが。視覚だけではなく、レイアの発する音も、匂いも、認識出来なくなる。

レイアは、自身の能力を“処女性”によって根差した能力だと考えている。

視れない、触れられない、所有出来ない、支配出来ない、そして、何よりも届かない。

絶対的処女。

しかし。

敵も認識に根差している能力だとするのならば。

それを突破される虞がある。

.....ふっ。私に触れたがっているようだけれども。そうはさせない。せいぜい、妄想の中で私を捉えたとしても、思い込んでいるがいい。

彼女は、すうっ、とナイフのように鋭利なよく通る声音で叫んだ。

「貴方の能力は“恐怖”なんでしょう？ 人間が個人個人で見たくない、触れたくない、と思っている恐怖を引きずり出す。私を攻撃してこい。貴方自身が本当は弱いんでしょう？」

辺り一面の空間を引き裂くような感覚が満ち溢れていく。

レイアの存在が濃厚に漂っていく。

光明。

暗黒。

まるで、地面から生え上がってくるかのような、負の感情。

エタン・ローズの空間。

あるいは。

彼女の持っている、悪意。敵意。殺意。

それが、濃厚になる。

光と闇が持つ、剥き出しの感情そのもののような。

しかし、彼女の表情、仕草は吹雪のように、何処までも冷たい。

「殺して上げるから、今すぐ現れなさい。どうせ、貴方が何をやってきても、私を倒す事など出来はしないのよ」

冷たい剣のように、淡々とした声で言う。

彼女は壁に左手を触れる。

この建物は、塔のように上に長く伸びている。

形状を考えて、理論上は可能な筈だ。

壁は薄い。これならば、出来る、と踏んだ。

彼女の左手の周囲に向かって、黒く、黒く、黒く、黒い光が凝縮していく。

黒い光は、搔き毟るように、壁を粉微塵に分解し始めた。

壁の存在の在り方を変えて、引き離し続けている。

壁を構成している分子構造を、素粒子単位で分離させて、引き離し続けている。

壁に大穴が空いていく。

彼女はそのまま、焰のように揺らめく黒い光によって包まれた左手で、水面を指先でなぞるように、壁に蛇のような孔を空け続ける。

青空が見えた。

太陽の光が差し込んでくる。

光の粒を纏わり付かせて。暗闇を切り取ったような、黒い焰が燃え上がる。

そのまま、川の水が流れるように、やたらめった、壁を破壊し続ける。

今、何をやろうとしているのか、敵はすぐに気付くだろう。

彼女は、六階というフロアの壁全てを、円を描くように消し飛ばす事によって、宮殿そのものを地面へと叩き付けようと考えていた。

強引な破壊。

相手が反撃せざるを得ない状況。

そして、このような多少、無茶な行動を取ってもなお、彼女は冷静な意識のまま、自身の黒い焰のみを見続けて、聴覚だけで、周囲の気配を伺っていた。

敵は彼女の行動を止めたい筈だ。

勿論、壁全てを消し飛ばす必要は無い。途中で、重量のバランスが崩れて、傾き、崩れ落ちるだろう。

十

「何て無茶な事をしようとするの……？ 何、考えてるのよ？ あいつ……」

ニアスは思わず、顔が引き攣ったまま、うわずった声を出す。

フロア全体の面積を考えて、そう遠く無い内に、敵の目的は達成されるだろう。

上の階にいるルルイエを守らなければならない。

もし、この塔のような形の宮殿が途中の階から崩れ落ちれば、下に集まっている街の住民達に

も被害が及ぶ筈だ。

敵の方も、まるで周囲の被害を考えていない。

モーザ・ドゥーグの攻撃を当てるも何も無い。

まるで、チェスで対戦している相手が、戦略を練っている最中、いきなりボードごと蹴り飛ばしたような。

「……というよりも、あいつの能力って何なの？ フィア・ゾーンにも通じる無茶を感じるんだけど。しかも、あの男なんかよりも、遥かに冷静だし。あれだけ、隙だらけの行動に見えて、隙が見当たらない。……、アンサーが絶対に勝てないわけね……」

ニアスは既に、“仕込み”を終えていた。

彼女の周囲には、何名もの人間達が、暗い闇の中彷徨いながら救済を求めている。

彼らの手には、一本、一本、刃物や斧などの武器が配られていた。

これで、恐怖の対象を殺せ、とニアスは囁いている。

ニアスが言葉を一つ一つ言う事によって、悪夢から脱出しようとした者達が、あの少女に襲い掛かる筈だった。

洗脳や支配を脳に行っているわけではない。

しかし、結果として、こういう操作も可能なのだ。

彼らはあの少女を見かけたら、恐怖の対象そのものと思って殺しに行くだろう。その時に出来る隙を狙って、モーザ・ドゥーグを当てようと考えていたが。……。

先ほど、一人、恐怖の虜になった男を差し向けたが、まるで何も無かったように、少女の下を過ぎ去っていった。まるで、彼女の姿が見えていなかったかのような。

ひょっとして、どうしようもないんじゃないのか？

ニアスは思わず、頭を抱え込みそうになる。

彼女が攻撃を当てた人間が、恐怖に飲まれるように、彼女自体がこの世界のあらゆるものが怖くて怖くて仕方が無い。こんな場所にて、こんな事までしているのにも関わらず、その事象から抜け出す事が出来ない。

しかし、此処で折れるわけにはいかない。……。

恐怖、というエネルギー。

人間が始めに恐怖を認識した瞬間とは、どんな時なのだろうか？

人間が生まれ、誕生した瞬間に、まだ幼子だった頃。

父親。母親。家族。隣人。自然。世界。世界の輪。空間。

あらゆるものに触れて、あらゆる媒体を通して。

そこに、恐怖なるものを見出した筈だ。

敵だって、何か怖いものが在る筈なのだ。

そこを、突けば。

それを突き止めれば、倒せるかもしれない。

暴力なるもの。

暴力的なもの。自分自身を攻撃してくるもの、傷付けてくるであろうもの。

何か在る筈なのだ。

たとえば、相手は、少女。女だ。

ニアスも女。女特有にしか分からないもの、きっと、それは在る筈。

たとえば、そうだ。

男性的な暴力性。

たとえば、ちょっと怖かった父親とか。隣近所に住んでいた、怖い大男のおじさんとか。

ぶつぶつ、とニアスは独り言を言い始める。

「男の人って怖かったんじゃない？　たとえば、目線だとか？　力が強くて、適わなかったなあ？」

.....ダメだ。

あの少女は、男なんて怖いなんて思っただけはいやしない。何故だか、強くそう感じる。あの圧倒的で破壊的で冷笑的な雰囲気を持っている少女は、男性の持つエネルギーを破壊し尽くす何かを持っている。.....。分からないが、何か、だ。.....。

男性的なもの、何だろう？

たとえば、拳とか。剣とか。拳銃とか。

.....全部、何故か通じそうに無い。何故だろう。

イメージが湧かない。

それが、とてつもなく怖い。

ニアスは半分、狂乱状態に入り込みそうだった。

たとえば、ニアスは犬が怖かった。近所で飼っていた黒い犬。大きな犬。大人に為るに連れて、段々、その犬が好きになってきた。最初は怖かったもの。

段々、それに触れようとして。この犬を理解しようとした。

すると、少しだけ恐怖が安らいだような気がした。

以来、彼女は黒い犬に関わり続けている。

後から知った事なのだが、その黒い犬は狼の血が少し混ざっていたらしい。

そう。

人は恐怖を克服して生きようとする。けれども、その恐怖を見ないように、観ないように、視ないように押し込めて、生きているフリをしているだけにしか過ぎないのだから。

ニアスからしてみれば。人間なんて本当は生きてなんていない。

みんな、恐怖を直視出来ず、恐怖に支配されながら、恐怖の奴隷として鎖に繋がれて、生きているだけだ。

気付けば、喉がからからだった。

足が震えて、立てそうに無い。

時間にして、十数秒しか経過してない筈だ。

にも関わらず、何時間も考え事に費やしていたような倦怠感に襲われる。

「あいつの怖いものって何なの？　何か在る筈よ、絶対.....」

虫。汚物。暴力。景色。性。



……………、ふと、閃いた。

あの少女の眼差し。

雪原のように凍えるものの中に在る。

ニアスは、立ち上がっていた。

少女の下へと向かっていく。

覚悟を決めた。

殺されるかもしれない。

余りにも、無防備過ぎる。

もう、彼女の能力は関係無い。

相手の能力なんて関係無い。

ニアスの能力も関係無い。

対峙。

少女は動きが止まった。

相手は、此方を振り向こうとする。

ニアスはそれを制するように言った。

「あなたが怖いって、自分自身なんじゃない？ あなたって、独りで生きてきたんじゃないの？ 誰にも触れられず、誰にも届けられず。そうやって生きていたって幸福なの？」

「ええ」

即座に答えられた。

「貴方には分からないでしょうけれど、別に理解なんてしなくていい」

ナイフのように、言葉を刺してくる。

張り詰めたような空気。

「それがあなたの“弱さ”ね。あなたは強いんでしょう？ 何処までも、何処までも強くなりたいのよね？ あなたって、自分しか好きじゃないんじゃない？ 誰も愛してないのよね？ それって、とっても辛くない？ 寂しくない？ 悲しくない？」

光と闇を纏った少女は沈黙する。

何かを考えているようでもあり、何も感じていないように思えた。

でも、この状況。

魔術師のような女はふと、唇が歪む。

そもそも、言葉に耳を貸している時点で、無視出来なかったのでは……？

針の穴に髪の毛を通すくらいの、隙だったが。確かに。……。

対面。

二人が互いに視線を合わせたのは、ほぼ同時の事だった。

モーザ・ドゥーグ。

エタン・ローズ。

……………。

分が合ったのは、ニアスの方だった。

レイア的能力は認識しても、相手がレイアを見失い続けるだけ。

ニアスの攻撃は、そもそも、認識それ自体で完了する。

手応え。

ニアスの背後で。

少女は悔しそうに、忌々しそうに言った。

「何で、私に届くのよ。食らってしまったじゃない？ 貴方の勝ちよ。私もまだまだね」

ニアスは全身から、冷や汗が流れ続ける。

強烈な寒気に身を焼かれているかのようだった。

「今から、貴方の頭を吹っ飛ばしたいんだけど。困ったわね？ 視界に貴方が映ってないのよ？

何か知らないけれど。鏡ばかりしか無い世界に連れて行かれたんだけど。貴方の能力、何だっけ？ 恐怖を引きずり出す？ あるいは潜在意識の何か？ 人間個人個人、みんな見える景色が違うのでしょうかね。貴方の能力を受けた者は。……」

辺り一面に存在している、光と闇の陰影が、狂った調和を奏でるようにコントラストが、明滅している。スポットライトをでたらめに、当てたような、光と闇の暴走。

「貴方から視て、私は貴方の世界にいるの？ それとも、私が自分の中の何かで作り出した精神世界に閉じ込められているの？ 処で、貴方って私が今、視える？ 私の能力もまた、貴方に届いた筈なんだけど」

ニアスは、押し黙っていた。

姿が見えない。

声ばかりが、まるで残響するように聞こえてきている。

呪いの唄のようだ。

耳元にこびり付いて、離れなさそう。

「まあ、いいわ。貴方の勝ちだ。私は退場する。この世界から抜け出すまでね。……後は好きにやりなさい。フェンリル達が何か行動を起こすでしょう」

それ以来、そいつは、喋るのを止めた。

ニアスは、動かない。いや。

動けなかった。

もう、一步も動けそうになかった。

心が、折れてしまった。……。

ルルイエを、守れそうに無い。……。

レイアー一人を残して、宮殿から離れた。  
フェンリルは、コードを抱えて、瞬間移動を繰り返していた。  
敵の気配を探している。  
ネズミの気配を追っている。  
なるべく、広い場所に移動しているので、此方側が有利に働く筈だ。  
敵は正面切って、戦ってくる相手ではない。  
おそらく、此方を罠に嵌めたい筈だ。  
それにしても、太陽がざらつくように熱い。  
もうじき、日が暮れる。  
空を見上げる。  
そういえば、夕日が赤い。  
太陽は光源のせいか、昼間は黄色く見える、……と思う。  
フェンリルは、少し、考える。  
今まで、敵の行動からして、まったく手段を選んでいない。  
何を考えているんだ？  
それにしても、太陽が赤い。  
この時間帯が、一番、赤いのだろう。

「まさか……」

瞬間移動を繰り返し続け、距離を飛び続けるのを、一度、止める。  
空を見上げた。  
真っ赤だ。灼熱の赤。  
そもそも、此処の気候はこんなに暑かったっけ？  
住民達も動揺している。  
まるで、世界の終端のような顔をしている。  
空が真っ赤だ。  
赤い。  
赤い。  
赤い。  
赤い。

……………異常過ぎる。空全体が、赤く焼け爛れていくかのようだった。

「こいつ、……………正気か？ まさか、街全体をオープンにする気じゃ？」

この街の住民は何名くらいだ？ 確か、数十万名くらい？  
こいつの攻撃で死ぬであろう人数は、何名くらいなんだ？  
まるで、神の火だった。

この敵は、目的を達する為に、一体、どれくらいの人間を殺したって構わないと考えている

んだ？

道行く人々の何名かが、倒れていく。

熱射病だ。

倒れたのは、老人などの弱い人間ばかりだ。

すでに、生命力のある者は、物陰へと避難している。だが、じりじり、と太陽の熱は人々から気力を奪っていつているのが分かった。

この攻撃を放置すれば、一体、どうなる？

幸いだが、空にある赤の増大は、それ程の早さを伴っていないみたいだった。

昨日の気温と比べて、せいぜい、十度、二十度程度、上昇したくらいだろう。

かつて、気温を操作する能力者とも戦った事があるが、そいつは、この攻撃の比では無かった

。

だが、やはり放置するわけにはいかない。

やはり、温度は少しずつだが、上昇し続けているみたいだし、それに、長い間、暑さに耐え続けるわけにもいかない。そして、何よりも。

太陽を使っているからか、効果範囲が広過ぎる。

.....住民の被害が、拡大していく。.....

何処かにいるであろう、すぐにでも敵を探すべきだ。

少なくとも、相手は二人組み。

赤い少女と、白いネズミを使う能力者。

「敵は何処に隠れている？ 畜生、見つかるわけないか。街が広過ぎる。.....」

そして。

この敵の攻撃は。

コードが告げた。

「フェンリル、この敵の目的は、俺達の始末じゃない。.....、あの宮殿の最上階にいる、痩せた男。あの男の演説が続いている。そいつの音を拾っているんだ。此処の言語で言っているが、何を言っているか、分析した」

「何を言っているんだ？ 奴は？」

「これが、“我々”の力だ。貴様らを今から導いてやろう。新たな神としてだ。旧存在の神の歴史は終わった。これからは、我々の歴史が始まる。そして、今から浄化を行う。これは汚れたものを焼き払う為に必要な事だ」

コードは、嫌そうな顔をしながら内容を通訳する。

「.....気分が悪くなるな。さっさと倒して、お仕舞いにしよう」

そして、ふと。フェンリルは考える。

「レイアの奴は何をしている.....？」

彼女の性格は知っている。

傲岸不遜でナルシスト。気分屋で自分勝手。

しかし。

「倒すと決めた相手は倒しに行く。他は別に信じなくてもいいが。それだけは、信じている。何で、あの“神に為りたいらしい男”が平然と立っている？ 演説が続いている？ もしかして、苦戦しているのか？ 考えたくはないが、まさか」

負けた？

彼女が？

考えたくは無いが、まさか。

いや、馬鹿らしい。彼女の能力を考える限り、負けるとは思えない。

「けれども、それも、念頭に入れて置いた方がいいかもしれないな」

一人、呟いている。

コードは、周囲に音波を送り続けている。

「人々の心音の消耗が酷い。俺達の肉体はそれなりに強いけれども、やっぱり、普通の人間じゃ耐えられないんだ。このままだと、沢山の人間が死ぬぞ」

「今、何度だよ？」

「60度。………此処の気候の平均は、10度前後だぞ？ 此処は寒冷地に近い。空気も乾燥している。砂漠に生きる人間なら、ともかく、耐えられる温度じゃない。……」

既に、炎に包まれているような感覚だった。

大体、砂漠に住む人間だって、熱で肌が焼けるから、布を全身に被って生きている。此処に住む人間に、そのような知恵があるだろうか？

その辺りにあるポロ切れなどを、全身に纏いながら、二人は思考を練る。

もし、自分達が敵の立場ならば、何処から攻撃してくるか？

仮に、この能力が、自分や味方にまで被害を及ぼすとすれば。地下に隠れておきたい。だとすれば、もう、どうしようもなくなる。

街中の家々の何処かにある、地下室に潜伏していたとすれば、もうどうしようもなくなる。

十

男はいつものように、大量の図鑑を並べた部屋にいた。

彼は人非人そのもののような性格をしているらしいが、どうも、こういった自然の景色や動物図鑑、植物図鑑などが好きなようだった。

今回は、訊ねてきたコードを、普通に部屋に入れてくれた。

相変わらず、彼には何の興味も示していないが、まるで自分自身の考えを確認するかのよう、一応の話し相手としては認めてくれたみたいだった。

「ゴキブリにはゴキブリ固有の美しさが存在する。自然が創り出す生命固有の美しさ。ゴキブリを嫌悪するのは、人間の眼からだ。まあ、人間は自分達が世界の中心だと思ってやがるからな。病原菌を撒き散らして嫌悪されるネズミや、死体に群がる蠅。人間が古来より忌み嫌ってきた生物は沢山いる。そいつらにはそいつら固有の生命の美しさ。美的なフォルムが存在する。それは人間には無い美しさだ、人間が持ち得ない生命の美という奴だな」

彼は図鑑をぱらぱらとめくっていた。

注目しているのは、ダニの写真だった。

「こいつは凄いな。もし、仮にこいつが病気の媒体となったら、怖ろしいだろうな。知っているか？ 人間の肉体には幾つもの顔ダニとやらが付着している。もっとも、もはやその形状は細菌の域なんだけどな」

コードは男の独り言を聞き続けていた。

「物には形状がある。そいつの存在の在り方にも。そいつは、何で、そういう風に創られているんだろうなあ？ それは、そいつにとって必要な構造だから、だろうな、なあ、思うのだが」

彼は指先を少し噛む。癖なのだろうか。そして、答えた。

「なあ、俺達は、動物の目線。昆虫の目線。植物の目線。無機物の目線で物を見ないだろ。だから、そういう風に突き詰めた視点を考えれば、大抵の事は下らなく思える。逆に言えば、それこそ、植物の視点で見える景色を延々と考え続けたならば、大抵の人間の目線なんて見えてくるかもしれないじゃないか。だったら、そこから、お前の悩みとやらに対する、決断を、解答を、総括を決めていけばいいんじゃないか？」

真面目に言っているようでいて、やはりどこか投げやりのような発言。

ふと。彼は思い立って、訊ねた。

きっと、それは聞いておかなければならない事だ。

「悪とは何だと思う」

コードはそいつに訊ねた。

ふん、と彼は鼻を鳴らす。

「そんなもの、あると思うのか？」

馬鹿馬鹿しそうな声だ。本当にどうでもいいかのような。

あるいは、まるで見下しているかのような。

「ある、と……思う。悪人とか、悪の部分とか……」

「そうか。何故？」

「俺が苦しんでいる。俺は悪い事をしたって、それが重要なんじゃないのか？ 何だろうな、生きているだけで重い。そればかりを感じる」

ふん、とまた男は鼻を鳴らす。

「で、お前は俺に何を言って欲しいんだろうな？ 俺に肯定して欲しいのか？ たとえば、ああ、お前は極悪人だったな、罪を償って生きろ、か？ それとも、お前は正しかったんだよ、お前のやった事を否定する意味なんて無いんじゃないのか？ それらの事を言って欲しいのか、理解に苦しむな」

「……分からない。けれども、俺はお前が凄いと思うんだ」

暴君は目を閉じて、更に、ベッドに潜り込む。

そして、シーツの中から伸びた腕が、窓を開けた。

此処の景色からは、青空が見える。遠くには海があった。

鳥の音が囁いている。何て名前の鳥なのだろう。黄色い羽毛が美しい。

海は、まるで青い絨毯のようだった。光が瞬いている。

まるで、楽になるたくなるような風景。

この男は、こういう景色が好きなのだ。

人間の命を何とも思っていない癖に、こういう情景、様式美、自然が好きなのだ。

「理解の問題なのだろう、多分」

男はそれだけ言った。

コードはその言葉を吟味する。

「各々には、各々の立場が存在する。それは確かだ。お前が過去に一体、何をやったかは知らないが。それは、お前が悪かったという事よりも、相手の立場があり、他を構成している者達の立場があり。そして、お前は行動を起こした、それだけなんだろうよ」

彼は自身の髪に、手櫛を入れる。

美形だ、と思う。

何処か、爬虫類や捕食昆虫を思わせる顔立ちだが、美形だ、と。

「そいつに、とって、そいつの生き方、意志が存在する。それは確かな事なんだろう。だから、お前は、そいつの立場に立って物事を考えればいいんじゃないのか？ もっとも、それで、お前が救われるだとか、蹴りを付けられるだとかは知らないがな。もう一度、言うが。俺には関係が無い」

彼は億劫そうに言った。

だが、特にコードを煙たそうにしているわけでもない。

「なあ、再び訊ねるけれども。悪人っていると思うか？」

「それはいるだろう。悪人はお前の中にいるんだ。お前が自分に悪を見出せば、そうなんだろう。他人に悪を見出せばそう、で。そういう中で、俺達は自分自身の立場だとかを認識しているのだろうな。まあ、お前は好きなように考えればいい。俺には、お前に対する返答を持っていないと思うがな」

風が吹き抜けて、男の髪の毛が揺らめく。

コードは思った。

この男を、尊敬しよう、と。……。

十

……相手の立場に立って、考える、か。……。

「分かった、フェンリル」

コードは言った。

それは、少し、苦々しくも、悔しい。

コードには、分かる。この敵の思考が。

それは、彼自身、痛い程に痛感しているから。

「敵は、あの宮殿の男を崇拜しているんだ。だって、そうだろう？ だからこそ、あの男を持ち上

げている。だったら、演説を聴いて置きたい筈なんじゃないか？ “晴れ姿”を見ていたい筈だ。だったら、何処に隠れていると思う？ 俺だったら、地下になんか、隠れない」

コードはポケットから、街の地図を取り出した。

絵のようになっている地図。

森に囲まれている。

「あの宮殿の最上階が見えやすい場所。そして。なおかつ、隠れやすい場所」

彼は地図を広げていた。

森が密集している場所を指差す。

「隠れているとすれば、この辺りだ」

そこは、丘になっている場所で。

宮殿から、数キロ離れている処にある。

即座に行動に移していた。

そこまで、フェンリルはコードを連れて、瞬間移動する。

丘だった。

白い葉によって彩られた、森。

そして、草原のように緑が芽吹いている。しかし、それは熱のせい、次第に枯れていた。

「気を付けろ、フェンリル。心音が大量に聞こえる。物陰に大量のネズミが潜んでいる」

「やはり、敵は此処か。そして、此処から、十数メートル先に、人影が二人いる」

二人は息を飲む。

「オレ達の能力は、おそらく、その全ては見破られていない。敵は狡猾だが、杜撰さも感じる」

「ああ、更に言えば、お前の能力はまるで知られてないだろうな」

二人はお互いの顔を見る。

そこに宿る、意志は同じものだった。

十

フィア・ゾーンは、ビール瓶を開ける。

アンサーの能力によって、辺り一帯は焼け付くように暑くなっている。

これで、もう住民達は、ルルイエに従うしかなくなるだろう。

もう、どうしようもなくなっている。

これで、この街は完全に支配化に置いてしまったのだ。

後は、彼らを追っている敵の始末だけ。

「まあ、俺達を探せるかどおかは、分からねえけどな。見つかったら、見つかって、頼むぜ？」

彼は傍らのアンサーを見つめる。

赤の川。濁流。どくどく、と垂れ流れる。

柘榴に似た、血肉。巻き散ったモノ。

彼女は、ぴくり、ぴくり、と痙攣しながら、生きていた。



男の手には、ナイフが握られていた。

ドスッ、とナイフを彼女の腹に突き立てる。

腎臓の一部を切り取って、口の中に放り込む。

その少女の顔は、無感動だった。

その行為に対して、何の感慨も抱いていないかのように見えた。

フィア・ゾーンは笑顔だった。

そこには、ある種の無垢さすらもあった。

少女は眠るように唇を揺らしている。

「何しているんだ？ ……………お前？」

そいつは、森の中に現れた。

突然、まるで空間そのものから、現れたかのような。

そいつは、死神のように、立っていた。

白と黒のドレスのような装束を身に着けた、夕焼けを背にして浮かび上がる美しい顔。

フィア・ゾーンは、ビール瓶に口を付ける。

「聖餐式」

それだけ告げる。

ドスッ、と開いた肉の裂け目に、ナイフを入れる。

真っ赤な血が、溢れ出て、また鮮やかな緑の中に、赤が混じる。

凌辱。

それは、人間を、女性を、少女を。凌辱し尽している光景以外の何物にも見えなかった。

四肢のうち、右手以外は、全てまるで力づくで引き千切ったように、もぎ取られており。胸と腹を切り開いて、中の人体を曝け出していた。

少女は、ぴくり、ぴくり、と痙攣するように動いている。

まだ、生きています。

無感情な瞳。

「……仲間なんじゃないのか？」

巨漢の眼は、何の感慨も持ち合わせていない。

「ああ。まあ、仲間っていうか。俺の好みの女でな。ルルイエが言ったんだ、“別にお前にくれてやる。好きにすればいい。”ってな。だから、やっぱり、俺は“添い遂げる”事にした」

男は、更に少女の体内にナイフを突き立て、凌辱を続ける。

そして、もぎ取った肉の一部を口に入れる。くちゃくちゃ、と静寂な森の中に肉を租借する音が響いていく。

「ルルイエ……？」

「ああ。俺達の王様、神にならなければ為らない男。俺は彼の為なら、何でもやろうと決めた。くだらねえ、人生を賭けてなあ」

「あの宮殿の男の名前か……」

その美しい顔は、底冷えするように鋭利な声で言った。

眼の色に、暗い感情が灯っている。

激しい憎悪。

「今から、お前は死ぬしかないんだけど、いいか？ 何か他に言い残す事は？」

巨漢は少女にナイフを突き立てる。

「それは難しい質問だな？ 俺は命乞いすればいいのかあ？ それとも、違うな、死ぬのはてめえの方だあ？ って言えばいいのか？ お前、どっちに期待してんだ？」

「どうでもいい。お前が死ぬのは決定事項だから」

彼の両手には、剣が握られていた。

さながら、処刑刀のような二本の剣。

「ふん」

太った巨体の男は立ち上がる。

「まさか、てめえ、俺の首を落とせるとでも思っているのかよ？ もう気付いているだろうから。言うぜ。お前はこの丘陵の、この森の中に入るべきじゃなかったんだよ、……遠くから、何かして、狙撃でもして、暗殺すればよかったんじゃないかあ？」

それは、まるで、もう終わってしまった試験の解答を答えるような口調。

「俺の能力は『アンシリーコート』と言う。知っての通り、白いネズミを幾らでも作り出せる。で、この少女、アンサーちゃんの能力の名は『サーキュレーション』。赤を増大させる。これも知っているだろうから、改めて言うが、てめえの小さな傷口とかから流れる赤を一瞬で増大させて、てめえなんざ、一瞬で爆散する事が出来る。で、それを効果的に使いたい」

「ネズミの中に、サーキュレーションを送り込んでいるんだろう？ ウイルスに感染させるみたいに。だから、一撃でもネズミの攻撃を当てれば、オレを粉々に出来る？ そうだろ？」

「そう、だから、どうやったってお前の負けなんだよお」

物陰から。

ざわざわっ、と大群となって。

フェンリルの下へと、ネズミが飛び掛かる。

「お前はオレの能力を知らない……」

ネズミが彼の肉体を食い破ろうとした瞬間。

フェンリルの姿が、完全にこの世界から消えた。

飛び掛かったネズミは、お互いに激突し合って、直後、爆裂する。

フェンリルは、森の上よりも高い場所に姿を現す。

そのまま持っている、剣を唐竹割りの要領で、振り下ろしていた。

飛び跳ねて避けた、というよりも、そのまま、存在している空間自体を移動したような。

……瞬間移動。

彼の能力を理解する頃には、フィア・ゾーンの顔から腕を伝わり、背中へ掛けて、勢いよく切り裂かれていた。

フィア・ゾーンは何が起こったのか、理解出来なくなる。

「何をした？ ……」

左目に血が混じる。顔を切り裂かれた、もしかすると、左目は潰されたかもしれない。背中が勢いよく、裂けている。

大量に出血している。

傷は結構、深い。

しかし、吹き出してくる血を利用する事にした。

フィア・ゾーンの身体から流れ出る血が、小さなネズミへと変わっていく。そして、そのネズミ達は、一斉にアンサーの体内へと向かって、内蔵を食い荒らしていく。

アンサーは全身をネズミによって、蝕まれていく。

びくん、びくん、と彼女の全身が動いた。

アンサーの血を摂取したネズミ達は、少しずつ膨れ上がりながら、爆弾のように獲物を探し回る。

フィア・ゾーンは哄笑する。

気付くと。

見えない死角となった左側から。

脇腹に重い衝撃を受けていた。

全身が吹き飛んでいく。腹を蹴られたのだ、とすぐに理解する。

フィア・ゾーンの周辺は、ネズミで防御している。近付けるわけではない。だが。

.....剣で切った斬撃や、別の場所で放った蹴りの衝撃を、瞬間移動させてきている？

彼は理解する。

こいつは、かなり強敵だ、と。.....。

こちらの戦略がまるで通じない。

木に全身を叩き付けられる。

何処かの骨がへし折れる音がした。

ネズミの群れが爆裂していく。

周囲に張り巡らせた、トラップが破壊されていく。

何らかの、瞬間移動による攻撃、というよりは。

何か、波のようなものを飛ばしているみたいだった。

.....音？

耳が痛い。音を飛ばしてきている奴がいる。

それも、少し遠くからだ。

人影が見えた。

森の少し、外にいる。

指先を広げて。波状のように。

鴉のような髪型をした男が、此方を伺っている。

.....敵は二人、か。.....。

しかし、あの位置なら。.....。

フィア・ゾーンは叫んだ。

「お前ら、よくも、……。だがなあ……！」

彼はアンサーの方を見る。

「やれ」

全身をぐちゃぐちゃにされた少女は、右手を動かす。

ぴんっ、と、何かが弾ける音と共に、彼女の攻撃のスイッチが入る音。

森全体に、ぽつり、ぽつり、と小さな火が灯る。

それを起点にして、一気にアンサーの能力によって、小さな炎が、火柱へと変わっていく。

アンサーの全身が炎によって、包まれていく。

フィア・ゾーンは、転がりながら、炎の中を這い出した。

瞬間移動の能力者にダメージが行ったかは、分からない。

だが、音を使っている男の身体が、炎によって包まれていた。

「アンサー。しばらく死ぬなよ？ お前の主人、ルルイエの敵は可能な限り、減らしておかなきゃならない。役割を果たすんだ」

首根っこをつかまれる。

そして、樹木に勢いよく全身を叩き付けられた。

そのまま、巨体が宙吊りにされる。

美しい顔を歪ませて。そいつの眼は、少し血走っていた。

「一応、聞いておいてやる。仲間を何とも思わないのか？ それとも、好きだったんだろう？ お前のような奴は、好きな女、タイプの女は、物扱いするのか？」

「……………、……馬鹿か？ 本望なんじゃねえのかあ？ ルルイエ様の役に立てたんだぜえ。その為に生まれたんだ。あいつ、やっぱり不安定だったからなあ。能力は俺が合理的に使ってやった。違うか？」

剣を喉下に突き付けられる。

「よく分かった。取り合えず、解除させろ。オレの仲間が死にそうだ」

「やれよ。俺の頸動脈を切れ、お前の全身に血液が掛かるな。分かっているよな？ この距離からならあ。お前を道連れに死ねるな？」

完全に本気で言っている眼をしていた。

だが。

炎の勢いが徐々に弱まっていく。

更に、空を見上げた。

赤かった筈の夕焼けが消えていき、夜の匂いが満ち始めていた。

アンサーの姿を見る。

全身が炭化している。

口元を少しだけ、動かしているが。……………。

やがて、それを止めた。

そして。

まるで、糸が切れたように。

灰のようになって、崩れていく。

何の為に、この世界に生まれてきたのか。

何が故に、この世に生まれてきたのか。

分からないまま。

少女は、消滅した。

……。もしかすると、彼女の可能性には、異なった未来が在ったのかもしれない。

……。

フィア・ゾーンは大きく舌打ちをした。

「おい、お前がやらない、ってんなら。……」

彼はポケットに隠し持っていたナイフを取り出す。

そして、自身の首へと向けて、自害を試みようとした。

ふっ、と全身が軽くなる。

そしてそのまま、地面に転がる。

拘束を解かれていた。

自殺に失敗した、大男は、周りを見渡す。

大きな布を広げて。

先ほどの死神のような敵は、もう一人の音使いの全身から火を消そうとしていた。

……あれ、助かるかなあ？

フィア・ゾーンは、そんな風に冷やかに見ていた。

そして。これから、どうしようかと考える。

……まあ、この場から逃げてみるか。あの二人を仕留めて置きたかったが。ルルイエは、あの宮殿で、そろそろ“儀式”に入っているだろうし。俺は俺で、どうするかな。ニアス辺りが頑張ってくれるといいが。……期待は出来ないよなあ？

フィア・ゾーンは取り落としたナイフを手首に当てる。

勢いよく、血液が吹き出す。

滝のように。

そして、巨体を動かす。

運が良い事に、先ほど折れたのは肩の骨だったみたいだ。足じゃない。まだまだ、走れる。左目が潰れていて、少しバランスを崩すが、どうにか逃げられそうだ。

もうサーキュレーションは無いが、血液から吹き出していくネズミを、周囲に張り巡らせながら、街の外へと向かった。

十

フィア・ゾーンは、エレベーターの中へと入る。

この街は、入る時には認証が必要だが、出る時は、何も問題無い。好きなように、出れる。

全身、傷だらけで負傷していた。

眼、肩のダメージが酷い。

エレベーターの外へと出る。

しばらくして、暗黒の地へと着いた。

オベリスクの場所。

ひとまず、逃走に成功した。

あの瞬間移動の能力者は、とうとう追ってこなかった。

やはり、彼を倒す事よりも、仲間の怪我の方を心配したらしい。

「左目どうするかな……」

彼は、周囲を見渡している。

……どこか、傷の治療を行える場所があればいいのだが。

「いや、君はもう何も見る事は無いよ？」

凜然とした声が聞こえた。

臓物の草原。

此処は、荒涼とした場所だ。

岩々の何処かに、誰かが潜んでいるのだろうか。

辺りを見回す。

空耳だったか。彼は息を吐く。

突然。

岩の陰に、一人の少年の姿があった。

そいつは、まるで、女の踊り子のような姿をしている。

くすくすっ、と笑い声を漏らす。

「聖なる海溝をよくもやってくれたよね？ サーカスが囂肩している場所なのに。それにさあ。……此処、抜け出してきたけど。僕の故郷なんだよねえ。一応」

彼は両手を振りかざす。

まるで、天空に呼び掛けるような振る舞い。

「というわけで、あいつを消して下さい。ねえ、ブレイズ？」

空から、怪鳥が翼を広げるような音が近付いてくる。

フィア・ゾーンは、気付けば、みっともなくも、腰を抜かしていた。

そいつは、巨大なドラゴンだった。

翼を広げて、フィア・ゾーンを見下ろしている。

「クロム・ハーツのブレスレットは本当にくれるんだな？ それから、ゴルチェの香水も」

「ああ、あげるよ。あげる、報酬として。だから、あのメタボリック・デブを焼き殺して下さい。沢山の亡くなった者達の追悼と、僕の為に」

「了解した」

フィア・ゾーンは引き攣りながらも、腕の包帯を取る。

「じゃあね、クソ野郎。ブレイズの『ブリジット』の能力で灰になれ」

そう言いながら、少年は跳躍した。

翼を広げたドラゴンの口腔が光る。

それは、まるで、ミサイルのような吐息だった。

炎などというものではない。数千度の高熱を発するそれは、生物ならば、一瞬で蒸発してしまうであろう、小さな太陽そのものだった。

「上等じゃねえかあ、ゴミ共があ。てめえらなんざに、負ける俺様じゃねえ。何が、ドラゴンだあ？ 俺には、神が付いている。格の違いつて奴を教えてやるよおおおおお」

しかし、口腔からその攻撃が放たれる数秒、隙が出来る事を即座に気付いて、フィア・ゾーンは行動していた。

手首の動脈をまた、切り開く。

アンシリーコートによって、作成されるネズミが、飛び掛かる。

少年の方に向かってだ。

ブレイズは、咄嗟に、少しだけ、ほんの少しだけ、照準を間違える。

その少年、エイジスまで巻き込まない為に、広範囲にまで広がる『ブリジット』による攻撃を、棒状にして、熱線を飛ばす予定だった。それが、フィア・ゾーンから少し、ズレる。

砲撃が放たれる。その高熱の攻撃を受けた地面は抉れるように、蒸発していく。

そして、それを全力で避けながら、その巨体から、在り得ない速度で、大男は、岩陰へと飛び退る。ちょうど、空から見ても陰になっている部分で、岩に邪魔されて、見えない。

「馬鹿！ 僕の事は気遣わなくていいから！」

そう言いながら、彼はアンシリーコートのネズミ達を両手だけで、捕まえては、ひき潰していく。

「もっと遠くに離れてる。俺の能力は虐殺、殲滅タイプだ。お前が近くにいたんじゃ、全力を発揮出来ない」

ブレイズはそのまま、フィア・ゾーンが向かった岩陰へと近付いていく。

彼は、背筋に寒気が走った。

見掛けの強大さとは違って、彼は少し、臆病で怖がりな部分が多かった。

「なあ、エイジス。あいつ、何やってんだよ？」

岩ごと、破壊して燃やし尽くしたい処だが、まだ近くにエイジスがいる為、思うように攻撃を撃てない。砲撃によって、岩の破片がエイジスに当たる可能性もある。

「だから、僕の事はいいから！」

エイジスは叫んでいた。

どすっ、と勢いよく、何かを破壊する音が聞こえる。

肉をひき潰すような音。

ざしゅっ、ざしゅっ、と音が続く。

その後、どうるるるるる、とエンジン音が聞こえた。

そして、猛スピードで、ジープが岩の中から姿を現す。

ブレイズとエイジスは、一瞬、時間が止まったかのように、呆けていた。

「えっ、岩の中に車を隠していたの？ ……」

「何なんだ？ あいつ？」

ブレイズはすぐに、気を取り直して、後を追う事にする。

鳥くらいの速さしかないが、十分に追い付ける筈だ。

猛スピードで走り続ける、ジープとの距離を次第に詰めていく。

距離を取れば、エイジスを気にせず、攻撃を放てる。

だが。……。

「何？ ……？」

ブレイズが口腔に、全力のブリジットの攻撃を放とうと、エネルギーを溜める。

しかし。ジープから、放たれた、ある物によって、攻撃を躊躇する。

彼が攻撃を放つよりも、早く、そいつらは彼の下へと到達するだろう。

それは、ラジコン・ジェット機だった。

プロペラが回りながら、背中に何匹もの白いネズミを乗せて、ブレイズの下へと向かってくる。それが、何機も。

ブレイズは思わず、攻撃の中に溜め込んだエネルギーを解除しそうになる。

そして、小さなジェット機を跳ね除けようと、翼をはためかせる。

ネズミが、彼の下へと飛び掛かろうとしていた。

その白い怪物達は、明らかに彼の皮膚の隙間や、眼球を狙っていた。そこから、侵入して、体内を食い破るつもりみだだった。

ブレイズは、地面へ向けて、ブリジットの攻撃を叩き込む。

高熱の爆発が巻き起こった。

瞬間、爆風が周囲を巻き込んでいく。

ブレイズは、自身の能力には強い耐性を持っている。全身に高熱のエネルギーを放射して。アンシリーコートからの攻撃から、身を守った。ネズミ達は一瞬にして、蒸発する。

だが。

ジープは、遠く離れた場所へと向かっていく。

ブレイズは戦慄していた。

底知れない、狡猾さと行動力を兼ね備えた敵。明らかに、ブレイズの方が肉体的にも能力的にも強いにも関わらず、敵の方は、それをひっくり返そうとしてくる。

彼は人間の持つ、精神力と悪意に戦慄していた。

「化け物が！」

思わず、そう吐き捨てていた。

十

ルルイエといるのは、本当に楽しかった。

洞窟の御殿にて、彼が作り出した黄金の調度品に囲まれながら、フィア・ゾーンは、この世の栄華なんて、簡単に作れてしまうんじゃないかと思った。



金銀財宝。宝石。芸術品の模造品。

フィア・ゾーンは、黄金の杯を手で弄くった後に壁に叩き付けたり、模造した絵画にペンキを投げ付けたり、絨毯に転がっては、それで鼻をかんだりした。

それらに囲まれながら、一体、人間ってのは、何で、こんなにくだらなものを欲するのか、と思った。こんなものに囲まれる事が何で、それほど重要なのだろうか？

権力なんてすぐに手に入る。権威なんてすぐに手の中だ。

余す事も無い、物欲。

こんなものの為に、人間は殺し合う。別に飢えているわけでもない癖に、虚栄の為に生きる。その人間のドス黒い欲望が、フィア・ゾーンが好きで堪らない。

欲しいものは、平気で奪う。

気に入らないものは、壊してしまえ。

そうやって、生きた人生。

それが正しかったんだと肯定出来る存在。

きっと、自分の中にも弱さがある。

誰かに肯定して欲しい、という弱さ。

依存。

崇拜したい、何か。

彼の中の膨れ上がった、“悪”の全てを認めてくれる存在。

それが、生きている事なんだと、実感する。

安心するのだ。

彼は彼を肯定してくれる大いなるものを探していた。

そいつの為なら、何だってするのだろう。

それが、彼の生きた証になるのだ、と。

轟音が続いている。

フィア・ゾーンは臙物の草原をジープで横切る。

彼の左腕は、今はもう彼の肉体に納まっていない。

刃物で骨ごと切断して、更に、切り取った腕をめった刺しのなます切りにして。血液を肉をぶち撒けた。

彼はどうにか左肩から先を布で止血して、右腕だけでジープを運転している。

明らかに、運転に適した状態では無いが、前を横切るネズミ達に先導させて、どうにかバランスを保ちながら、ジープを走らせていた。

あの飛竜も、追ってこない。

彼は逃げ延びた、という事になる。

「そうだ。ルルイエの洞窟へと戻ろう。あそこには、医療道具なども揃っていた筈だ」

彼は、ジープを走らせ続ける。

どんっ、と勢いよく、何かにぶつかって巨体が転倒し、ハンドルから手を離す。

彼の精神力は、確実に限界に近付いていた。

気付けば、ジープが横転していた。

エンジン音と車輪の回転を続けながら、ジープは横倒しになって、動き続けている。

「ああ、畜生。何だってんだ」

地面を見る。

獣の屍骸だ。ぼろぼろに食い荒らされて、ほぼ骨だけになっているのが数体。

見えない左目の位置にあったもの。

「ああ、やっぱり、この身体じゃ、何も巧く行きそうに無いかもなあ」

意識が混濁としている。

先ほど、飛竜を撃退する為に、大量の体液が必要だった為。腕一本を捨てて、それでネズミを作り続けた。作ったネズミは、方陣を描くように、彼の周囲を守護している。

今や、何千匹ほどもいるのだろうか。

誰が、襲ってこようが、もう関係が無い。更に、まだある、切り取った腕の残った血肉を使えば、まだまだ量産出来そうさ。

彼は哄笑する。

そう、もう何が襲ってきても怖くない。

ずっと、ずっと、今回のように勝ち続けよう。

ざわっり、と。近くで物音が鳴った。

ざっ、ざっ、と音が聞こえてくる。

草原にいる獣達の足音だ。彼の血の匂いを嗅ぎ付けて、現れたのだった。

そいつらは、猟犬やハイエナ、ライオンのような姿をした怪物達だった。

彼は、アンシリーコート of ネズミで迎撃しようとする。

だが。……。

意識が朦朧としていた。

血を失い過ぎた。

眩暈がする。巧く、ネズミ達を操れそうにない。

肉体的な痛みの限界はとうに過ぎてているが、精神力だけで意識を保っている。少し、休みたい。……。

「ああ、……肉、食いてえなあ……」

貧血だ。

獣達は、彼を吟味するように、辺りを回っている。

何匹かに、ネズミを向かわせる。そして、食い殺させる。

それが引き金となって。

獣達は、一斉に、フィア・ゾーンに向かって、飛び掛かってきた。

彼はネズミの群れで応戦する。

獣達の何体かを返り討ちにしていく。

だが。

眩暈で、足がもつれた。

地面に倒れる。

意識を失いそうになる。

気付くと、獣達が、彼の目前に迫っていた。

足の肉を抉られて、足から鮮血が吹き出していく。それも、ネズミに変えて、食った獣を返り討ちにした。今度は、右手の肉を食われる。それも……。

次々と猛攻は続いていく。

此処の獣達は、怯む、という事をしない。

何体かを、先に突撃させても、なお、執念のようにフィア・ゾーンへと襲っていく。

腹、頭、それぞれを負傷し続ける。

彼はいつの間にか、意識を失っていた。

べきゅりいべきり、ぐちゃ、くちゃ、くちゅ、くじゅ、ぐじゅお。

彼の肉体は食われ続ける。

そして、そのまま、脳が、心臓が機能する事を止めた。

大男の命は消えていく。

せっかく、何名もの能力者から逃げ延びたというのに。

彼は、此処で死ぬ。

最後に、彼は思った。

……ルルイエの奴、頑張っで欲しいなあ。俺の壊したかった、世界を壊してくれよ。

そして、彼は絶命した。

肉体は、獣達に食われ続ける。肉が見え、内臓が見え、骨が見え、脳漿が啜られ。

彼の肉体は、獣達の血肉へと変わっていく。

アンシリーコート of ネズミは、崩れるように消滅していった。

私は何処に行くのだろうか？

レイアは思う。

レイアは思考する。

決して、この世界には屈してはいけないと。

そう考えている。

鏡ばかりの世界。

彼女は暗黒の空間に浮かんでおり、沢山の鏡もまた、無限のように浮かんでいた。

何処を向いても鏡だ。自分の顔ばかりが映っている。

「自分が好きか。どうなのかしら？ みんなに認められたい、崇拝されたい自分が好きなのか。それとも、独りである自分が好きなのか」

彼女は不機嫌そうに、それらを眺めていた。

「大体、孤独に酔っている人間ってのは。自分自身が孤独だという事がもうどうしようもなく好きなのよ。誰にも理解されないだとか、分かってくれる相手がないだとか。笑ってしまうわ、こいつは、それが言いたいのかしら？」

一人、呟く。

誰にも、聞こえない。

「私はどうなのかしら？ まあ、どうでもいいか」

きっと、未来に在るものは。

永劫の孤独。

誰にも触れられず。

何にも語られず。

何にも見られず。

誰にも依存出来なく。どんな物語も、どんな偉人や歴史をも信じられない人間は、不幸なのかもしれない。誰も、愛さず、生きていく、という歩み。

“処女”だから。絶対的に、誰にも届かない、“処女性”。

……それでも、彼女は自分を幸福だと言う。

それで、いいと考えている。確かな、決意。

生きる為の鎖を投げ捨てた。

決して、何者にも支配されないように、と願った少女は。

果たして、幸福なのか。他人は考えるのだろうか。

しかし、むしろ、そんな風に他人がどう思うか、など。

本当に、どうでもいい。

あらゆる、他人への依存から遠ざかってしまった少女。

彼女は幸福なのだろうか。分からない。

それでも、確かな決意はある。

たとえば、世界を創造した神が存在したとして、その神が、その世界に対して、何の干渉も出来ずに、何かからも認知されないとするのならば。だが、それでもそいつは、神なのだろう。

更なる、鎖、壁、檻が壊れていく、という感覚。

何処に、いくのか。

認識される、という“非処女”から。

認識されない、という“処女”へと変わる。

一体、認識されない、という事。“処女性”の向こう側は、何処に行くのだろうか……？

覚悟というよりも、憧憬のような。

理解など求めない。

おそらくは、きっとそれが、彼女が相棒などから、“狂気”と言われる所以。

「まあ、そろそろ戻るか。他人の認識の下へ」

彼女はクスリ、と笑った。

彼女は鏡の一つに触れる。

そして、自分の顔が映っている部分。

それを、拳で殴り付ける。

瞬間、鏡の全てが砕け散っていく。

ニアスの作り出した、モーザ・ドゥーグの攻撃から抜け出す。

気付くと、フェンリルのいる場所にいた。

此処は、“何処でも無い場所”だった。

フェンリルの能力が作り出す、何処でも無い世界。空間。

彼は少し疲れたような顔をしている。

何か、あったのだろう。声を掛ける事はしない。

ふと、思う。

自分は彼すらも、愛してはいないのだと……。

恋愛感情どころか、友愛すらも無いのではないか。……。

いつか、彼の下からも離れるのだろう。

彼女は、自分自身が、彼の能力の一部でしかないのではないか、という事実に対して、不愉快に思っている。彼を媒体として、彼に依存して生きている。

しかし、それは構造的な事実であって。彼女の精神には何ら、関係が無い。

世界の輪、と仮に呼ぼう。

人間が他人に依存しなければならない、構造。

たとえば、家族、たとえば、恋人、たとえば、友人。そして、世界を生きる上では、建造物、食物、衣服、ありとあらゆるもの、他人が作り出したものの中で生きて、他人と共に生きなければならないという、レイアが嫌悪して止まない。どうしようもない、世界を拘束している鎖。そこから、抜け出していった先に、一体、何があるのだろうか？

それでもなお、それらの鎖を断ち切る事を望んで。

ただ……。

コードは病院に運んだ。

容態が拙い。

全身に、簡易的に包帯を巻いている。

顔から、足首に至るまで包帯が巻かれ、皮膚の表面には軟膏が塗られている。時折、彼は小さく、呼吸している。此処には、やはりまともな設備が無い。文明が明らかに遅れている。

しかも、街がめちゃくちゃにされたせいで、熱射病で倒れた人間なども、大量に収容されている。

街の診療所には、沢山の者達が収容されていた。

医師達は混乱しながら、どうにか、命に対する使命だけで動いている。本当は、彼らも絶望しているのだ。この街の惨状に関して。

このまま、死ぬかもしれない。それは彼、次第だ。

残念ながら、彼の火傷を治癒出来る手段が無い。特に、体力の消耗が酷く、皮膚だけでなく、筋肉や神経も焼かれている為、治療が成功したとしても、まともな肉体に戻れるかどうか。……

。

そして。

ルルイエ。

一部の者達が、少しずつ、彼を信奉し始める気配があった。

もうどうしようもなく、縋るものがない。

サタンに殺害されてしまった、神。

そのような状態なのだ。

明らかに、この街はもう駄目だった。

ドラッグの流通ルートは今、どうなっているのだろうか？ それは少し、気がかりだ。そう、あの巨体の男を逃してしまった。彼がまた次の手を打ってきたら、どうするのだろうか。

あいつは、何をしてくるのか分からない。それが、本当に怖い。

フェンリルは頭の中で、状況を整理していた。

まず、何よりも、あのルルイエとかいう男を倒さなければならない。

レイアは、やはり、気まぐれそうに、病室の隅で窓から見える景色を眺めていた。

彼女は、まだ、ルルイエとかに興味がある筈だ。

しかし、だ。

彼女いわく、あの優男の側近である女。

あれに、敗北してしまったらしい。

それに対して、再戦するつもりは無いという。

「負けて悔しく無いか？」

と問うと。

「ああ、仕方無いわ。それでも、彼女にもう興味が無いから」

と、そっけなく返された。

更に。

「私の“最強”。求めている強さは、勝ち負けじゃないから」

と、分けの分からない事を言っていた。

分からないな、と答えると。分からなくていい、と返された。

美少女顔の青年は、少し、疲れて壁にもたれる。

さて、どうしたものだろう。

取り合えず、自分、一人で全てを終わらせるしかないのだろうか。

元々は、コードが関わった“物語”、あるいは“宿命”のようなものなのだろうが。今や、彼自身の為すべき事に変わっている。

生きる上で、戦わなければならない事。

未だ、それは分からないが。

彼は瓦礫となった、今にも崩壊しそうにも見える宮殿を眺望する。

十

ルアージュは、臍物の草原を移動していた。

耐え切れなくなったからだ。一人でいる事に。

乗り物となるものを、探した。

自分自身の肉体を、何か別の生物に変化させて移動する事も考えたが、止めにした。

確実に短時間で行ける乗り物を探した方がいい。……。

そういうわけで。

“暗黒の街路”にて、つい、何日か前にも、聖なる海溝に向かって、“馬車”をチャーターした者達がいたと聞く。

ルアージュは、同じく、街路にて、乗り物を探した。

首の無い御者がひく馬車は、今、全て出払っていると聞いた。

仕方なく、多少、金が掛かるが、彼女はフィア・ゾーンから渡されている財布から、紙幣をつかんで、少々、高い乗り物を借りる事にした。

それは、大きな骸骨の鳥だった。

アラビアン・ナイトの物語に出てくる、ロック鳥くらいの大きさはある骸骨の鳥だ。

ルアージュは、それに乗って、海溝へと向かう。

やはり、早い。下手に変身能力で、自分が鳥になったり、豹やチーターになって移動するよりも、よっぽど効率が良かった。

それにしても、嫌な予感がする。

どうしようもない、不安。

ケタケタと、瓶詰めの子いつも笑っている。

「なあ、なあ、ルアーージュ？ お前の姉さんさ。お前の事、大嫌いなんじゃねえの？ 本当は。お前の話聞いていると、私はそう思うんだよ。お前、本当はそれを“見ないように”しているんじゃないの？」

「煩い」

「コンプレックスって奴なのかなあ？ 双子なんだろう？ だから、実際、お前の姉貴はお前が嫌いなんだよ、実は。本当は煙たがられているのに、何で気付かないんだろうなあ？」

「……………私と、姉さんは。実の姉妹じゃないのよ、今でこそ、同じ顔だけど。それは、一度、所謂、“生まれ変わった”から……」

しまった、と彼女は思った。

この瓶詰めの中身に、また、弱みを言ってしまった。

こいつは、頭がおかしい。

どんどん、蝕まれていきそうだ。早く、手放してしまいたい。

「生まれ変わった……？」

血走るとような両眼を瞬きさせながら、そいつは訊ねた。

「ええ、それがルルイエ様の能力。私達は一度、死んだの。あの洞窟の中で。でも、願ったのよ。この世界を壊す何かと、新しい可能性を。そしたら、本来はこの世界に存在出来なかった世界から、ルルイエ様がやってきた。私達も、本来は在り得なかった存在へと変質して、生まれ変わった」

「へえ……？」

瓶詰めの笑いが止まる。

臍物の草原の中間地点くらいだろうか。

遠くで、爆音がする。

数キロ先に、何か、火の玉のようなものが生まれていた。

「何？ あれ？」

ルアーージュは思わず、呟く。

骸骨の鳥の速度は速かった。

気付けば、あっという間に、聖なる海溝の入り口へと辿り着く。

ルアーージュは瓶詰めを持って、そこに降り立った。

並んでいる、岩々と、大きなオベリスク。

彼女は、オベリスクの方へと向かう。

一つの門があった。

「確か、この先なのよね？」

門の構造を調べる。どうやら、何か鍵のようなものが無いと入れないらしい。

ルアーージュは舌打ちする。

「フィア・ゾーン、私が来る事を考えてなかったの？ ルルイエ様は此処を通過したんでしょう？」

何か、嘲笑とも諦観とも取れるような声が聞こえた。



「君は奴らの一味なのかい？」

岩陰から、そいつは現れた。

少年だった。

まだ、二十歳にも満たないように見える。

彼は薄桃色の、踊り子のような姿をしていた。普段はメイクをしているのか、肌に化粧の痕が見える。それを、きちんと落とさずに、急いでこちらに駆け付けたかのような。

華奢な身体だ。一見すると、女にも見える。

「あなたは？ ……」

「君達、テロリストの一味を全滅させようと思ってさあ。でも、ブレイズが折れちゃったから。また、今度。“デス・ウィング”は管轄外だとか言って、動いてくれないしさあ。悔しいけれど、僕に君達を倒す手段が無いんだよ。本当、嫌になっちゃうなあ、自分が弱いつてのは」

そう言いながら、少年は酷く疲れたような顔をしていた。

「座長に申し訳ないよねえ。せっかく、公演の為に頑張ったのにさあ」

「テロリスト？ ブレイズ？」

「ああ、……もしかして、君達の間で、情報が巧く、行き渡ってないとか？ 此処から、先には、聖なる海溝という街があるんだけど。住民が薬物漬けで、それを管理していたのが、此処の教皇様。僕は、その構造が嫌で、この街から逃げ出してきたんだけどね。でもまあ、何だろう。やっぱり、故郷が破壊されるってのは、気持ちが良くないからさあ」

「……………わたしと戦う気なの？」

「……だから、そうしたいんだけど、無理なんだって。それに、一番の原因を作った奴は、相応の結末を辿ったし、もういいかなあって」

そう言いながら、少年はルアーージュに、何かを放り投げた。

ぐしゃぐしゃに潰れて、食い荒らされて、孔だらけだったが。

確かに、それは、フィア・ゾーンの頭部だった。

「ブレイズが拾ってきたんだよ。確かに、こいつ死んだだろっ、って。だから、手間賃も含めて、クロム・ハーツとゴルチェ寄越せよ、だってさ。はあ……、身勝手に嫌になるよね。贖物贈ろうかなあ？ でも、あいつ根は臆病なのに、怒らせると怖いんだよなあ……どうしたものだろう？」

ルアーージュは、しばらくの間、時間が止まったかのように凍り付いていたが。

ふと、訊ねた。

「あなた達が、殺したの……？」

「まさか……。こっちの負けだよ。でも、この舞台が悪かった。劇の幕の引き方だね。こんな危険な場所で、勇んだんじゃ。たとえ、勝者だって命を落とすよねえ。そうそう、こいつ、本当に強かったよ。……だから、ブレイズが僕に、ごねてるの。もう少しで、こっちは死ぬ処だったぞ、と。ドーンのハンターじゃないんだから、命掛けで標的なんて狙えないんだってさ。弱い者イジメしか出来ない奴だよなあ。ランキングには、絶対に乗りたくないって、秩序の破壊とかしたがる奴だし」

ふと。ルアージュは気付いた。

少年は、布で隠しているが、脇腹を強く押さえているみたいだった。

「ブレイズとかいう奴は、戻ってこないの？」

「……僕が悪い。口喧嘩になっちゃって。……、でも、何とか気付かれなかったよ。馬鹿だって、思うんだ。何で、僕はいつもこうなんだろうって。だから、実は君が来たのは、とっても幸運で。君にとっても、僕がいたのは、幸運じゃないかなあ？」

少年は口元を押さえる。

そして、押さえている布の一枚を落とした。

服は黒ずむように、染まっている。

気付けば、少年の顔が蒼白だ。

「ネズミに噛まれた。ブレイズが気に掛けてくれなかったら、多分、他の部位も……。彼、怒らせちゃったから、戻ってこないかも……。このオベリスクの下は酷い事になっているだろうから、まともに治療出来ないだろうなって……。でも、この草原、血の匂いで獣が集まってくるし。普段の僕の体力と脚力なら、結構、切り抜ける自信があるんだけど。……。心配して、戻ってきても。数時間後くらいだろうなあ。腹立ちが冷めるまで。それまで、持つのかなあ？ 僕は……」

ルアージュは無言だ。

彼が何を言いたいのか、分かった。

「その、止まっている骸骨の鳥に乗せてくれない？ 代わりに、僕は、“門”を開いて上げる。多分、君がこの下に行く事は目的のうちに入っていなかったから、手段を教えていなかったんじゃないかな？」

彼は溜まらず、咽ぶ。

血の痕が、ぽつりぽつりと、地面を染める。

「いいわ」

ルアージュは言った。

取引は成立する。

少年はエイジスと名乗った。彼は、門の前に来て、右手を触れる。

すると、門が開いた。

何でも、住民の指紋が無いと、入れないらしい。

「じゃあ、僕は鳥に乗るよ。そろそろ、意識がヤバイ。……生きていたら、また、会えるかもね。お互いに」

「わたしを、向かわせていいの？」

「いいよ。……だって、君。本当は止めて欲しいんじゃないの？」

話はそれで終わった。

エイジスという名の少年は、覚束ない足取りで、巨大な骸骨鳥に乗ると、そのままぐったりと倒れ込む。

あれは、死ぬかもしれないなあ、と彼女は思った。明らかに、押さえていた部位が人体の急

所だ。出血も酷い。

ルアージュは、エレベーターの中へと入る。

広い部屋だった。

瓶詰めを抱えながら、下る。

十

ニアスは宮殿の中で、停止していた。

彼女は、モーザ・ドゥーグを受けた者達を解き放って、宮殿の外へと向かわせた。

……………。

もう、自分の能力を使うだけの意志が無い。

心が折れてしまった。

大体、初めからそうだった。

自分には、他人を傷付ける素質が無いのだと。

最上階では、ルルイエが“儀式”を始めている。

それから。

フィア・ゾーンとアンサー。

あの二人は、どうなったのだろうか？

神の怒りを証明するかのように、アンサーの能力によって、空が赤くなり、その後、酷い日光が続き。そして、それも終わり。今はもう、深夜だ。

民間兵達は、もう、この宮殿に乗り込んでこない。

それから、あの光と闇の少女以来、敵の襲撃もない。

今、時間にして、深夜三時くらいだろうか？

あれから、一体、何時間、経過している？

もう、そろそろ、あの巨体の男が戻ってきても、いい頃の筈だ。哄笑と共に、やってくるに違いない。しかし、彼は現れない。

“儀式”の部屋に入ろうか、彼女はそう思った。

今、どうすればいいのか分からない。

階段を昇って、儀式の部屋に入る。

ニアスは、ぞくりっ、とする。

そこには、何名もの捕らえた人間が柱に縛り付けられている。

彼らは、口々に怨嗟や呻き声を上げている。

そして。

彼らの隣には、土から作った人間を模した人形が置かれていた。

中央には、ルルイエが腰を下ろして、瞑想に入っている。

『ニユクスの母体』。

その能力が、おそらく、何なのか。

ニアスは、聞かされている。

人間と、人間で無いもの。あるいは。

生物と非生物。

それらは、異なった規範の下、この世界に存在しているのだが。

それは、そういった可能性の上で、進化したに過ぎない。

もし、人間と人間で無いものの、可能性が入れ替わったとするならば？

かつて、人間に進化したものと、人間に進化出来なかったものの、可能性が入れ替わったとするのならば？

人間と人形を入れ替える。

それが、ニュクス之母体の能力。

ルルイエの……彼らの目的。

それは、この聖なる海溝という場所を使って、一つの実験場にしようという試み。

捕らえられた人間達を見る。

彼らの皮膚などが、次第に変化していつている。

かさかさ乾き、泥のようなものへと変わっていく。

ニアスは、心と頭を過ぎる。

彼女は这个世界を憎んでいた。全部、壊れてしまえばいい、と。

彼女を認めなかった世界。何もかも、認めてくれなかった世界。

今、その目的が、彼女の願望が叶えられる。……。

「分からない」

ふと、彼女は呟いていた。

「私が憎かったのは何だろう？ この世界？ それとも、両親？ あるいは、……妹？」

ふと、彼女は、縛り付けられた住民達の顔を見る。

彼らはニアスを、ルルイエを憎んでいた。

殺したい、そう思っているのだろう。

憎しみ。憎しみの増大。

そう、自分が傷付けられる世界など、壊れてしまえばいい。それは、誰にでもある、当たり前前の、感情でしかなく。……。

ニアスは眩暈で倒れそうになった。

どうしようもなく、平衡感覚を失いそうな。

妹……。

彼女と一緒に、此処まで来た。

けれども、多分。

いつだって、二人共、違う道を歩んできたのだ。

本当の妹ではない、彼女。

十五になる前に、殺してやろうと思った彼女。……。

この世に生まれ落ちた事を後悔させてやろうと。

ずっと、思って。憎まずにはいられないだろう、と。

十四の時だった。十三の時だったのかもしれない。

彼女を隣近所に住んでいる、お兄さん。

妹は、そのお兄さんに恋をしていた。

優しくかった、お兄さん、だけれども、ニアスは彼が嫌いだった。

いつも、いつも、部屋の中で、ぶつぶつとノイローゼみたいに独り言を言っているし。そんな彼にも、妹は優しくかった。さり気なく聞いてみると、孤児院のいた頃の、大好きだった先生に、何処か面影が似ているのだと言う。

孤児院には、色々な子達がいた、と彼女は話した。屈託の無い笑みで。

もっと、仲良くなりなよ、とニアスは彼女に告げた。投げやり気味に。

本当は、嫌われればいいのに、とかそんな風に思いながら。

窓から覗く、彼の部屋は沢山の物が散乱していた。何かの病気なんだろうなあ、とニアスは薄々、感付いていた。

妹は、イタズラ心を起こして、お兄さんの家に入ろう、と言った。

ニアスは、そうすればいいと、笑顔で、でも心の中では冷え切って、言った。

その日の夕方、妹は泣いて帰った。

お兄さんに、怖い事、されそうになった、と言って。

ニアスは心の底から、その事に対して、歓喜した。

やがて、その事が付近に広まった。

ある事無い事、尾緒が付いて、妹と、そのお兄さんの話が広まっていった。

妹が傷付く顔が沢山、見たかった。実際、両親の方にも噂が耳に入って、嫌そうな顔をしていた。少しずつ、妹に対する両親からの嫌悪の目が強まっていた。

それから、二週間くらい経ったのだろうか。

近所の、そのお兄さんは、部屋の中で首を吊って死んでいた。……。

彼の家の中には、沢山の石や物が投げ付けられていたらしい。

その事実が、更に、妹を苦しめた。

……………、それから、ニアスが十五歳を少し過ぎた頃。

彼女は、ついに病に倒れた。

身体の弱さの為、学校に行けない日々が続いていた。妹は学校に通い続けていた。……妹には、余り友達がいなかったらしい。よく、物を隠されたり、悪い噂を立てられたりしていたとか。病の床で、両親は、とうとう覚悟を決めたような顔をしていた。

ニアスに注いでいた愛情の全てを、これからは妹の方に注ごうと。

両親のうち、父親の方が。何処か、妹に対する愛着が強いように見えた。

そういえば、血が繋がっていないんだよなあ、と唐突に言ったりする。

情緒がとても、不安定だった。実の娘が、今にも死にそうなのに。

ニアスは強い嫉妬に焼かれた。

父親の中で生じた、この感情が一体、何なのか、その頃の彼女には分からなかった。

今、思うと。とても……汚らしい。

医者にも見放されながら。彼女はこの世界を呪い続けた。

そう、彼女は物心付いた頃から、この世界を呪う事を生きる糧にしていた。もう、どうしようもない。宿命のような。

たった、十五の命。短命だ。

これから、何十年も生きていける者達が憎くて、憎くて仕方が無かった。

思えば、いつも寝台の上ばかりの人生。

夢の中ばかりにいる人生。どんどん、他の同い年の人間共と、感性がズレていく。

みんな、将来の夢だとか、目標だとか、そんなものを打ち立てて、生きていく。けれども、ニアスには、その未来が無い。何も無い。暗闇。

何で、ここに生まれてきたんだろう、ふと思った。

病床の中で、ある日、妹はニアスの手を握り締めた。

何だか、冷たいなあ。と思った、やはり屈託の無い笑顔をしていた。

……今日。教師に狭い倉庫の中に閉じ込められて、必死で逃げてきたんだ。

妹はそう言った。

そして。

もう、学校には行けない、そう告げた。

生命の温もり。温かい。

彼女の痛みが伝わってくる、けれども。

ニアスは彼女を、憎んだ。この手を振り解こうと思った。

分かっている。妹は、美少女過ぎた。そして脆く、みんなの道具にされやすいような。そんな。弱弱しさがあった。

……今度、生まれ変わったら、本当の姉妹だと良いなあ。彼女は、そう言う。それから、同じ顔だといいね、そう言う。

ニアスは憎しみで、全身を焼かれそうになる。

妹が、彼女の、この暗い、真っ黒な感情に気付いていない事に。

それでも、妹は手を繋ぎ続けた。まるで、冥府へと旅立とうとする姉を、現世に繋ぎ止めるように。

それから、数日。

ニアスは死の境界から這い上がって、徐々に回復へと向かっていった。

妹は微笑んでいた。

その数ヵ月後、今度は父親が病気に倒れた。

そして、あっけなく、死んでしまった。……。

そして、母親。

ニアスが十七の時。

完全に、母親と妹との関係は悪化していて。

父親の妹に対する、感情に、母親が気付いていて。

お前は、呪われている。と母親が妹に言って。

.....

その光景を、確かにニアスは覚えている。

妹は純真無垢、そう見ていた。そう見ていたのだけれども。

.....妹が、母親を刺すシーン。

それが、鮮明だ。真っ赤に塗れて、そこに立っている少女。

気付けば、ニアスは妹を庇っていた。血を拭き取って、家の中にある財産を持ち出して。それから。.....

.....、瞬間。

現実を引き戻される、白昼夢のようなそれ。いや、今は深夜。

寝ていたのか、と思ったが、どうやら、今もなお、ルルイエの儀式によって、別のものへと変えられようとしている者達を見ていた。

彼らは男ばかりだったが、中には女も混じっていた。

別のものに変質しようとしている、人間。

ニアスは、ふいに、瞑想を続けているルルイエに言った。

まるで、独り言のように。

「ルルイエ様。あたし、人を殺した事が無いんですよ。モーザ・ドゥーグで自殺に追い込んだり.....、間接的に殺した事はあるんですけど。だから、フィア・ゾーンに言われた時、怖かったんです。自分はいつも、妹に人殺しをさせていたんだって、思い出して。この前の、屋敷の時もそう、刃物とかで相手を殺すのは、いつも妹の役割.....」

ルルイエは、微動だにしないが、どうやら彼女の話の聞いているみたいだった。

「ほら、人間って爆弾とか、戦車とか毒ガスとかで殺すよりも。銃で殺す方が辛い、刃物で殺す方が更に辛い、じゃあ、拳で引きちぎったりして殺したらどうなるんだろう、って。.....」

儀式は続いている。

今もなお、縛られた者達は、徐々に人間を止めていっている。

「あたしは、何で、こんなに怖いんだろうなあ。.....色々なものが.....」

「分からないな、死ぬ時はどうだったんだ？」

男は眼を閉じたまま、訊ねた。

ニアスは考える。

そして、首を横に振った。

洞窟の中。

二人で。

あの時、二人共、手を握り締めていたっけ？ どうだったっけ？

本当の妹になりたかったのは、ルアージュの方？ それとも、.....

儀式は続いていく、きっと、人間達にとって悲劇そのものだ。

それとも、ある意味で言えば、希望なのだろうか？ 分からない。

列車の中で、ルアーージュは揺られている。

どうやら、瓶詰めも眠っているみたいだった。

今は、他人に見つかったら面倒なので、黒い布で覆い隠している。

途中で、何度も捨ててしまおうかと思ったのだが、気付いた。

やはり、一人では不安なのだ。だから、話し相手が欲しかったのだ、と。

この街は、真夜中でも、列車が動いてくれたので、助かっている。

こいつは、頻繁に呪いの言葉を吐いていたが、今は何だか話し相手がなくて、とても不安だ

。

此処を支配する、といった話だったから、住民達の様子を見て、此処の王様がいるであろう場所を目指している。

彼女は、眠気でうとうとと、意識を失い掛ける。

ふと。

列車の中に、誰かが入り込んでくる。

いつの間にいたのか分からない。列車も止まった気配が無かった。

「お前は、何でこんな処にいるんだ？」

誰かの声を聞いて、眠気が覚める。

それは、寒気がするような目付きをした美少女だった。

白と黒のゴシック・ロリィタ・ファッション。

金と銀が混合された長い髪。

「.....あなた、誰？」

そいつは、少し考えているみたいだった。

「もしかして、お前は妹の方か？ 情報だけは聞いているけど」

ルアーージュは、息を飲む。

「困ったな。オレはどうすればいいかな。なあ、あの太って大きな男、知らないか？ オレはもう、そいつさえ、殺せればいいんだ。お前らの目的を打ち砕くかどうか、判断に困っている。でも、レイアが一応、あのルルイエとかいう男に興味があるらしいが。その為に、一応、行動しておくかな、と」

迷っているようでもあり。

何の迷いが無いようにも、聞こえる、奇妙な言い方だった。

「太って大きな男？ もしかして、フィア・ゾーンの事？」

「ああ、そういう名前だっけ。そうそう、フィア・ゾーン。そいつ、何処にいる？」

「.....彼なら、死んだわ」

その長い髪の美少女は、そうか、と頷いた。

疑う様子も無い。

ごとごと、と列車が動いていく。



何だか、先ほどまで、殺気立っていたそいつは、一気に、冷め切ったように唸った。

思い詰めていたものを放り投げて、軽くなったような。

「また、人殺しに為り損ねた」

そう、小さく呟く。

今の時間だと、列車は余り停止しない。

沈黙。

透き通るような、寒気のする、彼女は口を開く。

「このまま、宮殿まで向かうけれど、君は？」

「わたしは、どうしよう。ねえ、ちょっと聞いていいかな？ 姉さんと、そのアンサーちゃん、知らない？ どうなったの？」

「アンサーか。あの赤い少女は死んだ。君の姉の方は分からない、多分、まだ宮殿にいる」

「……そう」

再び、沈黙。

不思議な空間だった。

ごとごとと、列車が動き続ける。

溜まらず、ルアーージュは言った。

「戦うべきなのかしら？ わたし達、そのあなたは、多分、ルルイエ様の敵で。姉さんの敵で。……」

「どっちでも」

無然と答えられた。

数十分後。

宮殿の前に辿り着く。

二人共、列車を降りた。

「じゃあ、あの中で出会ったら、敵だから」

そう言って、そいつは宮殿の中へと入っていく。

ルアーージュは立ち止まっていた。

もう何年前になるのだろうか。

こういう風に夜風を楽しんだのは。

ニアスは、宮殿に流れ込んでくる風に当たっている。

夜が明ける頃には、この街が変わる。

この宮殿を起点として、ルルイエの能力『ニュクス之母体』が広がり続ける。

もう、人間の形を止めている者達も、何名かいる。

変化が続いていく。

それは、人間がこれまで進化の中で構築してきた遺伝子情報を、全て書き換えて。在り得た世界の規範を破壊して、在り得なかった世界の規範に塗り替えていく。

神の所業、そのもの。

「お前も巻き込まれる、離れろ」

ルルイエはそう言った。

いよいよ、儀式は佳境に入るのだ。

これから、爆発的に広がり続ける。

人間達の隣に置いてある、泥や砂、それから、死んだ人間の肉や骨で作り上げた泥人形達が、わさわさと蠢き始めていた。

ニアスは、言われた通り、宮殿を降りる事にした。

最上階では、人とも獣とも思えない、不協和音を奏でる呻き声が漏れ出していく。それを放っているのは、かつて人間であった者の方なのか、それとも泥人形の方なのか。……。

階段をこつりこつり、と手持ちのランプに火を灯して下りていった。

足元が覚束ない、月光が差し込まない場所が多かった。

今頃、他の仲間達はどうしているのだろうか。そんな事を考える。

ニアスは、こつりこつり、と足音を響かせている。

「無用心だな」

ふっ、と不気味な声が聞こえてきた。

そいつは、断罪の女神ネメシスそのものののように、そこに立っていた。

白と黒のドレス。

真っ白な顔に、腰元まで伸びた輝く髪。

「お前らは、一体、何をやっているのかな？」

ニアスは黙る。

そして、全身が震えている事に気付いた。

もう、戦えない。分かっている。

「コードが死んだ」

その声は、戦慄する程の怒りに打ち震えていた。

その静謐な感情は、彼女の全身を刃のように貫くものだった。

.....コードの意識は朦朧としていた。

少しずつ、肉体の機能が失われていくのが分かる。

ああ、助からないんだろなあ、と自身を客観的に見ていた。

いつからだろうか、真っ白な世界にいた。

霧の中のような世界。ぼんやりとしている。

何処か遠くで、川のせせらぎのようなものも聞こえてきた。

そこには、男が一人、佇んでいる。

「もうじき、お前の世界に行くよ。俺はでも、教えてくれ」

爬虫類のような顔立ちの男は、首を傾げた。

「ほう、何を知りたいんだ？ 俺に何を求めている？」

「俺はどうすれば、罪を償えたのだろうか.....？」

男は笑った。

それは、明確な嘲笑い。

「罪の償い？ その事に対して、お前はいつも俺に訊ねていなかったか？ そして、俺の答えはこうだ。罪なんてあるのか？ と。何度も、何度も、答えを出した筈だ。それを反復して何の意味がある。問題は、罪とかいうものを、お前が神のように崇めている、って事じゃないのか？  
そして、お前は何をやろうとも、お前が意識の中で作り出した、神からは逃れられないんじゃないのか？」

相変わらずの、口調。何も、変わっていない。

コードは溜め息を吐く。

「なあ、せめて、今際なんだから。もっと、歓迎してくれてもいいじゃないか。それから、もっと、優しく俺に教えてくれたって。本当はお前は何か、つかんでいるんだろ？」

また、鼻で笑われる。

「馬鹿を言うな。俺は何にも至っていない。ただ、人間に対して意味を見出せなかつただけなんだろう。人間と他のもののが、等価値に見えた。ひょっとすると、自分自身の命もかもな、それでも、俺は愛する者がいたし、恋だってしたような気もするな。友情もあった。大切な仲間も。でも、そいつらが死んでもいいんじゃないか、って思った。でも、虚無ばかりだったわけじゃない。俺は情熱を持って生きていたと思う。野心さえもあった。驚く事にな。権力を手にしたいとかも思った。自分でも不可思議な事だ」

「そうなのか？」

「ああ。冷めてしまったけどな。しかし、奇妙だよな、この世界というものは、沢山の死人の上に成り立っている。俺達はそいつらの血の海の中に生きてきたわけだ。豚や牛、鳥や魚。それから、まあ、人間の歴史なんざ、搾取と強奪の歴史だよな。豊かな国と貧しい国があつて。豊かな国は豊かな国で、みんな、のし上がって、他人を破滅させたり、死へと追いやつてでも、更な

る豊かさを求めようとする。もし、そういったルールを踏み躪れたら、どんなに気持ちよかったらうか。俺はそうも思った。正義とか、そういったものに憧れる事もあった、自分でも分からないな。沢山、理由も無く人を殺したけれども、そういう風に考えてしまう部分もあったんだ。なあ、コード。俺は太陽が好きだ。生い茂る緑の繁茂も。湖畔のサファイアのような景観も。砂塵のゴールドも。雨粒と水溜りも、それに寄り添うように現れる虹も。夕焼けの灼熱も。朝焼けの沈黙も。世界は美しいって思う。肉食動物も、草食動物も、昆虫も、草花も、微生物でさえも」

「でも、人間は嫌いなのか？」

「分からんな。ただ、人間はまだ檻の中だ。自分達で作り上げた檻の中にいる。きっと、他の進化の仕方があったのかもしれない。きっと、別のものになれた筈なのに、人間は人間らしさとかいう檻の中に、閉じてんだ」

彼は言葉を紡ぎ続ける。

流れるように、饒舌に。

そして。

確かに、それらの全てはコードの記憶の中にいる暴君の発した言葉達だった。

コードは、彼の言葉を自身の中から、掘り起こしている。

檻か。そういったものによって、自分を閉ざしていたのは分かる。

「ルルイエとかいう奴は何をしようとしているんだろうな」

「……お前はそれを見る事は出来ない。違うか？ 諦めろ」

「そうだな。……でも、彼は善なのだろうか？ 悪なのだろうか？ それは知りたかったかな」

「お前にもう、その権利は無い。諦めろ」

暴君は、そっけなく言った。

「ははっ。本当に、俺の人生って下らないな。何にも辿り着けやしなかったじゃないか」

「そうだな。じゃあ、こう考えろ。お前は、フェンリルにルルイエと会わせる為に生きた。これで、どうだ？」

「……本当に、情け容赦無い奴だ。冷たいよな、いつもいつも。俺の生きた意味、もう少し、考えてくれたっていいじゃねえか」

と、言いながら、ふと彼は思う。

「なんだよ、流転とか輪廻の話か？ 物事は結果と結果を紡いでいく。そういう風に、線と線を結んで、万物の歴史は築かれていく。そういう事かよ？ それこそ、俺の名前である、“コード”のように、線と線で物事ってのは紡がれている。ああ、分かったよ」

彼は苦笑する。

「俺はフェンリルの為に、生きた。ずっと贖罪感に悩まされてきたのも、その答えを見つける為の目的を探し続けたのも。お前と会って話した事も、全部……」

彼は安らかな顔になる。

呼気が落ち着いてくる。

優しい歌を聴かされているような気分。

穏やかな気持ちだった。

川が流れていく。

視界を、光が包み込んでいくようだ。

.....。

.....。

.....俺は、あいつの為に此処に来て。戦ったんだ。

それは、彼の口元から、呟きとなって流れる。

最期の言葉。この世界との、別れの言葉。.....。

「馬鹿を言うな。オレはお前なんて嫌いだからな、それから、お前のバックにいるお前の思考の根幹にいる奴は、もっと大嫌いなんだよ」

白と黒のドレスを纏った青年は、壁を殴り付ける。

手の甲の皮が破れて、血が流れた。

死に際の彼は、安らかな顔をしていた。

「そいつ、人間の歴史を終わらせたいとまで言っていた奴だぞ？ お前は、憎悪してでも、生きればいい。苦しいだろ？ 身体を焼かれて、憎いだろ？ 敵が。戻ってこい。オレは、お前の仇なんて、絶対に討ってやらない」

彼は、病室のドアを開いた。

そして、踵を返す事無く、出ていく。

今から、一時間程前の出来事だった。.....。

.....。

十

ルアーージュは、背中に翼を生やして飛ぶ。

鳥になって飛ぶ要領は中々、難しい。彼女が臓物の草原を渡る際に、この移動手段を避けたのは、それも理由の一つだった。

どうにか、バランスを崩さないように、翼を羽ばたかせながら、最上階へと辿り着く。

窓から中を覗く。

異様な光景と、中央に微動だにしないルルイエがいた。

彼女はしばし、安心する。

そして、ルルイエに声を掛けた。

「ルルイエ様、現状はどうなっているんですか？ わたし、姉さん達を探しているのですが」

「ニアスなら。貴様と入れ違いで、階段を降りていった。無事だ。ルアーージュ、貴様も、此処から離れるんだな。もうすぐ、私の『ニユクスの母体』が完成する。その時に、貴様も巻き込まれる虞がある」

ルアーージュは困惑したような顔をした。

何だか、自分が役立たずみたいだなあ、と思った。

そして、フィア・ゾーンとアンサーの死を報告する。

彼は、そうか、と呟いただけだった。

少しの間の静寂。

窓際に置いていた黒い布。

その中から、笑い声が漏れ出してくる。

ルルイエは不快そうにそれを見る。

「ふっふっふっ、はははははははははは」

薄気味悪い笑い声。

「……ルアーージュ。何の為にそいつを運んできた……？」

「……えっ？」

ルルイエは不快そうな顔をした。

黒い布が落ちる。

瓶詰めはヒビが生えていた。そして、容器の中から、中身が漏れ出してくる。

「すまん。ルアーージュ、やはり、そいつはちゃんと始末しておくべきだったな。お前は、そいつの運び屋をさせられていたんだ。……なあ、お前の名は何だったか？ それがお前の能力なのか？」

「私の能力？ 違うぞ？ 私はただただ、彼女に囁いていただけだぞ。お前の姉さんは、今、どうしているんだろうなあってさあ。お前の王様はひょっとしたら、お前の事、いらないんじゃないかなあ、ってなあああ」

底知れない不気味さ。

ルルイエは立ち上がった。

瓶は完全に割れていた。

そいつの肉体が形成されていき、人の姿を成していく。

「私の名前はインソムニア。不眠症という意味の能力者。貴様らを地面にぶちまける為にやってきた死神だよ」

「……ルアーージュ。こいつは、貴様と同じように。何らかの手段で、肉体をバラバラにされても死なない。そういえば、聞く処によれば、何故かニアスの『モーザ・ドゥーグ』も効かなかっらしいな。どうしたものかな。当初の予定通り、私の能力の実験に使ってみるか？」

そいつは完全に人間の肉体に戻っていた。

服も、肉体を構成している一部なのか、全て再生している。

漆黒の死神のような服だった。

黒いカットソー。黒いブリッツ・スカート。スカートから吊り下がった、赤い血糊のような線の走るレッグ・ウォーマー。金髪に赤と紫が混合されている。首筋には緑のエクステンションが靡いていた。

両眼は血走り、真っ黒なアイシャドウで塗られている。唇も黒い。

左手には、大きな鎌を抱えていた。

「二人とも、よくも狭い瓶の中に閉じ込めてくれたな。これからナマスにしてやる。覚悟はい

いか？　どんな死体になるんだろうなあああ？」

ルルイエは呆れたように息を吐く。

彼の両手には、いつの間にか、無数の人間の指が納められていた。

ルルイエは、指達を地面へと落とす。

死神は、左手で鎌を持ちながら、右手の中に何か黒いものを収束させていた。

地面から、幾つもの大きな指が這い上がってくる。

インソムニアは右手をルルイエへと向けた。

轟音。……。

宮殿の一部に、大きな孔が開く。

ルアージュは、思わず、身を屈めていた。

そいつの背中に、朽ちた三つ首のドラゴンが現れる。

そいつは、全身に瘴気を纏っていた。

「まだまだ、行くぜ。私の『キルリアン・ストリーム』はちょうど、此処が都合がいいからなあああ？」

対峙するルルイエは、彼女の攻撃を避けていた。

そして、即座に今の攻撃を分析する。

……全身から、放たれているオーラが禍々しいな。おそらく、こいつは大気中にある、何かを撃ち込んでいるように思えるが。……？

彼女は、口笛のように、聴き慣れないブラック・メタルのメロディーを口ずさむ。

そして、もう一発、攻撃を撃ち込んできた。

破壊音。

振動。衝撃。

十

振動と衝撃が、階下にも伝わってくる。

宮殿全体に轟音が響いている。

「最上階で何が起きているんだ？」

フェンリルはニアスに訊ねた。

ニアスは首を横に振る。

「分からないわ。ねえ、あたしはもう行く。あなたはどうするの？」

結局、彼はニアスに怒りをぶつける事は無かった。

ただ少し、会話をして、終わった。

彼は彼女に、巨体の男の死を告げた。それから、赤い少女の死も。

ニアスは溜め息を吐く。

「何なのかしらね、あたし達って……」

思わず、そう呟いた。

沈黙。

黙示。

「空回りしてばかりだな」

白と黒を纏う美青年は、そう言った。

不思議と、それは漏れ出ている。

「止められるものなら、止めるべきなんだと思う。あたしはもう折れてしまった。これ以上、誰かが死ぬのを見たくない。何だか自分勝手だけど、今ではそう思う。あなたもそうなんですよ？」

青年は首を横に振る。

「オレが怒っているのは、オレ自身なのかもしれないな。フィア・ゾーン、オレの手で、殺してやりたかったが。……ダメだった……」

「……あたしと話していいの？ 上の階に進まないの」

「……その処なんだが。実は、空間把握を使っていて。進めない。少し、危険過ぎる、中で誰かが戦っているのか？ ……」

「……分からない。でも、ルルイエ様はあたしに離れろって。危険だから、だから、これ以上、いたら。あたしも彼の作り出す、人形へと変わる。それは避けろって。ねえ、聞いて欲しい事があるのだけどいい？」

「なんだ？」

ニアスは今にも、泣きそうな顔をしていた。

「妹……あたしと同じ顔の妹。あの子とあたしは違うの、決定的に、どうしようもなく」

「……？」

フェンリルは首を傾げた。

ニアスは言葉を続ける。

それは、どうしようもない告白。

「あたしは、実は、“生きている人間”なの。死んでない、転生なんてしていない。その、ルルイエ様の能力で“別のもの”に変わった妹と違って。あたしは生者だ。その眼を背けていた事実を、さっき直視してしまって。……ごめん、あなたには意味が分からないかもしれないけど。確かに、あの洞窟でモーザ・ドゥーグを発現したけれど、……いや、この力は、ずっと持っていた。洞窟に行く前から。十七の時、この力を使って、妹に……妹に実の母親を殺させた。あたしが妹に殺させたんだって、ずっと眼を背けてきた。……」

フェンリルは、全身を焼かれて死んだ青年の事を思い返す。

彼もそうだった。言葉に出してくれなかったが、重く押し掛かった罪悪感に焼かれるように、生きていた。結局、その事に関して、話せなかった。お互いに心を開けなかった。

何で、彼が暴君を信望していたのかも、分からなかった。

でも、人は何かを信じずにはいられないのだと思う。

「あたしは、汚れている。あたしは死ぬべきだ。でも、それすらも折れてしまって……」

フェンリルは少しだけ、ほんの少しだけ、彼女の事を理解する。



生きる事の中で、憎悪に身を焦がしながら育ったのだと。

色々な人間を憎みながら。

彼女を見ていると、まるで鏡面のように、そっくりそのまま、自分自身が映る。

この世界が、自分を否定する。どうしようもない、ズレ。

「オレは飛び越えたかった。何もかも。境界なんて無くなればいい、って。何処までも、何処までも、オレを縛るものが無くなるように。気持ちの悪い、この世界が無くなるように」

少しだけ、自分の事を話す。

そして、優しく、彼女を抱き止めた。

ニアスは髪を振り乱して、泣いていた。

フェンリルは嘆息する。

そして、首を横に振って、彼女を振り解いた。

「ごめん、やっぱり、敵だから。触れて欲しくない」

「そう……」

「ごめん。オレ、女、嫌いだから。気持ち悪い。男も嫌いだけど」

ニアスは俯く。

何だか、お互いに傷付いたような顔。

お互いに、刃物みたいで、傷付けるしかないといった顔。

噛みあわない二人。……。

また、最上階で。振動と衝撃音が走る。一体、上ではどうなっているのだろうか？ そういえば、轟音の数は、彼女と会話している間に、一体、何回あった？

分からない、少なくとも、なるべく早く行った方がいい。

ニアスは、声を振り絞って、言った。

「妹を自由にしてあげて。あの子の顔は、本当は、あたしと似ていない。今の彼女は、あの、赤い少女、アンサーの前に作られた人形。あれはもう、楽にした方がいい。生前と同じように、意思はあるけれど。……」

「そうか、オレは行く。……しかし、困った。ここから先、物凄い気分が重い。全身に、悪夢が纏わり付いてくるかのようで」

フェンリルは階段を昇っていく。

そして、振り返らない。

後には、ニアスが一人、残された。

ぽつん、と一人。

静寂。

ふっと、何かが横切ったような感覚だった。

そいつは、そこに立っていた。

以前よりも、漆黒で。以前よりも、眩く。

白と黒を纏う、少女。

そいつが、腕を組んで、立っている。

「あら？ 貴方、嫌われたものね？ ちょっと気に入ったタイプだったんでしょう？ 振られたのよ。残念ね。でも、良い事言うわよね。男も女も嫌いだって。私なんかもそうなのよね、男は気持ち悪いし、女は胸糞悪いし。本当に、みんな不快だわ」

少女は微笑する。

冷然とした負の感情。

「煩いわね。あなた、いつから、そこにいたのよ。ってというか、あたしの能力下から、自力で抜け出してきたの？ 癩に障るわ」

「これでも結構、苦労したのよ？ 自分自身の精神世界から抜け出すのは。でもまあ、貴方の主人の行く末が見れそうで、何より」

ニアスは、むかむかと腹が立ってくる。

「煩い、煩い、このナルシスト。あんたみたいな、誰の事も好きになれない奴に、あたしの気持ち分かかって溜まるか。守りたい人もいない癖に」

「へえ。貴方は私の事を理解した、とでも？ なるほど、確かに私には、他人を好きになるとか、愛するとかいう感情が欠落しているかもしれないわね。でも、逆に分からないわ。貴方達は何で、そうやって誰かを信じずにはいられないのかしら？」

遠回しに、ルルイエの事を言っているようにも聞こえた。

ニアスは腹の底から、怒りが湧いてくる。

先ほどまで、沈んでいた感情が、一気に湧き上がってくる。

「もう一度、モーザ・ドゥーグで沈めてあげるわ。二度と戻ってこれないように、強く強く、当てて上げる」

「無理よ。だって、私の方が既に、完了しているから。今回は」

ニアスはどうか、怒りを静めようとする。

相手の方も、ふっ、と息を吐く。

そして、ふと、無感動な顔になる。

改めて聞くと、透き通るような声。

「貴方は死なないと思うわ。生き残る。上の階の奴らが、何してこようが。私の『エタン・ローズ』に巻き込んだから。問題は、貴方はこれから、何を信じて生きていくのって事。主人も妹も失って。何を？」

まるで、突き刺さるように言った。

ニアスは少し、沈黙した後、口を開く。

「そういえば、聞いてなかったわね。貴方の名は？」

「ああ。私はレイア。永遠の少女。……永遠の処女性。どうしようもないもの。貴方の主人がそうであるように。私もまた、この世界の異なった可能性からやってきた。ルルイエいるでしょう。あれが、貴方が呼んだものなら。私はフェンリルによって呼ばれた。私は フェンリルの能力によって生まれたものらしい、時間も空間も逸脱して、この世界とは異なる枠組みからやってきた者。在り得ない存在。そうね、貴方は知っておいた方がいいわね」

光と闇が、光明と暗黒が、更に周囲に満ち満ちていく。

まるで、崩壊するかのように。

時間も空間も、何もかもが、バラバラにされてしまったかのような。

過去も、現在も、未来も。何もかも解き放たれて、何もかもを閉ざしてしまったかのような。

光の粒が現れては消えていく。

そして、それは巨大な暗黒へと凝縮されていく。

四方の空間が生まれては、消し飛んでいく。その繰り返しが行われる。

「かつて、フェンリルは物語を書いた。大きな物語。大叙事詩。その登場人物が私。きっと、彼は詩人の才能もあったのかもしれないわね。その物語を飛び越えて、私はこの世界に現れた……、自らの意識を映すであろう、鏡の向こう側の世界からね。……そういう事になっている。……問題は主体としての私は本当に存在しているのかって事。フェンリルの能力の一部が私なのか。それとも、私は私として、存在しているのか……？ 分からないけれども、だからこそ、私はきっと、それすらも飛び越えたい。ひょっとすると、フェンリルと、この世界全ての方が、私が見ている夢なのかも……。少なくとも、私にはその考えの方が魅力的」

彼女は憤りと、憎悪の混同した眼差しをしていた。

自分が彼の付属物でしかない、という可能性が絶対的に赦せない、と。

そういう剥き出しの激情。

光の粒を、ニアスは見ていた。見とれていた。

「これは何？」

ニアスは訊ねた。

この現象、一体、何なのか。まるで理解不可能だが。

「これは、『亡びの光』と、取り合えず、呼んでいる」

永遠の少女は言う。

彼女は何者なのか。一体、何なのか。

「これが、あなたのエタン・ローズの能力なの？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも。……そうね。媒体はルルイエ。私のエタン・ローズなんだけれども。時間と空間と、存在の隙間とでも言うものに隠れてしまう能力なのかもしれない。それは、普段なら相手の認識を操作するという現象を主に引き起こすのだけれども。たとえば、貴方の主人であるルルイエのような、“在り得ないもの”が近くにいる場合。私のエタン・ローズの力を、広げ続けていくと。この世界に行き着くの。貴方を、今、そこに巻き込んでいる。干渉し合っているのか、それとも、入り口となっているのか分からないけれども。そうね、私とフェンリルは。これが、何なのか。そして、“在り得ないもの”とは一体、何なのかを探求する旅を続けている」

ニアスは絶句していた。

完全に自分の理解を超えた存在。

何度も、光の爆発と、闇の生誕が行われている。

更に、天井だった筈の、今は真っ暗な場所が、ガラスが割れるように崩れていき。

大量の樹木とも蔓とも付かないものが現れる。

それは、円環を描くように渦巻いている。

まるで、沢山の生き物に繋がっているように見えた。

そう、この樹木の先には、沢山の生命があるのだろう。

ニアスは息を飲む。

進化と退化。歴史の先と、歴史の前。くるくる、ぐるぐる、樹木は回転している。

「何なの？ これ……」

やはり、ニアスには理解不可能だった。

幾ら、説明されても、分かるわけが無い。

圧倒的な不可知で理解不可能な世界。

「そうね、鎖から解き放たれた世界。とっていいのかしら？」

レイアは淡々と言う。

まるで、こんなもの、何でも無い、とでも言うように。

「多分、どこの宗教も、この世界を見ようとしていたと思うの。もしかしたら、神の世界と呼ばれる場所が此処なのかもしれない」

そういえば。

これは、何だか、あらゆる宗教圏のあらゆる世界にも似ている。

似ている、というよりも、何処かで知っている、イメージの集合体。

「これは、行き着いた可能性と行き着けなかった可能性の環、渦。その中の不確定原理とでも呼べるものの中で、私達は生きている」

「行き着けなかった可能性？」

そうよ、と彼女は言った。

「たとえば、能力者の持っている、能力は人類に与えられなかった、在り得たかもしれない、可能性から降りてくるものだ。きっと、この環のどれかから、所謂、突然変異的に……むしろ、人間の精神が、この世界からの力を望んでいるのかも。在り得なかった可能性からの力を、ね」

レイアは言う。

「これが、私達の生きている世界。気も狂わないばかりの、どうしようもない。外側の世界。でも、これって本当に、馬鹿みたいじゃない？」

まるで、どうでもいいと言わんばかりの口調。

本当に、心の底から、無感動に彼女は言った。

光の渦が現れては消える。

闇の膨張も、現れては消える。

今にも崩れそうな基盤。

そして、更なる創造を繰り返す。

「こんな世界、別に凄いなと思わない。この景色を、感動的だと思う人間もいるのかもしれない。でも、私は思わない。この世界の構造。この世界の外側の世界。でも、それすらも、鎖に繋がっていると知らない？」

彼女の眼は心底冷め切っていた。

ニアスは、ただただ、彼女の言葉の続きを聞く事しか出来ない。

「ただ、これは、私と貴方が、認識しているものの一部にしか過ぎない。おそらくは、更なる先、更なる不可知なるものが存在している、一体、何処まで行くのかしら？」

冷え切った、無感情な声音。

何だか、酷く詰まらなそうな。

多分、彼女は“この世界”も好きじゃないんだろうなあ、とニアスは思う。

そこまで強い、さながら、空虚とでも言うべきものを。

信じるべき基盤なんて、自分以外に何も無いとでも言わんかのように。

もし、ニアスだったら、絶望の淵へと消えてしまいそうなくらいに。きっと、この世界にいる、という事を好きにならない。何と言おう、このズレ方を。

そう、たとえば、それは“狂気”とでも言うかのような。

狂っているなあ、と。

思わずには、いられない。

余りにも、陳腐な感慨かなあ、とも思うが。

「私は触れられたくない。何処までも、何処までも。きっと、更なる孤独が私を襲うのだろうけれども。私はそれに光を感じている。貴方は理解なんてしなくてもいい。でも、それが私が向かうべき意志なのだから」

渦と円環の流れ。

行き着いた可能性と、行き着けなかった可能性。

ニアスはふと、思う。

もしかしたら、自分と妹にも、別の可能性があったんじゃないかと。

あの暗い洞窟に着く頃には、妹は死を迎えていた。

二人で入る墓を探して辿り着いたのが、あの洞窟。

暗黒の地で、本当は、自分も死ぬつもりだった。妹と共に。

けれども、ニアスは心から願いもした。

妹を、そして、私の人生を、生き返らせてください、と

妹が母親を殺した時から、数年間、必死で二人で逃れ続けて。

ニアスはいつしか、二十を超えていた。

そして、その代償として。

代わりに、妹が病に倒れた。

ニアスは、思う。自身もまた、在り得た可能性と在り得なかった可能性を反転させながら、生きてきたのだろう、と。

目の前にいる、光と闇を纏う少女を見ながら、ただ。

何だか、羨ましいな、と。

夜風が吹き抜けている。風の流れは強い。

もうじき、夜が明けるのだろうか？ 日の出は、まだ来ない。

ルアーヂュとインソムニアが対峙していた。

少しの間の静謐、刹那の中。呼気が漏れる。

ルアーヂュは、自分の主人を守る為に、そこに立っている。

戦うしかない、という意味。

くっくっくっ、と死神は笑っている。

自分の能力を使って、目の前の敵を倒すしかない。でも、一体、どうやって。相手も不死身だ。そして、多分、自分なんかよりも、よっぽど戦いの経験を積んでいる。

ルアーヂュは決意を固める。

ふと。思った。果たして、自分は夜明けを見る事が出来るのだろうか、と……。

それでも、今、戦わなければならないのだと。静かに。

自分自身の肉体を変化させていく。

一体、どうすれば、この敵を倒せる？ 殺せる？

どのような生き物に変化すればいい？

ルアーヂュは悩む。

草食動物。肉食動物。鳥類。魚介類。昆虫。植物。

ルアーヂュは考える。

虫。

それが、多分、一番いい。

でも、まずは、奴の頭蓋骨を食い破れる奴だ。

ルアーヂュは自身の肉体を分解していく。

対する、不眠症の死神は、再び、巨大なエネルギーの塊を撃ち込もうとしていた。

あれは、明らかに、対戦車ミサイルくらいの威力はある。

ふと、自分は何の為に戦っているのだろうかと思った。

主人の為。それとも、姉の為？

本当に戦いたいのだろうか、と。

また、砲撃を飛ばしてくる。

ルアーヂュは、既に分離した肉体の一部を、カミキリムシの群れへと変えていた。それで、襲い掛かる。死神の少女の右手に虫達は噛み付いていった。

砲撃の軌道が反れる。

また、宮殿の一部に大孔が開く。

主人には当たっていない。また、彼は瞑想に戻っている。

阿鼻叫喚の悲鳴が、更に増していく。

死神は、彼らを助けようとはしない。そんな気配も無い。

ルアーヂュは気付く。

ああ、こいつはきっと、楽しければいいんだなあ、と。

戦いだけでなく、自分の生も死も。全てが滑稽に見えて仕方が無いんだろうなあ、と。

自分の肉体の損壊。それが楽しくて仕方が無いといったような感覚。

それが、伝わってくる。

それは、マゾヒズムなのだろうか？ あるいは、ナルシズム？ 分からない。

それでも、分かる事がただ一つ。

こいつは、頭がおかしい。そうとしか思えない。

生きる事も、死ぬ事も、全部、踊りを踊っているようなもの。

死神の少女は、また、右手に瘴気を纏うエネルギーを溜め込んでいる。

先ほどの攻撃が外れた事など、特に気にする素振りを見せない。更に、ルアーージュが反撃してくる事などもおかまいなしだ。

大体、こいつが何をやっているのか分かってきた。

この死神が集めているエネルギーは何なのか。

おそらく、それは“負”と呼ばれるものではないのか？

しかし、そんなものが実体として、この世界に存在するのだろうか。いや、少なくとも、こいつの認識からすれば、存在するのだろう。世界に散らばった、周囲の空間に散らばった“負”のエネルギーを、憎しみとか怒りとか悲しみとか殺意だとかのエネルギーを。

右手に集めて、それを砲弾へと変えて撃ち出す能力。

まさしく、死の踊りのような能力。

しかし、ルアーージュは、すぐに反撃の態勢が整っていた。

先ほど、カミキリムシへと変えた、肉体の一部。肩の肉と腹の肉、右腕の一部。それは、今や別の生き物に変化している。

それは、ホオジロザメだった。小さいが、確かにサメだ。

そいつが、死神の背中にむしゃぶり付く。

死神の少女は、その攻撃を意に介していない、サメに肉を食われながらも、なおも、右手にエネルギーを溜めている。コケにされているのか？ ルアーージュはそんな念が頭を過ぎる。こいつは、痛みを感じないのだろうか？ 彼女自身、痛みなんて感じない、頭で作られる神経伝達を、身体の何処かの器官で分断している。こいつも、そうなのか？

「ルアーージュ。もう少し、粘れ。もうすぐ、私の能力が完成する。そうすれば、その敵など、私の能力の一部に変えられる。粘れ」

主人は、彼女にだけ聞こえる声で言った。

気付くと。

いつの間にか、死神の左手から大鎌が消えていた。

ルアーージュの心臓の胸が高鳴る。いつの間に？

ルルイエが眼を開いた。

そして、飛んできたものを、つかみ取る。

「馬鹿にしているのか？」

ルルイエは、大鎌を投げ捨てて、敵の方を少しだけ睨むと、また瞑想へと戻る。

ちえっ、と敵は笑う。自分の策は浅薄だったな、といった笑い。

「やっぱり、分かりやすく、お前らを吹っ飛ばしたり、叩き切ったりする方が、私には向いているよなあ」

貪り付いてくる、サメの顎を左腕だけで引き伸ばしながら、彼女は、次の攻撃が充電を終えた事を確認する。

右手からの再びの、紫紺の閃光。

今度は、軌道がルルイエの方を向いている。

ふん、と彼は呆れたような声を出す。

地面から巨大な腕が咄嗟に現れて。

その攻撃を受け止める。

「いい加減に、無駄だと悟るべきだな。貴様が何をしようが、私達の目的を止める事は出来ん」

「ああ、そうかよ」

インソムニアは、笑う。

突如。

周囲の悲鳴と叫喚が激しくなる。

いよいよ、ルルイエの能力が完成を間近に迫ろうとしていた。

人間は人形になり、人形は人間になる能力。

この世界の在り方、構造をそっくり、変えてしまう力。

インソムニアの眼から、笑いが消えていた。

さすがに、まずい。……そう思ったのだろう。

ルルイエは立ち上がった。

「完了した。この場にいる者達を起点に、世界が変質していく。どうやら、新しい歴史が始まるのだろうか」

泥人形達が少しずつ、少しずつ、動き始めていた。

ルアーージュは歓喜していた。

人形達が、腕を、脚を、眼球を動かし始める。

そう。

彼らは、それぞれ、何らかの“能力”を持っている筈だ。

計画は、これで完了した。

元々は、フィア・ゾーンが考えた計画だった。

ルルイエの能力を限界まで使ってみるとどうなるのか？ そして、人柱として、触媒として、生きた人間をそっくりそのまま使って、試してみたい。

フィア・ゾーンが観たかったであろう世界。

一体、人間と人形がそっくりそのまま入れ替わって、更に、そいつらが新たな世界の創造主を崇めて、動き出したとすれば？ フィア・ゾーンの望んでいた世界。

人形を人間に近いものに変質出来るのならば、おそらくは、……ルアーージュの件……があったように。人間を人形にする事も出来るのでは、と。



「ルアーヂュ。貴様には悪い事をした、とニアスは言っていた。貴様は、私をこの世界に呼び込んだ時に。“人間から人形”へと変わったのだ。生きた死体へと。貴様が、再び、人間へと戻った時、どんなものになるのか。私には分からない。だから、逃げろ、と言ったが。……でも、貴様はそれを選ばなかった。そうだろう？」

瞬間。

ルアーヂュの肉体が、ぼろぼろに崩れていくのが分かった。

そのまま、人形から人間へと変質していく際に。

その肉体が失われようとしている。

「人形とは何なのだろう？ 人間とは？ その境界が私には分からない。けれども、ルアーヂュ。確かな事がある。ルアーヂュ、貴様は死人なんだ。人形として加工される事も無かった死人。ただの死体。死体は只の人間でしかない。だから、貴様は人形になった。私がこの世界に降ろされる瞬間にな。姉も私も貴様を此処に連れてきたくは無かった。けれども、貴様の命運は決まっていたらしい」

ルアーヂュの顔面の皮膚が崩れていく。

足元も覚束ない。ひょっとして、腐っているのだろうか？

けたけたけた、とインソムニアは笑う。

彼女にも『ニユクスの母体』の余波を受けており、少しずつ、全身が変質していつている。

肌の色がかさかさに乾いている。人間から人形へと変わっていく瞬間。

「美しい光景だなあ？」

彼女は暗黒そのもののような事を言う。

そして、宮殿の外を目指すべく、孔の開いた場所へと向かう。

だが。……。

ルアーヂュは、崩れていこうとする全身を、一度、能力でバラバラにする。

そして、まだ使える『メアズネスト』で、肉体のパーツを生き物へと変えて、インソムニアの身体にこびり付いた。

蛇やワニの頭部、豹の頭部、虎の爪、カマキリの鎌、それらに変化していき、インソムニアの全身に絡み付く。

「……わたしが何なのか、なんてもうどうでもいい。でも、お前だけは、道連れにしてやる。ルルイエ様と、姉さんのために」

インソムニアの顔が。

此処で、初めて蒼ざめる。

もう、悲鳴、叫喚は聞こえない。

人間であった者達は、土塊へと変質していく、人形の側へ。彼らは柱の一部となり、柱と同化していく。

そして、泥で作った者達。それらがわさわさと、歩き出している。

「やっと辿り着けたと思えば。……この惨状か」

凜然とした声。

そいつは、階段の下からやってきた。

白と黒のドレスを纏った美少女顔の青年。

フェンリル。

「たった二階分の階段を上がるのに。この重圧。問題はオレの方だろうな。お前らのいる、この空間に。巧い具合に、“飛べない”から、歩いてくるしかなかった。それから、ちょっと彼女と話す時間が長かった。此処に来るのに、随分、苦労したんだぞ？ 寒気と恐怖に打ち勝つつにな。

でも、来れた。少なくとも、オレは自分自身をその点に関しては褒めるべきだろうが」

彼は、両腕に剣を構えている。

「ルルイエ。今すぐ、お前の能力を止めろ。お前の目的は大体、分かった。世界の構造を変質させるんだろう？ 全ての“人間を人形”へと変えるんだろう？」

「そう、そして。私の創り出す、全ての“人形を人間”へと変える」

既に、ニュクス之母体の能力は、フェンリルの皮膚も変化させていた。

皮膚の表面が土に、あるいは石に、鉱物に変化していく。

それでも、彼は立っている。

インソムニアは、もはや生物の形状をしていない女に絡み付かれながら、叫んだ。

「お前、フェンリルか？」

「……インソムニア？」

二人は、お互いの顔を見る。

ルルイエは思わず訊ねていた。

「知り合いか？」

二人共、不機嫌そうな顔をする。

「昔のな、今は違う」

「そういう事、だから、お前はせいぜい、オレの邪魔をしない事だな」

死神の少女の全身は、ぶるぶると震える。

「フェンリル。てめえ、この私を助けるよ。昔のよしみだろ？ 見捨てるつもりかよ？」

白と黒のゴシック・ロリィタの青年は、彼女の方から眼を離す。

「ルルイエ。オレはお前の目的を打ち砕きたいんだが？」

青白い肉体をした、痩せた男は笑った。

それは、心の底からの笑い。哄笑。

「どうやってだ？ 私の能力はもう、完成した。後は、貴様らも人形へと変わって。この宮殿の一部になるのを待つだけだ。そして、此処を起点として、この街は人形達の街へと変わる。私を崇拝するものは、この力の余波から外す。そして、私の王国が作られる。そう、フィア・ゾーンの目的を叶えてやりたい。奴はもう死んだのだろうか？ 奴は私に生きる目的を与えた。叶えてやりたいと思ってな」

「ふん」

フェンリルは、壁を勢いよく蹴った。

そして、その衝撃のエネルギーを瞬間移動させて。

ルルイエの腹に叩き込む。

何度も、何度も、壁に蹴りを叩き込んだ。

ルルイエの全身は吹っ飛ばされていく。宮殿の外へと。

上空。

彼の肉体は遥か地上へと落下していく。

フェンリルは、宮殿の外に飛ぶ。

両手には、二本の剣を構えていた。

二人の勝負は、大地に激突する前に決着を迎える筈だった。

「ジャンクにしてやるよ。廃棄物に。名も無い土に。ルルイエ、お前の敗北だ！」

フェンリルは、剣の一本を空中で、ルルイエの腹の中へと差し込んでいた。

ルルイエは笑い続ける。

彼の懐の中から、掌の中へと。そして、それは種を撒かれるように地面に先に落とされる。

巨大な指が、腕が、地面から生え出してきて。二人を握り締める。

とっさに、フェンリルは、飛んで逃れる。

そして、宮殿の壁に剣を突き刺していた。

ルルイエは、腹に刺さった剣を投げ捨てる。

フェンリルは、口から血を吐いていた。

地面からの拳が、胸の辺りをかすめていた。

肋骨にヒビが生えている可能性が高い。

それに、肉体の人形化が進んでいる。

「もう、終わりか？ 楽になれ」

フェンリルの顔から、冷や汗が流れる。思考する。

倒さなければならない敵。

まだ、彼が諦めていない事に、ルルイエの方も気が付く。

彼は、地面に、人体のパーツを落とす。

芽吹き。

幾つもの、拳が現れる。

「これで、止めを入れる。貴様は完膚無きまでに殺しておいた方がいいだろうからな」

そう言いながら、彼の方も、少しだけ焦りが見えていた。

.....フェンリルの能力である瞬間移動。

それが、予想以上にやっかいな事に既に、気付いていたみたいだった。

だが、時間を稼いでいれば。どの道、致命的な打撃を与えられなくとも、相手の人形化が進んで、動けなくなる。それを待てばいい。

ルルイエはそう考えていた。

だが、状況は一変する。

宮殿の最上階で爆発音がした。

建物の一部が崩れ落ちていく。

フェンリルは、自分の方へと向かってくる瓦礫を、次々と、何処かへ瞬間移動で消し飛ばしていく。

瓦礫はルルイエの乗っている、腕の方へと向かっていく。

フェンリルは状況を把握していた。

突き刺した剣を引き抜いて、ルルイエの方へと投げ付ける。

そして、自分は地面へと落下していく。

ルルイエは、投擲された剣を難なく避ける。

「ふん、そんなもの、かわせない、私とでも……」

それは、上空から稲光のようにやってきた。

漆黒の怪物。

大鎌を振るって。

フェンリルの剣が、彼の注意を逸らしたのと同時に。

そいつは、ルルイエの頭部から、胸、腰、左足首を裂いて、一刀両断に切り伏せていた。

彼は、一瞬、何が起こったのか、分からないみたいだった。

しかし、気付けば、土塊の腕から投げ出されて、地面へと落下している。

そして、気付けば、全身を地面に叩き付けられている。

全身の骨が碎ける音が聞こえた。そして。

風を切る音がして。

彼の首が、大鎌によって、切り離される。

死神は、ずたぼろになりながらも、そこに佇んでいた。

フェンリルは察していた。

おそらく、彼女の負のエネルギーを収束する『キルリアン・ストリーム』によって、自分の肉体ごと撃ち抜いて。敵の拘束を解いたのだろう、と。

インソムニアは、首をこきりこきりと鳴らしていた。

「さてと。私はこれからどうするかな？ 後片付けとか必要かなあ？」

「そうだな。……取り合えず、最上階に残っている。人形達、人形から人間へと変質していった。新たな可能性、在り得なかった可能性からやってきた、能力者達。あれの首を全部、落としておいてやってくれないか？ まだ、多分、能力を完全にコントロールし切れていない筈。敵としてやっかいな事になる前に、それから。……人間から人形になってしまった奴ら。……彼らは元に戻れないなら。悲しいけれど、冥府に連れていってくれ」

「了解」

そうして、二人はそれぞれ、別れた。

街全体を飲み込もうとしていた、ニュクス之母体の広がり、止まっていた。

……………

気付いてみれば、此処の気候は少し、肌寒いと思う。

フェンリルは、服を着込みながら、街を歩いていた。

この街が一体、これからどうなっていくのかは分からない。

薬物を管理している、“管理所”と“保管所”は、どうやら、フィア・ゾーンとアンサーの二人によって、その全てが破壊されてしまっていたらしい。

もしかしたら、彼らは管理、保管していた薬物を何処かへと隠したのかもしれないが。今となっては知るよしもない。更に言えば、本当に、知った事じゃない。

街の住民は口々に、神へと祈っていた。

それは、教皇であり。あの、ルルイエであったりもした。

レイアはそんな光景を、やはり冷笑を浮かべて眺めていた。

一応、薬物の元となっている植物は、自然のものとしても生えている。

だから、もう少しは持つ。けれども。

住民から禁断症状が出るのは、時間の問題だった。

この街が更に、荒廃していくのは止めようの無い事実だった。

「コードをこんな場所に埋葬するのはどうかとは思いますが」

しかし、考えてみれば。彼の素性などまるで知らなかった。

名前しか知らない、それから、少しの過去のみ。

インソムニアは、インソムニアで。自身の目的を達成した後、すぐにこの街から出て行った。きっと、もう戻ってこないのだろう。

ただ、少しだけ。困った事がある。……。

全身に回っている、ニユクスの母体の人形化。

それが、無くなっていない。……。

「そのうち、消える方法を探しましょう。それに、期待薄だけれども、時間の経過と共に消えるかも」

と、レイアは言った。

フェンリルは考える。

また、このような敵に会う為に、これからも旅を続けるのだろうと。……。

能力者の能力は、この世界とは違った可能性から、やってくるものだ。

そして、今回みたいに、“神に類した”、在り得ないものが生誕するのは、度々、起こっている。二人は、それらを探す為に、そいつらに出会う為に、旅を続けている。……。

一体、この世界の先には、何が在るのだろうか？ 分からない。

自分は、一体、何を飛び越えようとしているのだろうか？ 分からない。

相変わらず、二人はこの街の食事を口にしなかった。

予め、持ち込んでいる食料を口にしている。

もう、そろそろ、この街を出ようと思っている。

ただ。

明日、此処にサーカスがやってくると聞いた。

サーカスの公演。

特に、興味も無いが。名残のようなもので、それを観てから帰ってもいいのではないかと思  
った。……………。

そして、その前に。……………。

宮殿の前へと向かう。

フェンリルは、そいつの姿を確認した。

神として君臨する筈だった男。

そいつは、石像のようになって、宮殿の前に横たわっていた。

只の、土塊へと戻っているが、そいつがこの世界に存在していたのだという証明として、人  
としての原型を保ちながら、ギリシャ神話においてのメドゥーサによって石にされた者のように、  
形を保ったまま、土塊へと変わっていた。

ただ、その全身は半分、砕け散っていて。首は分断されている。

人々は、そいつに近付かない。……………崇めるような者達もいた。

分からないな、フェンリルは思う。

何故、人は何かを信じずにはいられないのか、と。

……………。

そして、一日が過ぎた。

サーカスのチケットが配られる。

住民達の微かな希望に為ればいい。チケットを売っていた道化師は、フェンリルの理解出来る  
言語の言葉でそう言った。

そして、サーカスが始まる。

動物達の火の環くぐり。道化師達の玉乗り、人間ピラミッド。

フリークス達のダンス。人体切断マジック・ショー。

サーカスの途中、劇があった。その内容は、一国の王様が、沢山の兵士達を引き連れて、黄金  
の国を目指すという話。思わず、苦笑する。

途中、空中ブランコがプログラムの中に入れられる予定だったが、どうやら、裏側で問題が  
起こった為、中止になったらしい。それは、少し残念に思った。

サーカスの時間は長かった。

途中、眠気がしてくる。

気付くと、隣に、フードを目深に被った女がいた。

彼女は呟く。

「あたし達、まだ生きているのよね」

フェンリルは、面倒臭そうに返した。

「そうだな、オレも君も」

ニアスは、笑みを返す。酷く影のある笑み。

彼女は、配られている、ホット・ドッグとポップ・コーンをほうばりながら、ビッグLサイズ  
のコーラを口に運んでいた。

「それ、美味しいか？」

「サーカス側で配られている食べ物は、薬物汚染の影響を受けていないわ。あなたもどうかしら？」

「……いや、いい」

やがて、また途中に劇が挿入される。

今度は、ミュージカル。本当に何でもやる劇団だ。

有名なオペラが流れていた。

「ルルイエ様の能力だけでも、じきにあなたの肉体から影響は消えていくと思うわ。何日か、何ヶ月先か分からないけれど……」

「そうか、それを聞いて安心した。夜、眠れる」

二人の間で、……レイアも含めた三名の間で、沈黙が続く。

「これからどうするの？」

「オレは、旅を続ける」

「そうね、あたしはまだドーンの賞金首。これからどうしようか、考えているわ。妹も、もう、いないし……」

「能力者収容所に入るのも悪くないかもしれないぞ？ 罪の償いの為に……」

「そうね。……それも考えてみる」

そして、一時間後、サーカスが終わる。

フェンリルとニアス。

二人は、それぞれ、別の方角へと向けて歩き出した。

もしかすると、二度と会う事は無いかもしれない。

別れも告げずに。

二人は、それぞれの道を歩いていく。

明日、どうなっているのか分からない。

生きる目的、何も分からない。けれども。

彼らは、歩き出すのだった。……。ただ。……。

END